救急搬送データからみる
日常生活事故の実態

令和元年

東　京　消　防　庁
防 災 部 防 災 安 全 課

目　　　次

データ・用語 ・・・・・ 1

ピックアップ 1　身近に起きているこんな事故
- 〇　仕事中の事故 ・・・・・ 3
- 〇　乳幼児の窒息や誤飲の事故 ・・・・・ 7

ピックアップ 2　熱中症による救急搬送 ・・・・・ 11

第１部　令和元年の概要
- １　年別発生状況 ・・・・・ 15
- ２　年齢層別搬送人員 ・・・・・ 15
- ３　月別・時間帯別搬送人員 ・・・・・ 16
- ４　事故種別ごとの搬送人員 ・・・・・ 17
- ５　発生場所別搬送人員 ・・・・・ 17
- ６　初診時程度別搬送人員 ・・・・・ 18

第２部　種別ごとにみる事故 ・・・・・ 19
- １　ころぶ ・・・・・ 21
- ２　落ちる ・・・・・ 23
- ３　ぶつかる ・・・・・ 25
- ４　ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む ・・・・・ 27
- ５　切る・刺さる ・・・・・ 29
- ６　はさむ・はさまれる ・・・・・ 31
- ７　やけど ・・・・・ 33
- ８　かまれる・刺される ・・・・・ 35
- ９　おぼれる ・・・・・ 37

第３部　年齢からみた事故 ・・・・・ 39
- １　年齢層別での比較
  - ⑴　年別搬送人員での比較 ・・・・・ 40
  - ⑵　事故種別（その他、不明を除く）ごとの比較 ・・・・・ 42
  - ⑶　時間帯別での比較 ・・・・・ 44
- ２　年齢区分からみた事故
  - ⑴　０歳～５歳（乳幼児）の事故 ・・・・・ 47
    - ①　０歳～５歳 ・・・・・ 47
    - ②　０歳 ・・・・・ 51
    - ③　１歳 ・・・・・ 53
    - ④　２歳 ・・・・・ 55
    - ⑤　３歳～５歳 ・・・・・ 57
  - ⑵　６歳～１２歳（小学生）の事故 ・・・・・ 59
  - ⑶　１３歳～１８歳（中学生・高校生）の事故 ・・・・・ 62
  - ⑷　１９歳～６４歳の事故 ・・・・・ 65
  - ⑸　６５歳以上（高齢者）の事故 ・・・・・ 68
    - ①　６５歳以上（高齢者）・・・・・ 68
    - ②　６５歳～７４歳（前期高齢者）と７５歳以上（後期高齢者）・・・ 72

第４部　関連器物からみた事故

１　エスカレーター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７５
２　エレベーター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８０
３　自転車の幼児用座席・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８４
４　遊具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８７
５　ガスによる事故・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９０

データ・用語

日常生活事故

救急事故のうち、運動競技事故、自然災害事故、水難事故、労働災害事故、一般負傷に該当するものをいう。

分析データ

平成２７年～令和元年中の救急搬送データ（救急搬送したもの）における日常生活事故に該当するデータ

初診時程度

- 死亡・・・・・初診時死亡が確認されたもの
- 重篤・・・・・生命の危険が切迫しているもの
- 重症・・・・・生命の危険が強いと認められたもの
- 中等症・・・・生命の危険はないが入院を要するもの
- 軽症・・・・・軽易で入院を要しないもの

関連器物

受傷原因に直接または間接的に影響があった器物のことをいう。

事故種別

- 落ちる・・・・倒れた際に高低差の移動を伴って受傷したもの
- ころぶ・・・・倒れた際に高低差の移動を伴わず受傷したもの
- ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む（ものがつまる等）・・・食物または、食物以外のものを飲み込んで受傷したもの（目・耳・鼻へ異物が入ったものを含む）
- ぶつかる・・・人と人、人と物との衝突により受傷したもの
- はさむ・はさまれる・・・物体間または物体内に挟まれたもの
- やけど・・・・高温の液体、気体等により受傷したもの
- 切る・刺さる・・・刃物や鋭利物等により受傷したもの
- かまれる・刺される・・・動物や虫などにかまれた、刺された等により受傷したもの
- おぼれる・・・浴槽、プール、河川等で溺れたもの

年齢区分

- 乳幼児・・・・５歳以下
- 小学生・・・・６歳以上１３歳未満
- 中学生・高校生・・・１３歳以上１９歳未満
- 高齢者・・・・６５歳以上
- 前期高齢者・・・・６５歳以上７５歳未満
- 後期高齢者・・・・７５歳以上

東京消防庁管内

東京都のうち稲城市、島しょ地区を除く地域

ピックアップ1

身近に起きているこんな事故

東京消防庁管内では、令和元年中に日常生活の中で起きる様々な事故により約１４万５千人が救急搬送されています。ここでは、「仕事中の事故」と、乳幼児の特徴的な事故である「窒息や誤飲の事故」の発生状況を取り上げました。

仕事中の事故

1. 年別救急搬送人員

平成２７年から令和元年までの５年間で、２４，８２９人が仕事中の事故により救急搬送されています。令和元年は5,３１４人が救急搬送されています（図１）。

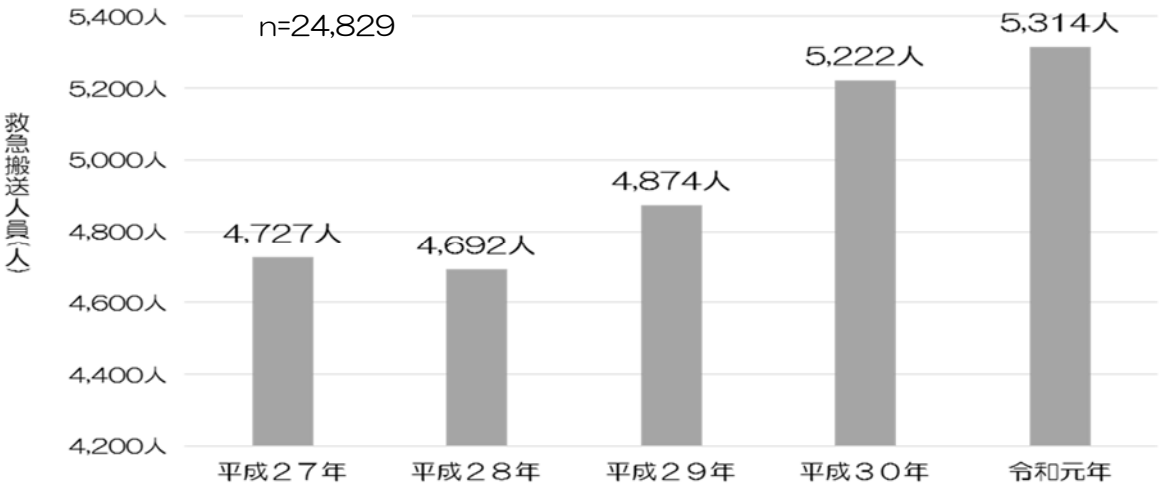


図１　年別の救急搬送人員

2. 年代別救急搬送人員

５０代が最も多く１，０７１人、次いで４０代が１，０５８人となっており、２０代から６０代にかけて多くなっています（図２）。

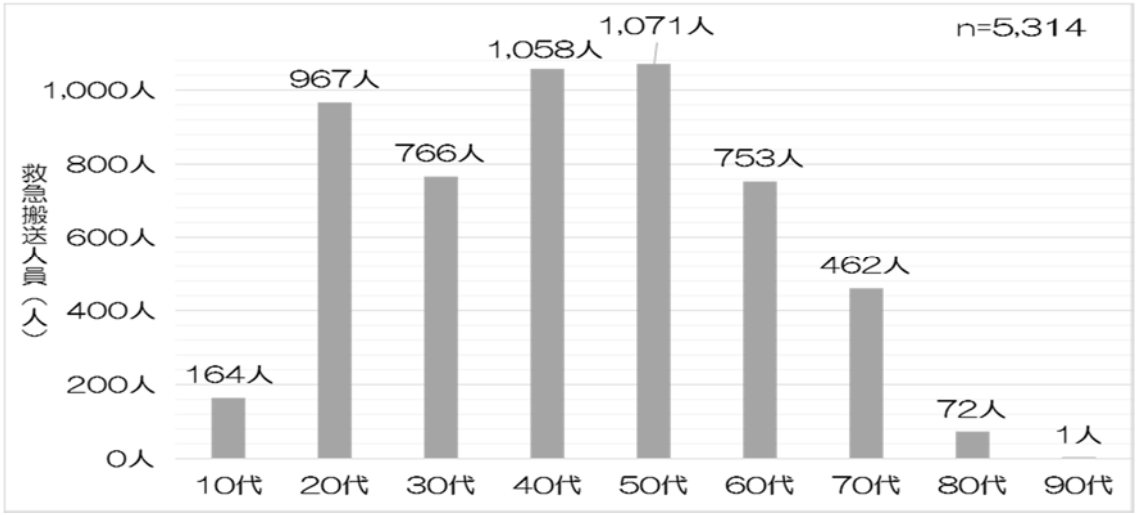


図２　年代別救急搬送人員（令和元年中）

3. 事故発生場所別の救急搬送人員

事故発生場所別をみると、会社・公共施設等が1,７４６人と最も多く、次いで店舗・遊技施設等が1,２５０人と多くなっています（図３）。

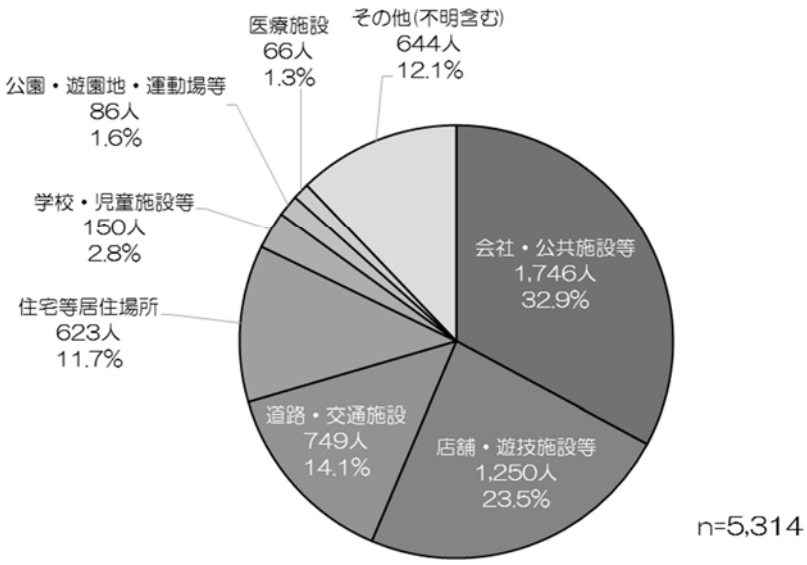


図３　事故発生場所別の救急搬送人員（令和元年中）

4. 初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度をみると、約４割が入院の必要がある中等症以上と診断されており、生命の危険が高い重症と診断されている事例もあります（図４）。

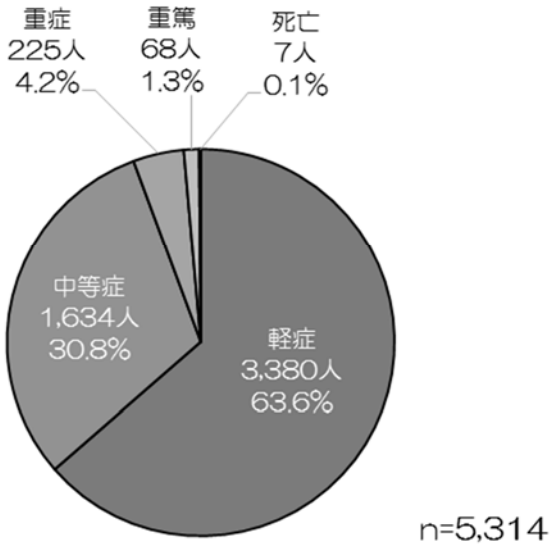


図４　初診時程度別救急搬送人員（令和元年中）

5. 関連器物別事故発生状況

関連器物別の事故発生状況（上位１０こ）をみると、脚立・踏み台・足場が４０３人と最も多く、ついで自動車の３０８人となっています（図５）。

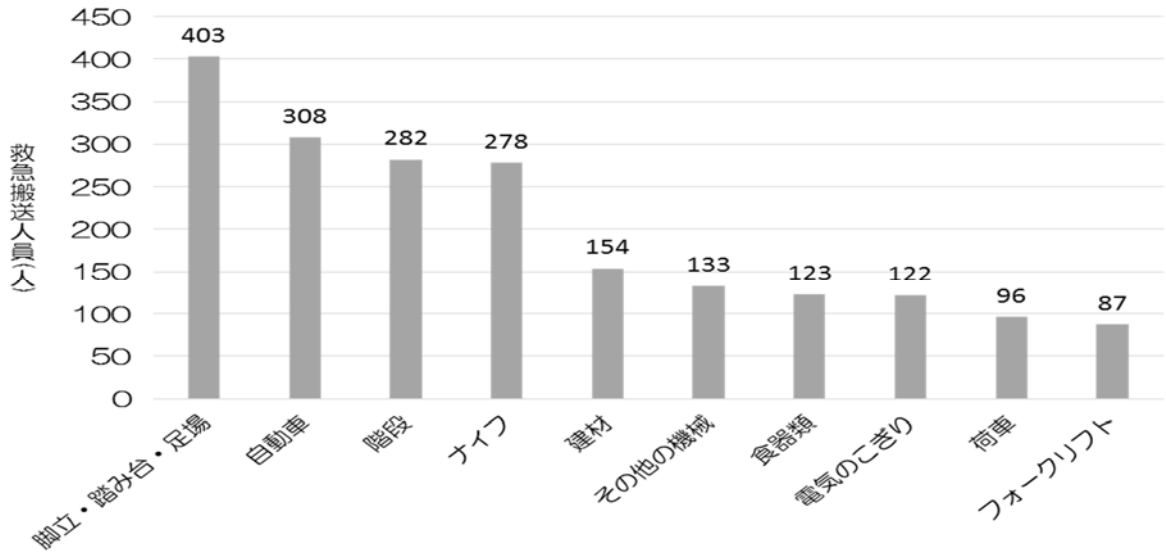


図５　関連器物別事故発生状況（令和元年中）

6. 事故種別ごとの救急搬送人員

事故種別ごとの救急搬送人員では、「落ちる」事故が最も多く、次いで「切る・刺さる」事故が多くなっています（図６）。

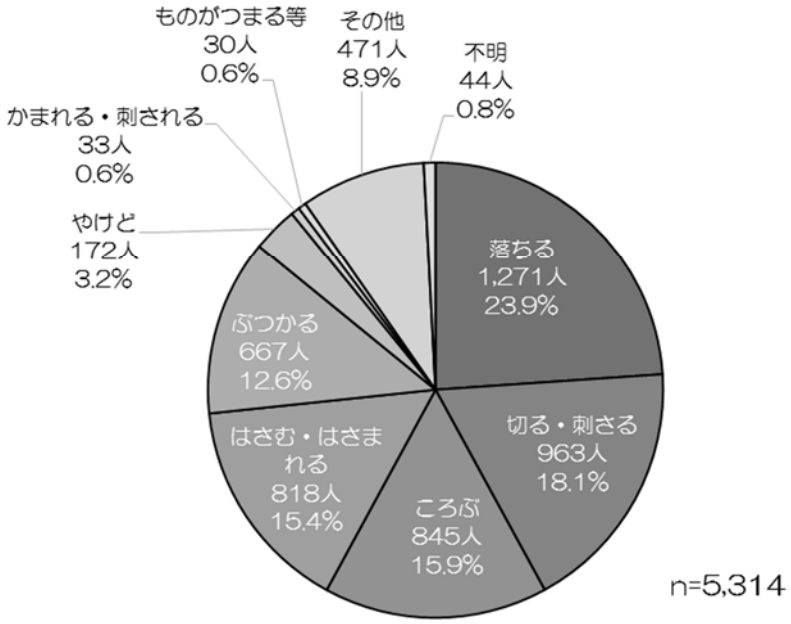


図６　事故種別救急搬送人員（令和元年中）

7. 事故事例

【事例 1】

屋根を修理しようと脚立に登った際に、脚立が倒れて背中からコンクリートの地面に墜落した（６０代　重篤）。

【事例２】

機械の掃除中、機械の電源を切らないまま、手をベルト内に入れてしまい指を切断した（６０代　中等症）。

【事例３】

仕事場にて、濡れた床で滑って転倒し歩くことができなくなった（70 代　中等症）。

【事例４】

階段の清掃中に、足を踏み外して転落し、頭部と顔面を受傷した（５０代　中等症）。

乳幼児の窒息や誤飲の事故

1. 年別搬送人員

平成２７年から令和元年までの５年間に、6,１８０人の乳幼児が、窒息や誤飲等※により医療機関に救急搬送されています（図７）。飲み込んだものによっては、体の組織を破壊するなど重大な事故となる恐れもあります。

※耳や鼻等に入ったものを含む

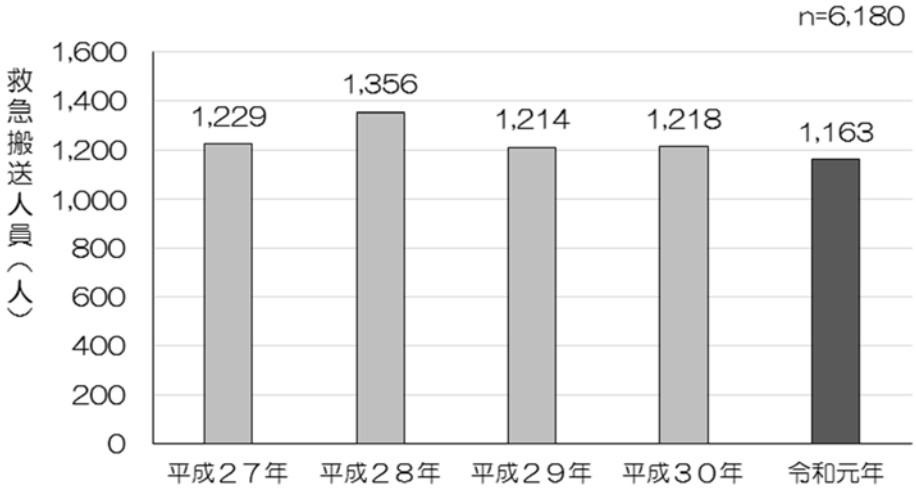


図７　年別の救急搬送人員

2. 年齢別搬送人員

年齢別では、０歳児の救急搬送が最も多く、成長とともに減少しています（図８）。

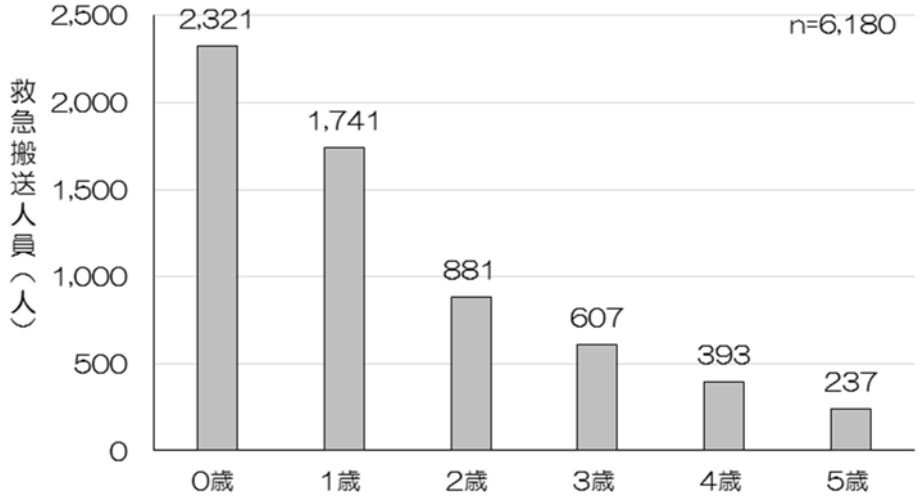


図８　年齢別救急搬送人員

3. 発生場所別搬送人員

発生場所別では、住宅等居住場所が全体の９割以上を占めています（図９）。

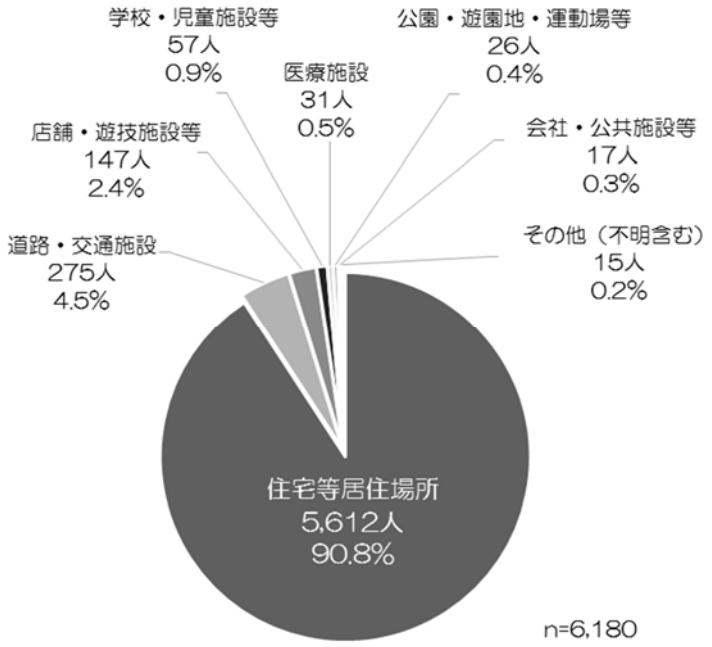


図９　発生場所別救急搬送人員

4. 初診時程度別救急搬送人員

初診時程度別では、軽症が約９割を占めており、入院の必要がある中等症以上は約１割を占めています（図１０）。

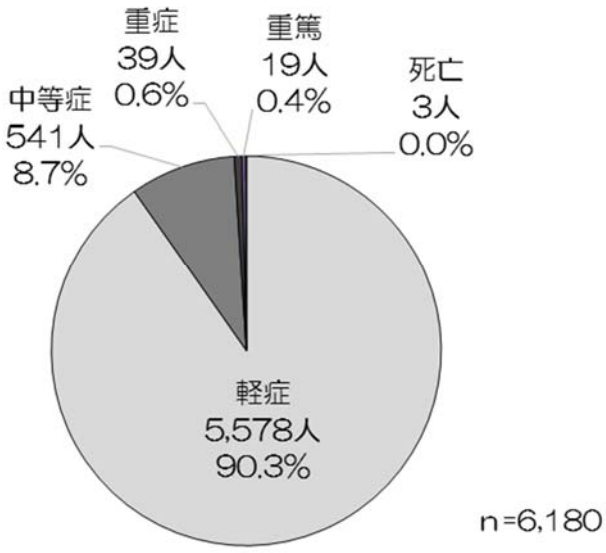


図１０　初診時程度別救急搬送人員

5. 関連器物別救急搬送人員

関連器物別では、食品・菓子や玩具が多いですが、乳幼児の窒息や誤飲に係る製品等は、菓子の包みやたばこ、薬剤等、様々です（図１１）。

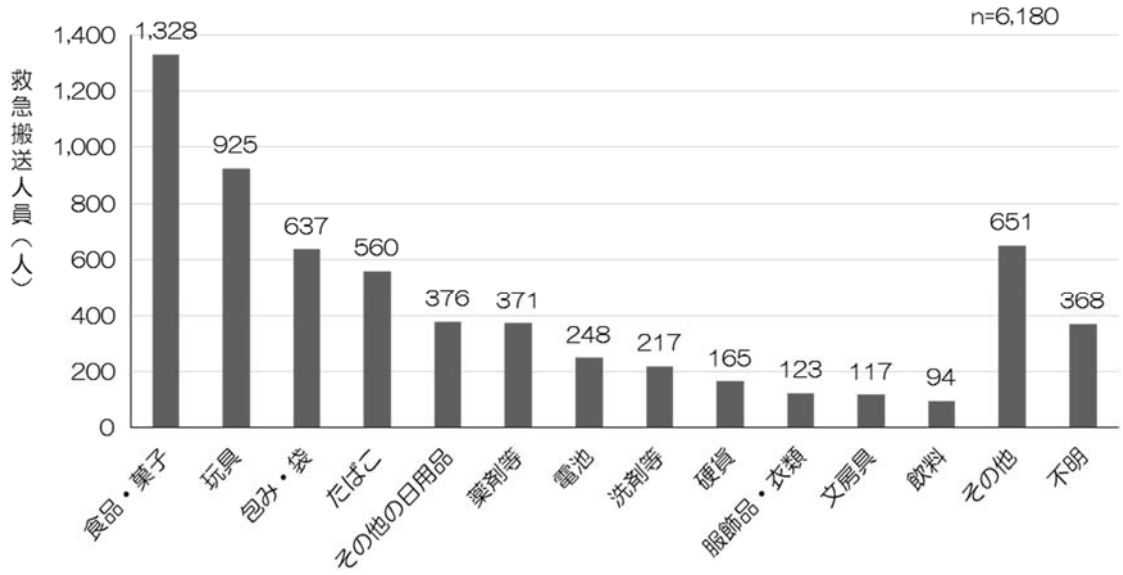


図１１　関連器物別救急搬送人員

6. 窒息や誤飲の事故の事例

【事例１】

自宅で親が料理をしている間に、親が病院から処方されている薬を子どもが飲んでしまった（１歳　中等症）。

【事例２】

親が目を離したすきに自宅のゴミ箱に捨ててあった電子たばこの吸殻を、子どもが飲み込んでいた（８か月　重症）。

7. 窒息や誤飲の事故を防ぐために

○　家の中では、子供の目の高さで危険がないかチェックしましょう。
　子供が飲み込めそうなものが、子供の手の届くところにないか日頃から整理整頓をこころがけましょう。

○　飲み込むと危険性が高いものを知っておきましょう。
　ボタン電池：ボタン電池は放電能力が高いため、非常に短時間で消化管壁に潰瘍を作ります。
　また、直径が大きく食道にとどまる可能性が高いため、誤飲すると死に至るおそれがあります。
　（出典：東京都生活文化局消費生活部生活安全課　ボタン型電池コイン型電池を子どもにさわらせないで！　リーフレット）

　灯　　油：胃から逆流すると気管に入りやすく、気管に入るとひどい肺炎を起こします。キャンドルオイルも、これと同じ状況で、肺炎を起こします。

ピックアップ２

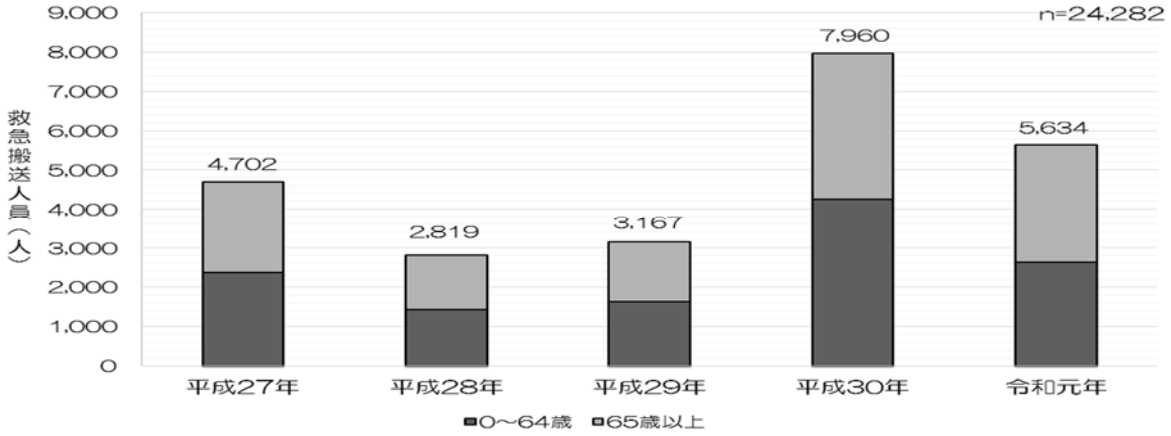
熱中症による救急搬送

（→P.１７事故種別「その他」等により救急搬送されたもの）

１．年別・月別の発生状況

平成２７年から令和元年までの過去５年間（各年６月から９月）に２４,２８２人が熱中症（疑い含む。）により救急搬送されています。令和元年の救急搬送人員は、５,６３４人で、６５歳以上の高齢者の割合は、約５割を占めています（図１２）。

また、月別では、各年とも７月、８月に多く発生していますが、梅雨時期の６月や残暑の９月にも発生しています（図１３）。



	0～64歳	65歳以上	総計	65歳以上割合
平成27年	2,372人	2,330人	4,702人	49.6%
平成28年	1,428人	1,391人	2,819人	49.3%
平成29年	1,633人	1,534人	3,167人	48.4%
平成30年	4,249人	3,711人	7,960人	46.6%
令和元年	2,629人	3,005人	5,634人	53.3%
計	12,311人	11,971人	24,282人	49.3%

図１２　過去５年間（各年６月～９月）の年齢層別の救急搬送人

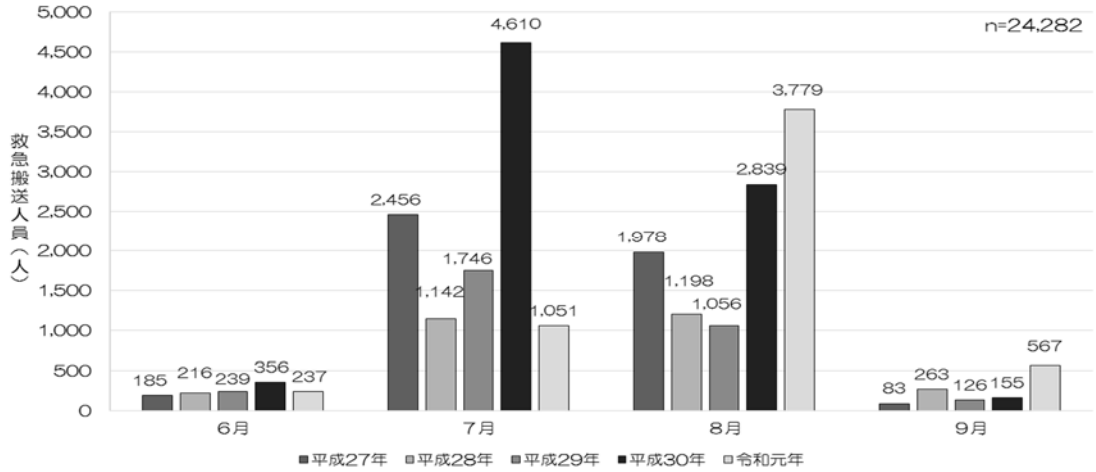


図１３　過去５年間（各年６月～９月）の月別救急搬送人員

2. 搬送人員と気温

熱中症による救急搬送人員と気温の関係をみると、気温が高い日が続いた７月下旬から８月上旬や、梅雨明け後の気温の高い日に多く発生しています（図１４）。

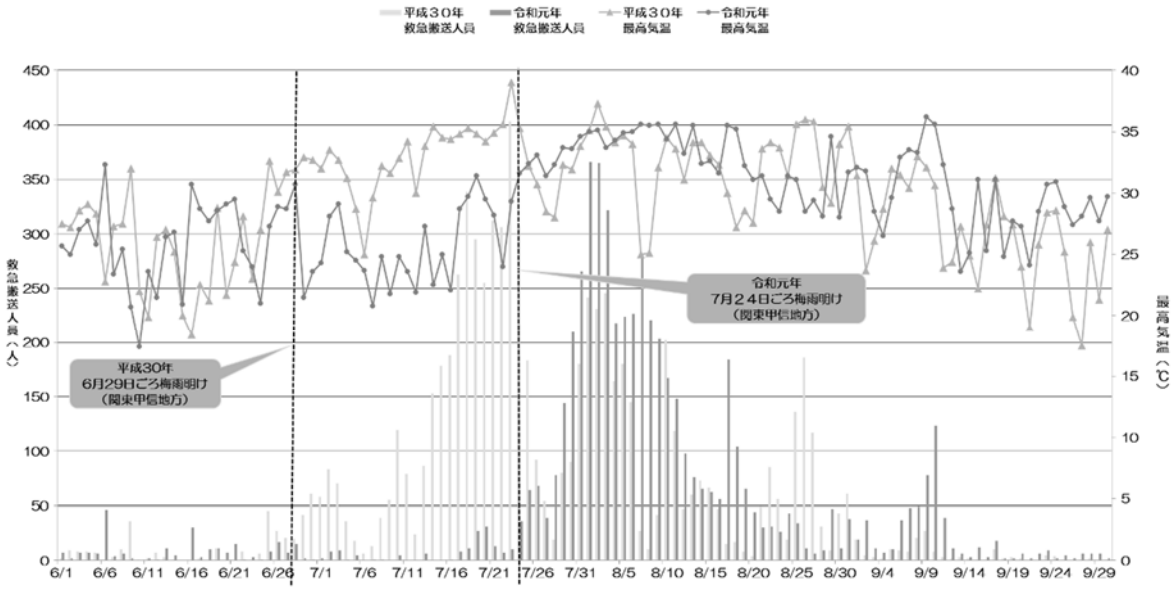
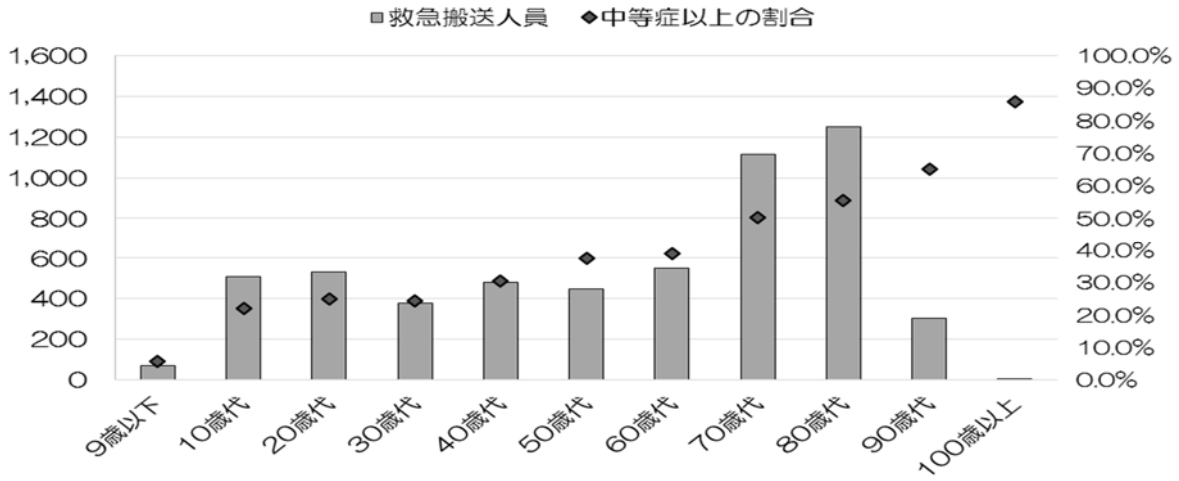


図１４　救急搬送人員と気温（令和元年６月～９月）

3. 年齢層別搬送人員と中等症以上の割合

熱中症による救急搬送人員と中等症以上の割合をみると、７０代、８０代の搬送が多く、加齢とともに中等症以上の割合が高くなっています（図１５）。



	9歳以下	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	100歳以上
救急搬送人員	69人	510人	530人	376人	480人	448人	550人	1,114人	1,248人	302人	7人
中等症以上の割合	5.8%	22.2%	24.9%	24.5%	30.4%	37.5%	38.9%	50.4%	55.6%	65.2%	85.7%

図１５　救急搬送人員と中等症以上の割合（%）（令和元年６月～９月）

4. 発生場所別搬送人員

熱中症による救急搬送人員と発生場所をみると、住宅等居住場所での発生が最も多く、全体の約４割を占めています（図１６）。

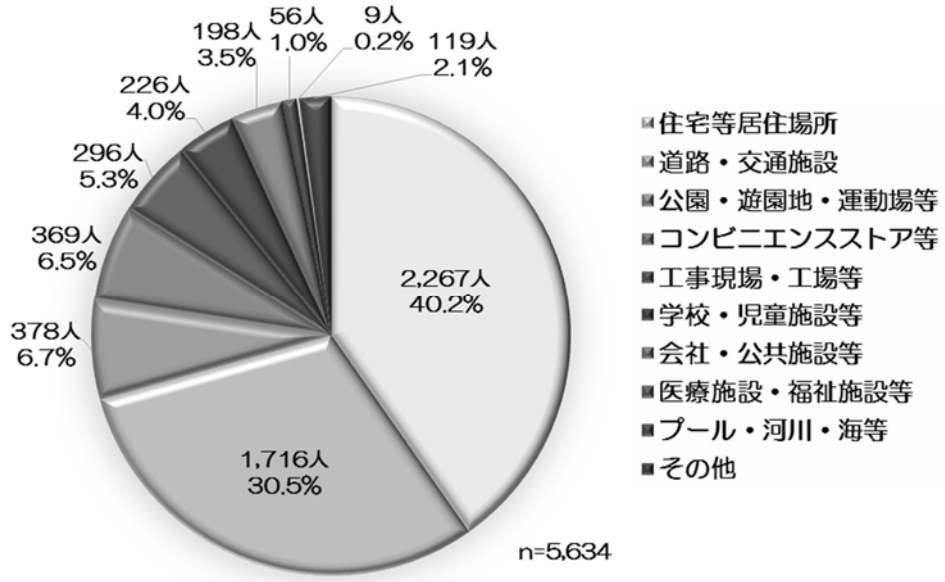


図１６　発生場所別搬送人員（令和元年６月～９月）

5. 熱中症の救急搬送事例

【事例１　乳幼児が車の中で熱中症になった事例】

母親が車外にいる状況で車内にいた子供が、車の鍵をかけてしまった。

（令和元年７月　１歳　軽症　気温３２．５℃　湿度６９％）

【事例２　運動中に熱中症になった事例】

屋外で体育の授業終了後、教室に戻った後、椅子に座った状態で嘔吐した。

（令和元年９月　７歳　軽症　気温２８．８℃　湿度７２％）

【事例３　室内で熱中症になった事例】

起床時から脱力感があり動く事ができず、様子を見るも症状が改善しない。

（令和元年６月　６０代　中等症　気温２６．０℃　湿度７６％）

※　気温、最高気温、湿度は気象庁の気象統計情報の東京で測定した数値を使用しています。

6. 熱中症予防のポイント

○　暑さに身体を慣らしていく。
○　高温・多湿・直射日光を避ける。
○　水分補給は計画的、かつ、こまめにする。
○　運動時などは計画的な休憩をする。
○　規則正しい生活をする。
○　乗用車等の車内の温度は短時間で高温になるため、子供だけにしない。
○　子供は大人よりも身長が低いため、地面から受ける輻射熱が高く、高温環境にさらされている。

7. 応急手当

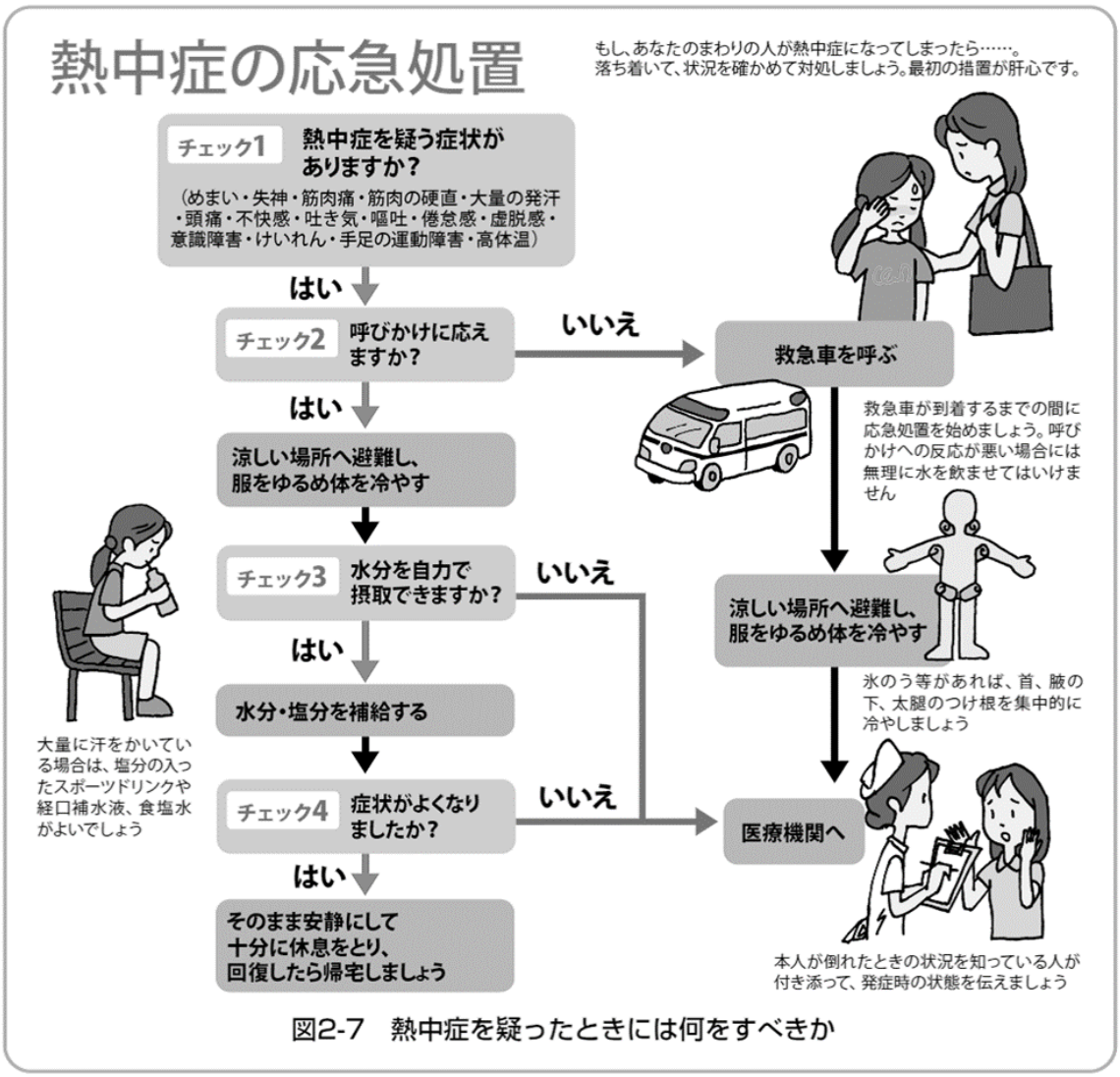


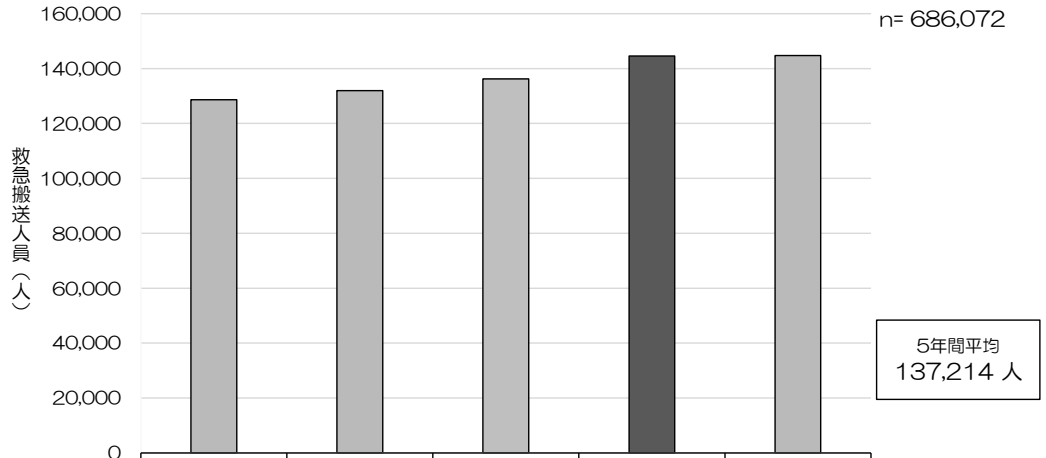
図2-7　熱中症を疑ったときには何をすべきか

※　参考文献：熱中症環境保健マニュアル２０１８（環境省）

第１部　令和元年の概要

1. 年別発生状況

東京消防庁管内では、日常生活における事故により平成２７年から令和元年までの５年間に、６８６,０７２人が救急搬送され、年々増加しています。令和元年中は、１４４,７６７人で、過去５年間で最も多く救急搬送されています（図１－１）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	128,619	131,925	136,213	144,548	144,767
前年比		102.6%	103.3%	106.1%	100.2%

図１－１　年別の救急搬送人員

2. 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別の救急搬送人員をみると、乳幼児と高齢者に多く発生しています（図１－２）。

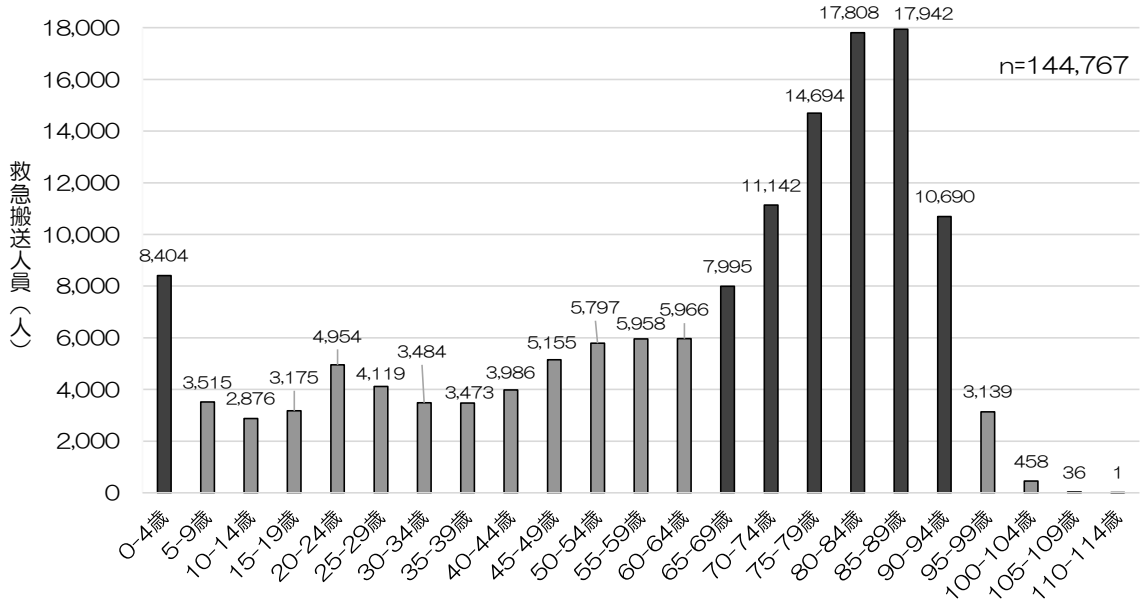


図１－２　年齢層別の救急搬送人員

3. 月別・時間帯別搬送人員

月別にみると、８月の１４,５１３人が最も多く、次いで１２月に１３,８０５人が救急搬送されています（図１－３）。

時間帯別でみると、９時台から２０時台までは７,０００人以上が救急搬送されています（図１－４）。

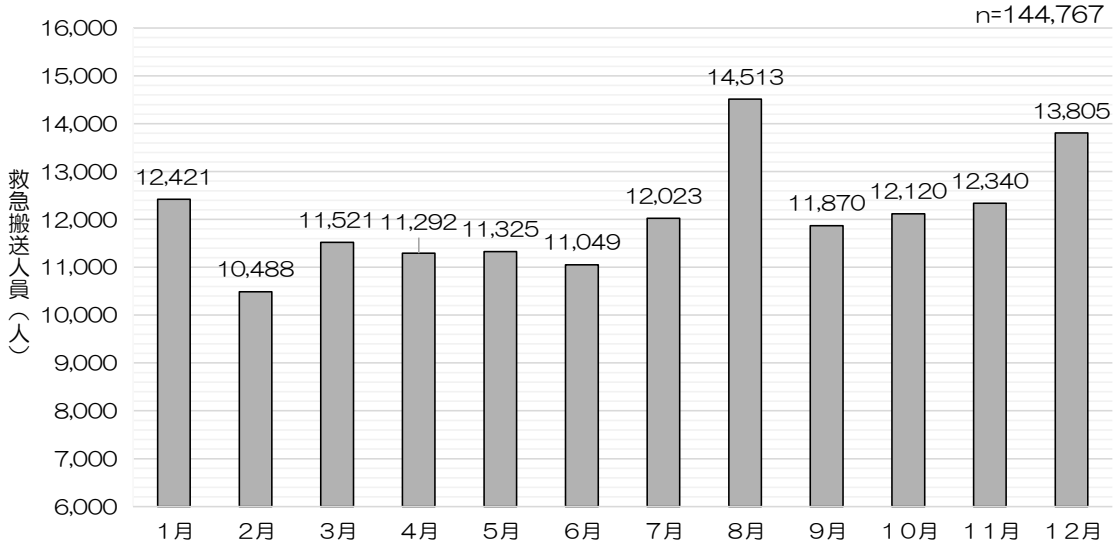


図１－３　月別の救急搬送人員

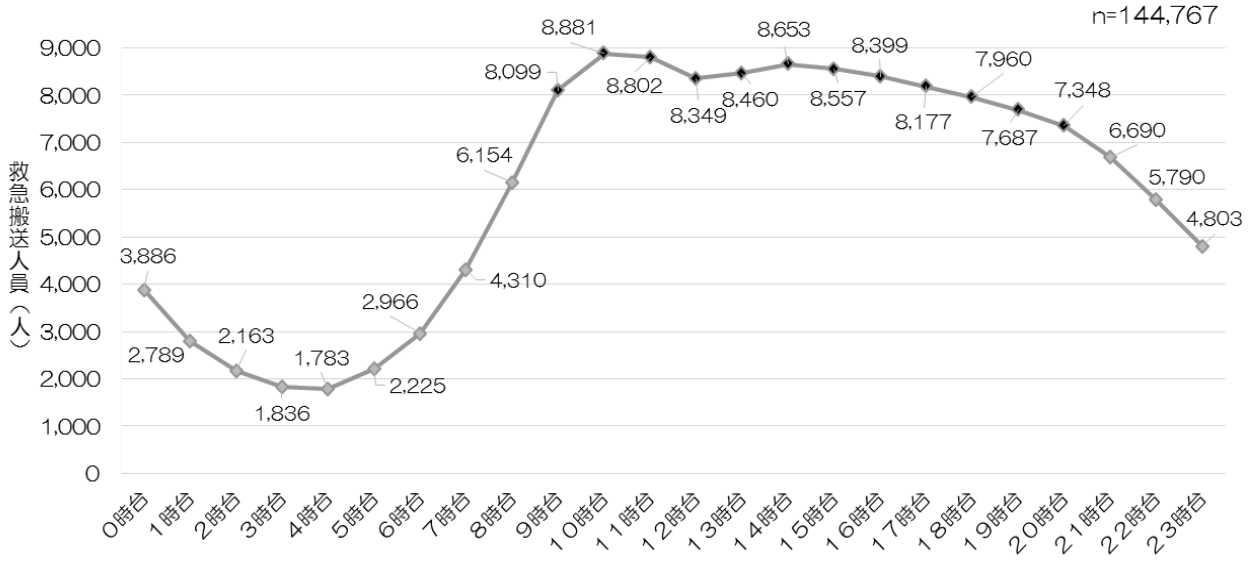


図１－４　時間帯別の救急搬送人員

4. 事故種別ごとの搬送人員

事故種別ごとにみると、「ころぶ」事故が全体の約６割を占め最も多くなっています。なお、事故種別ごとの概要については第２部で取り上げています（図１－５）。

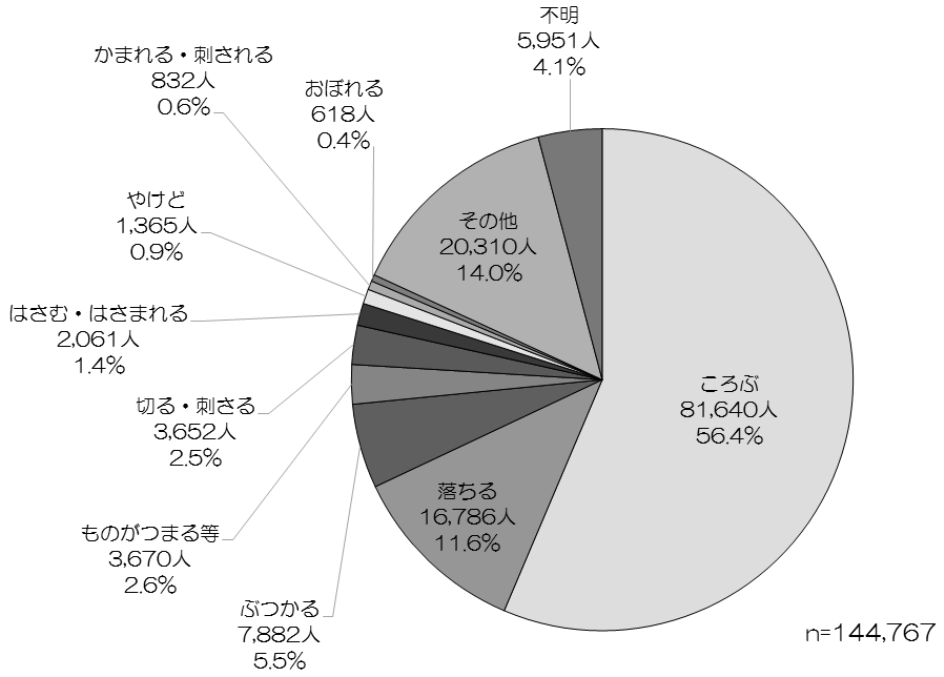


図１－５　事故種別ごとの救急搬送人員

5. 発生場所別搬送人員

発生場所別にみると、半数以上が住宅等居住場所で発生しています（図１－６）。

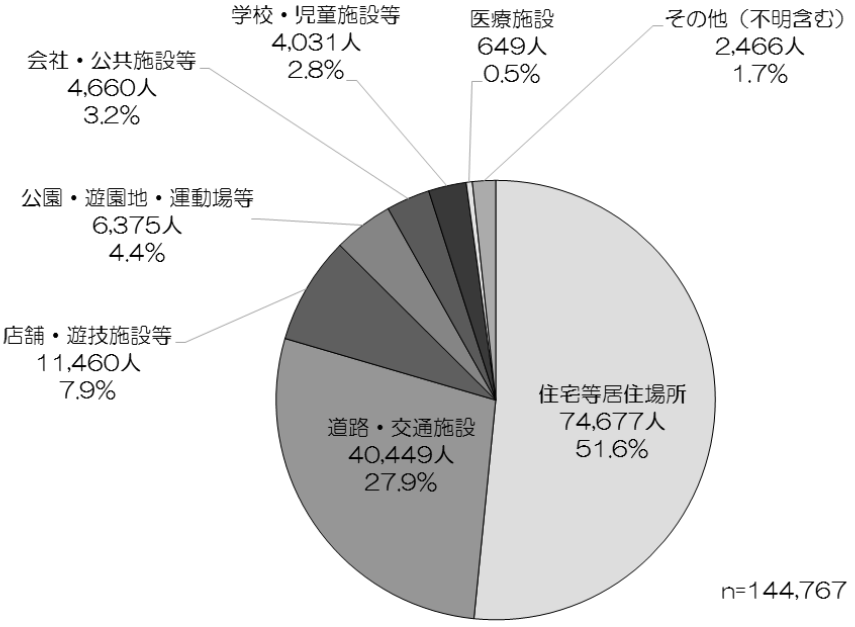


図１－６　発生場所別救急搬送人員

6. 初診時程度別搬送人員

救急車で搬送された人の初診時程度をみると、３割以上が入院を必要とする中等症以上で、生命に危険を及ぼすような事故も発生しています（図１－７）。

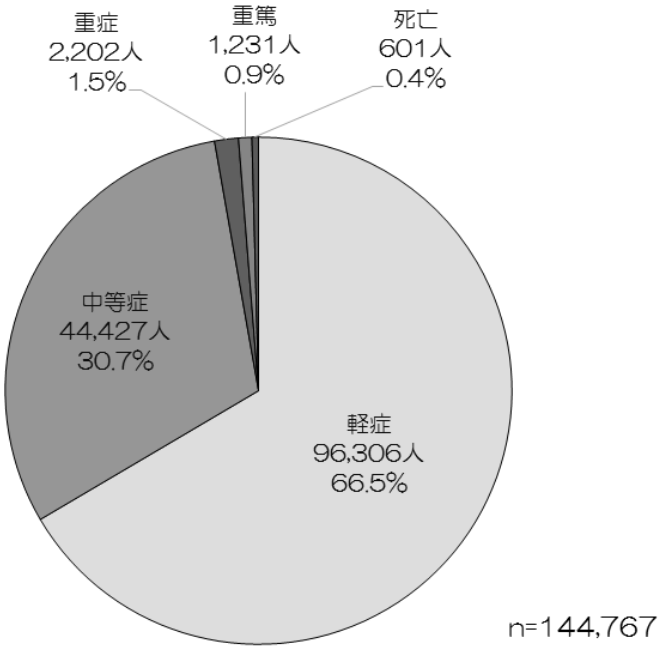


図１－７　初診時程度別救急搬送人員

第２部　種別ごとにみる事故

ここでは、日常生活における事故を「ころぶ」「落ちる」「ぶつかる」「ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む（ものがつまる等）」「切る・刺さる」「はさむ・はさまれる」「やけど」「かまれる・刺される」「おぼれる」の種別ごとに取り上げています。最も多いのは「ころぶ」事故で、全体（※その他、不明を除く）の６８．９％となっています（図２－１）。

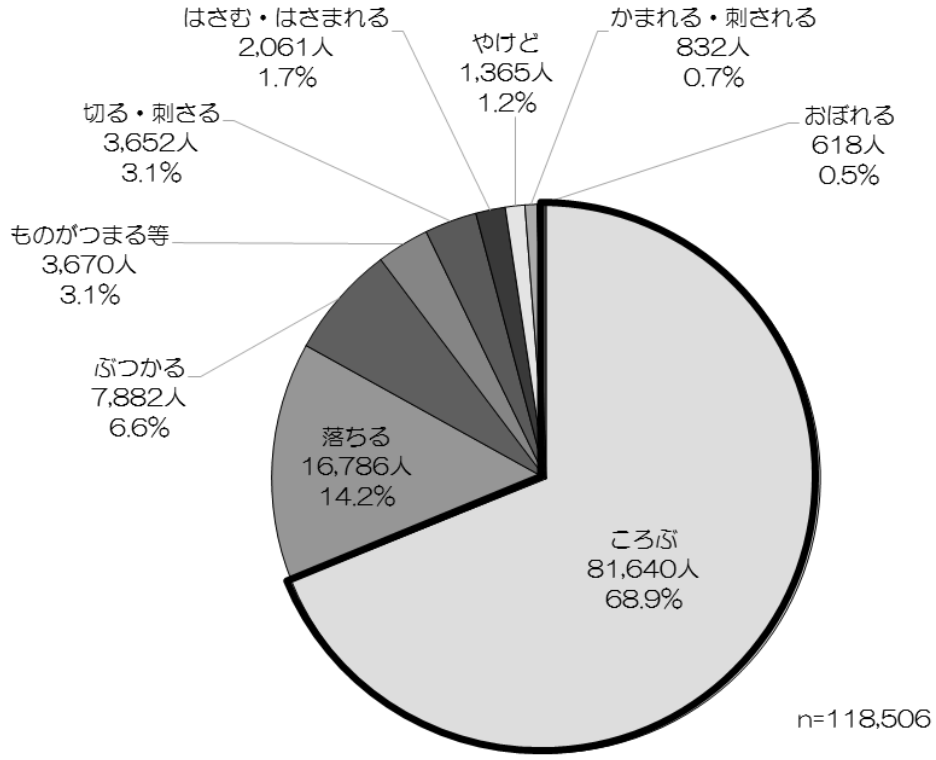


図２－１　事故の種類別構成割合（その他、不明を除く）

※熱中症は事故種別「その他」に該当します。　（P.１１　ピックアップ２）

種別ごとにみると、事故は年代によって特徴があります。乳幼児は他の年代に比べ、ものがつまったり、ものを誤って飲み込む事故の割合が多く、また、やけどの割合も多くなっています。１０代ではぶつかる事故の割合が多くなっています。また、高齢になるにつれて「ころぶ」事故の割合が増えています（図２－２、図２－３）。

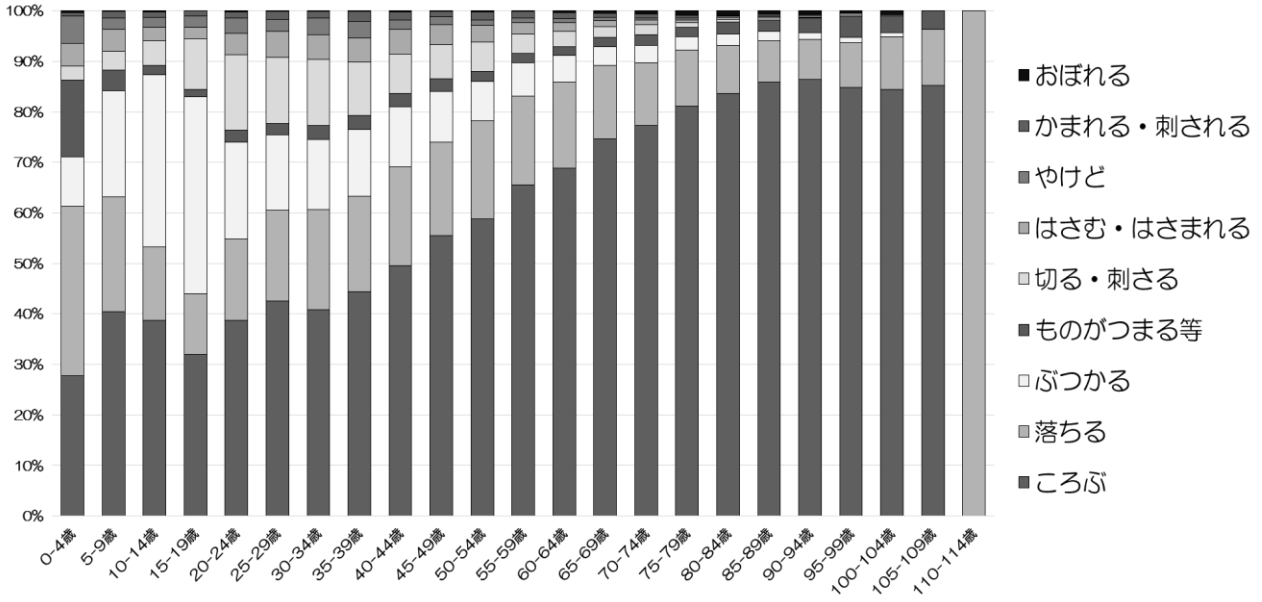


図２－２　年齢別の事故の種類別構成割合（その他、不明を除く）

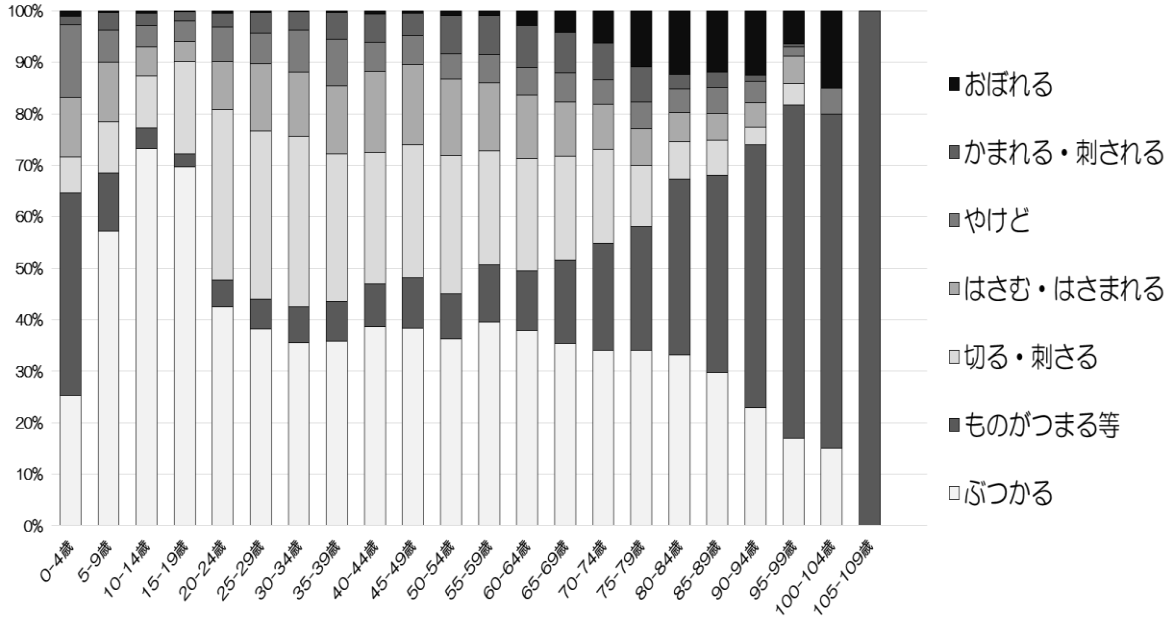
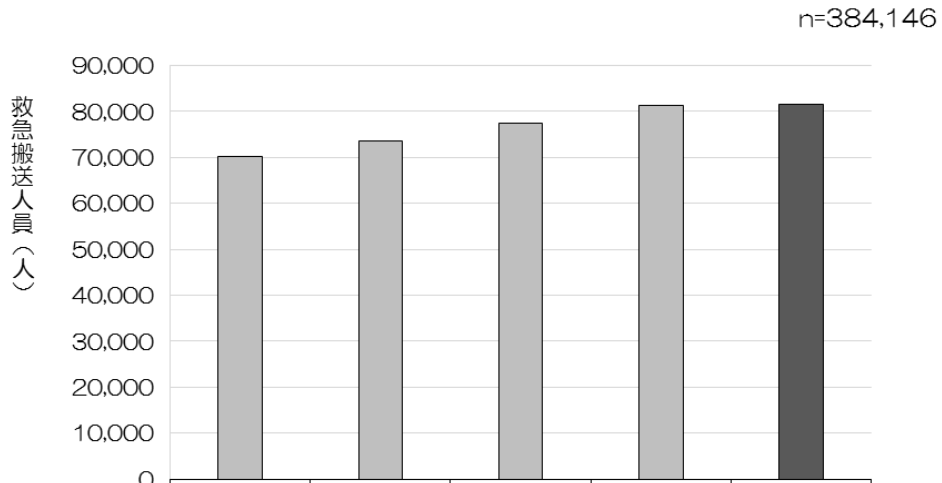


図２－３　年齢別の事故の種類別構成割合（ころぶ、落ちる、その他、不明を除く）

1. ころぶ

(1) 年別搬送人員

「ころぶ」事故は日常生活における事故の中で最も多く、令和元年中は８１,６４０人が救急搬送されています（図２−４）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	70,289	73,510	77,369	81,338	81,640
前年比		104.6%	105.2%	105.1%	100.4%

図２−４　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、６５歳以上の高齢者が多く救急搬送されています（図２−５）。

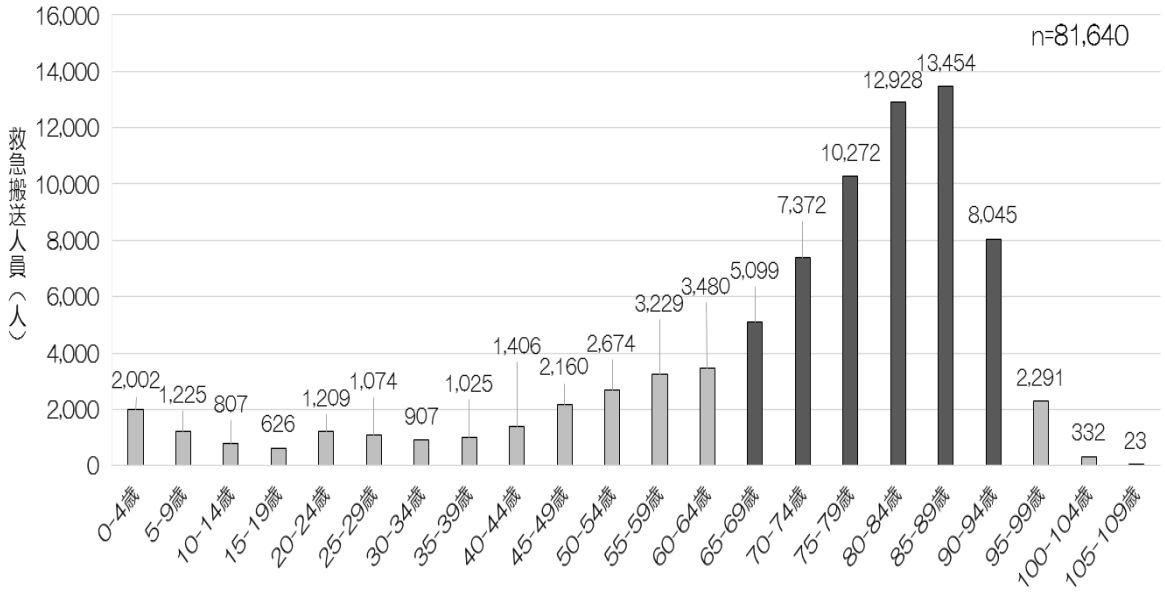


図２−５　年齢層別救急搬送人員

（3） 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く、次いで道路・交通施設となっています（図２－６）。

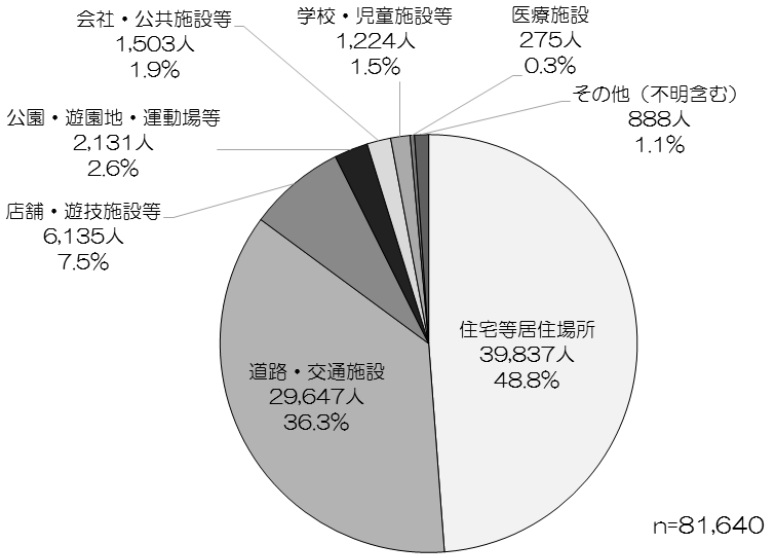


図２－６　発生場所別救急搬送人員

（5） 初診時程度別搬送人員

「ころぶ」事故では、３割を超える人が中等症以上と診断されています（図２－７）。

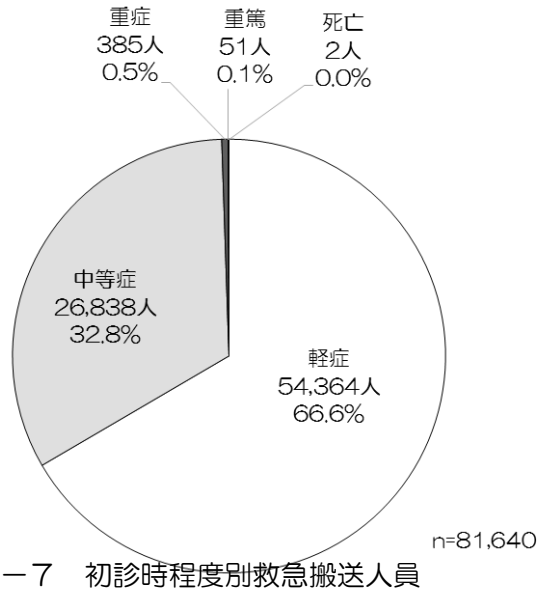


図２－７　初診時程度別救急搬送人員

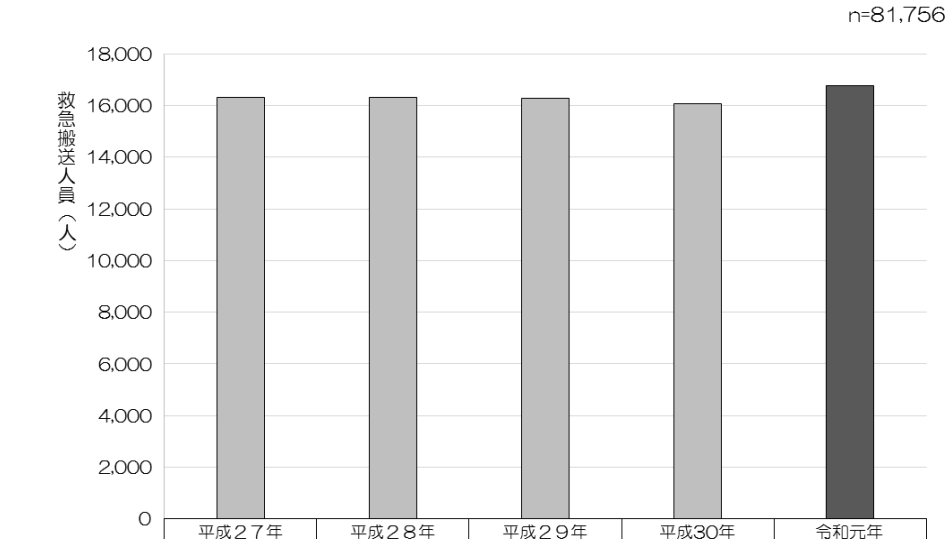
【事例　ころぶ】

自宅でトイレに行こうとした際に、床で足を滑らせて転倒し、動けなくなった（９０代　中等症）。

2. 落ちる

(1) 年別搬送人員

階段や脚立などから「落ちる」事故で、令和元年中に１６,７８６人が救急搬送されています（図２－８）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成30年	令和元年
救急搬送人員（人）	16,326	16,300	16,268	16,076	16,786
前年比		99.8%	99.8%	98.8%	104.4%

図２－８　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、０歳から４歳が最も多く、２,４４６人が救急搬送されています（図２－９）。

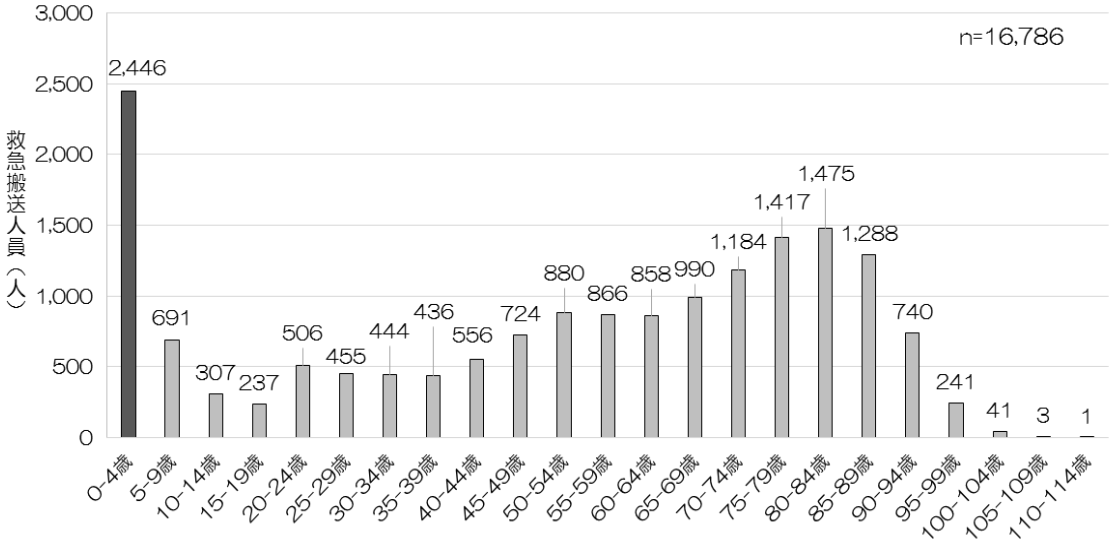


図２－９　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く半数以上となってます。次いで、道路・交通施設、店舗・遊技施設等で多く発生しています（図 2−10）。

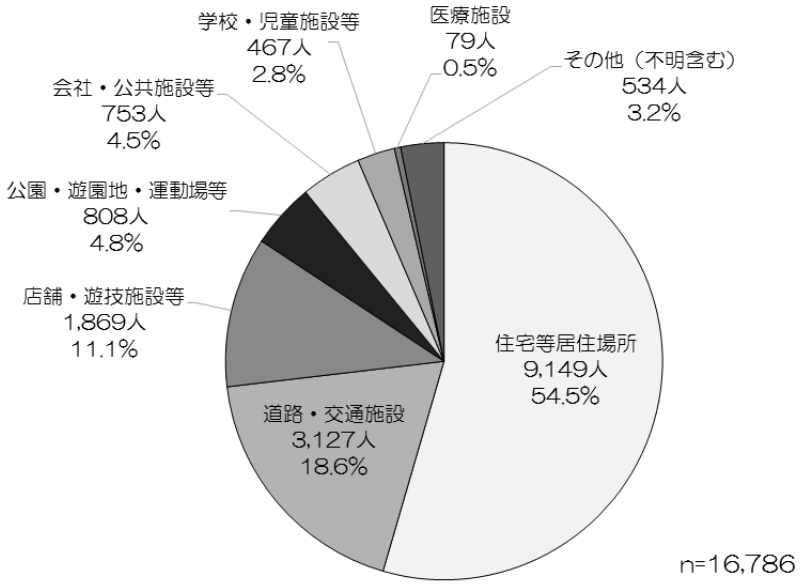


図 2−10　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

「落ちる」事故では、３割を超える人が中等症以上と診断されています（図 2−11）。

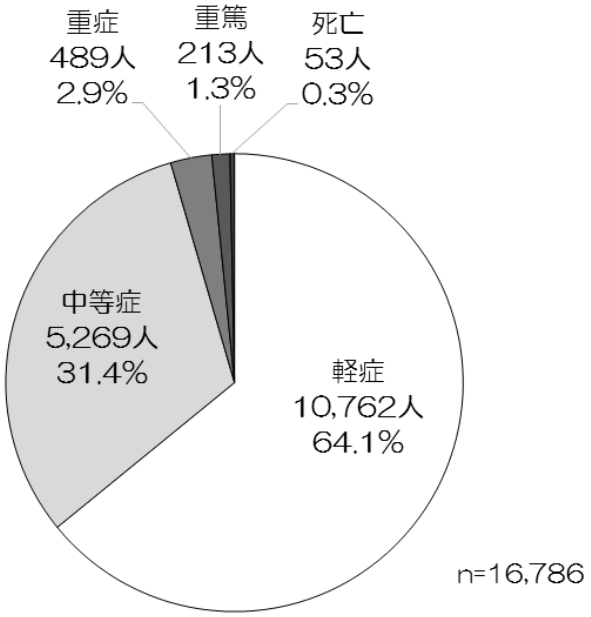


図 2−11　初診時程度別救急搬送人員

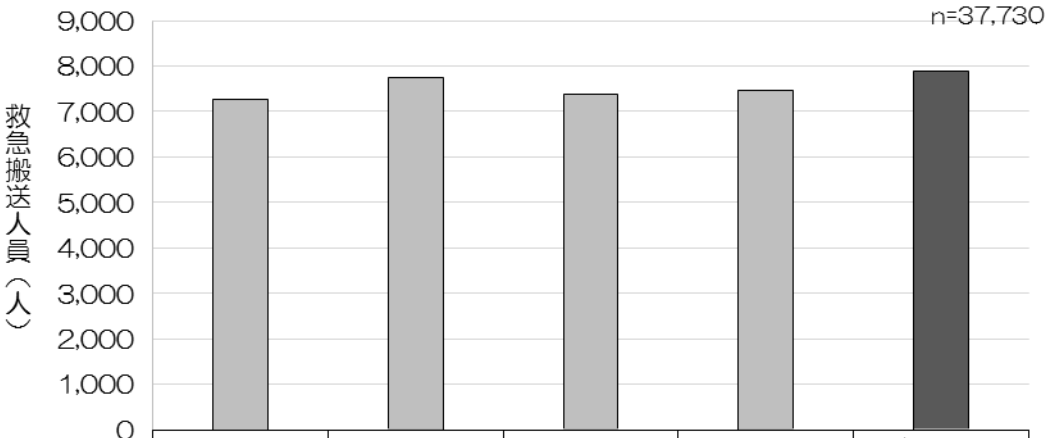
【事例　落ちる】

自宅２階のベランダに置いてあったベビーカーに乗り、ベランダの柵を乗り越えて屋外の芝生に転落した（１歳　中等症）。

3. ぶつかる

(1) 年別搬送人員

飛んできたボールに「ぶつかる」事故や、走っていて人やものに「ぶつかる」事故で、令和元年中に7,８８２人が救急搬送されています（図２−12）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	7,255	7,756	7,383	7,454	7,882
前年比		106.9%	95.2%	101.0%	105.7%

図２−12　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

最も多いのは、１５歳から１９歳となっており、１４歳以下も多く救急搬送されています。「ぶつかる」事故は、加齢とともに減少しています（図２−13）。

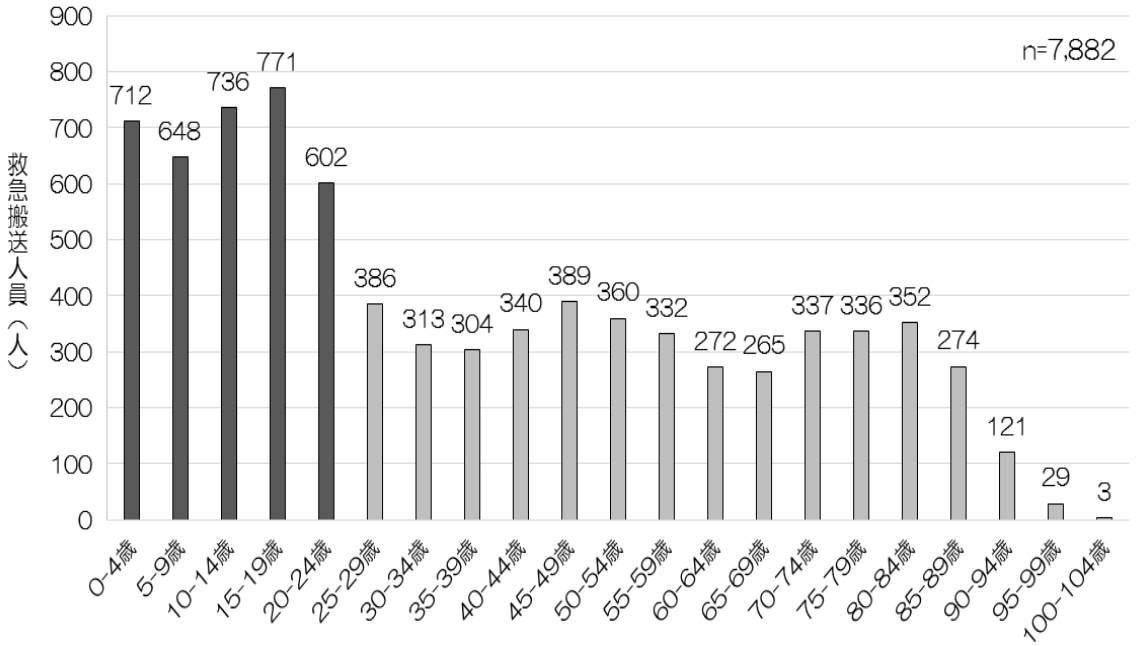


図２−13　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く、次いで、公園・遊園地・運動場等や道路・交通施設での事故が多く発生しています（図２−14）。

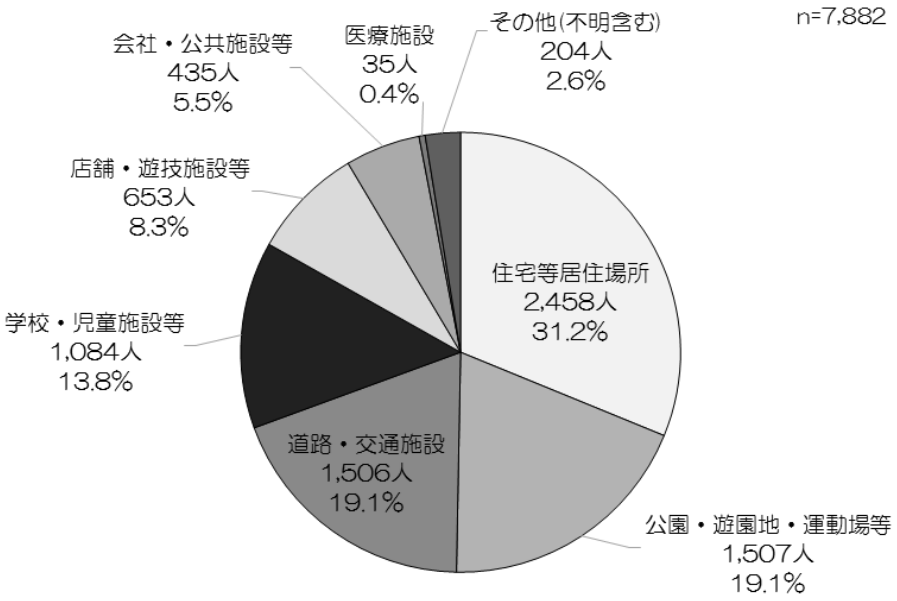


図２−14　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

全体の８割を超える人が軽症ですが、重症や重篤、死亡と診断される事故も発生しています（図２−15）。

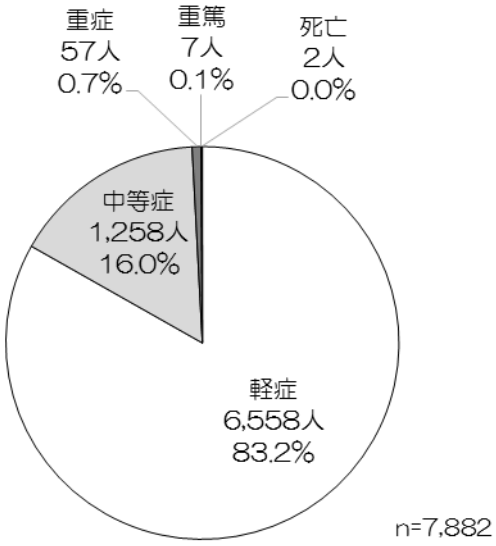


図２−15　初診時程度別救急搬送人員

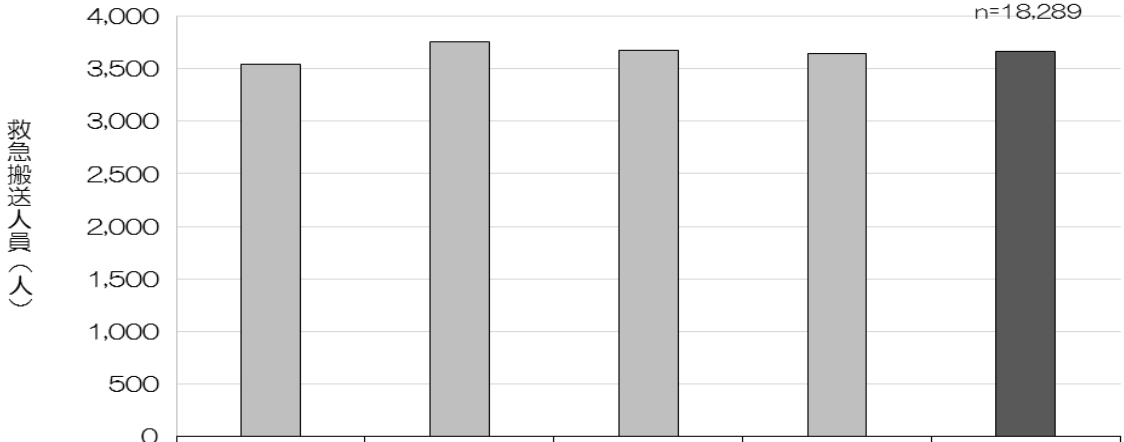
【事例　ぶつかる】

サッカーの練習試合中に、他の選手と接触し頭部を受傷した（１０代　中等症）。

4. ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む

(1) 年別搬送人員

食べ物を喉につまらせたり、たばこや玩具などを飲み込んでしまう事故により、令和元年中は3,６７０人が救急搬送されています（図２－１６）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	3,544	3,755	3,680	3,640	3,670
前年比		106.0%	98.0%	100.0%	100.8%

図２－１６　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、０歳から４歳が最も多く、１,１０８人が救急搬送されています（図２－１７）。

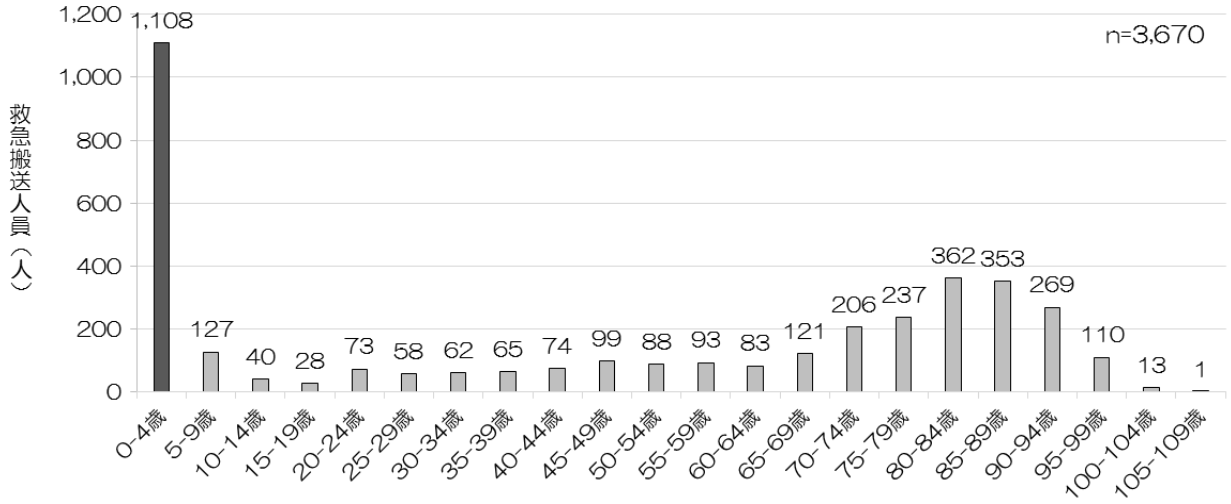


図２－１７　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が８割以上と最も多く、次いで、店舗・遊技施設等が多くなっています（図２－１８）。

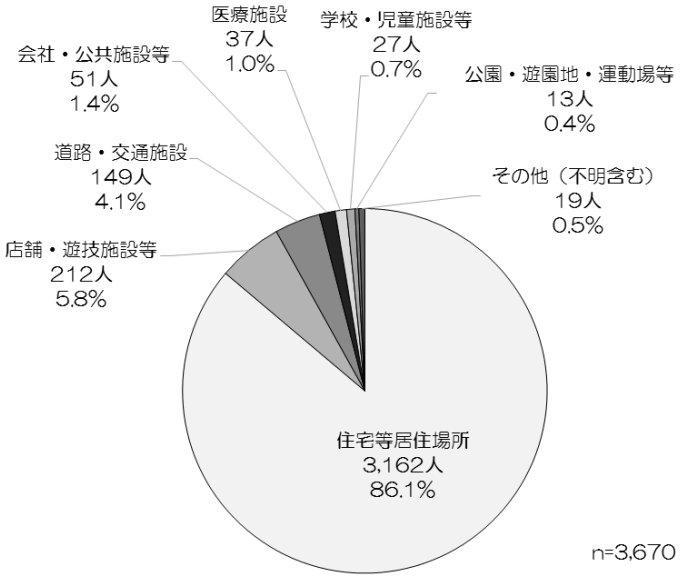


図２－１８　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

「ものがつまる等」の事故では、約３割を超える人が中等症以上と診断されています（図２－１９）。

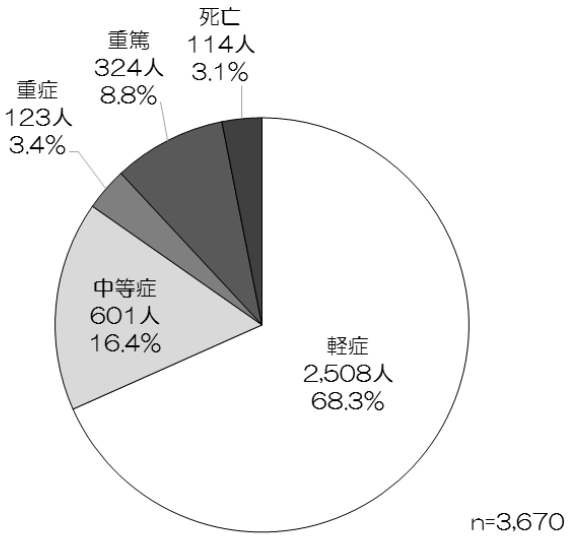


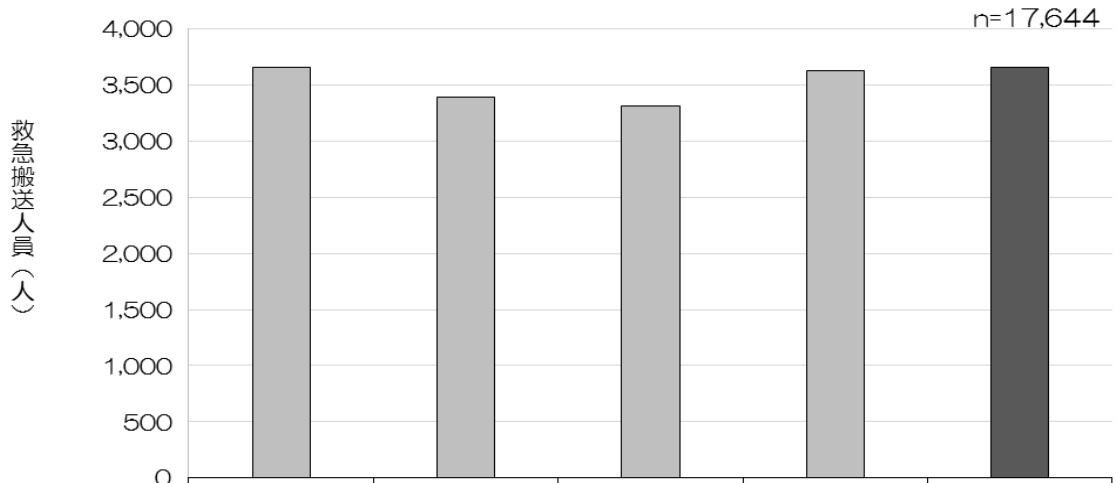
図２－１９　初診時程度別救急搬送人員

【事例　ものがつまる】
　食事中に、おにぎりを喉に詰まらせて倒れ、反応がなくなった（７０代　重篤）。

5. 切る・刺さる

(1) 年別搬送人員

刃物で切ったり、何かが刺さったりする事故で、令和元年中に3,６５２人が救急搬送されています（図２－２０）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	3,660	3,392	3,315	3,625	3,652
前年比		92.7%	97.7%	109.4%	100.7%

図２－２０　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、２０歳代での救急搬送人員が多くなっています（図２－２１）。

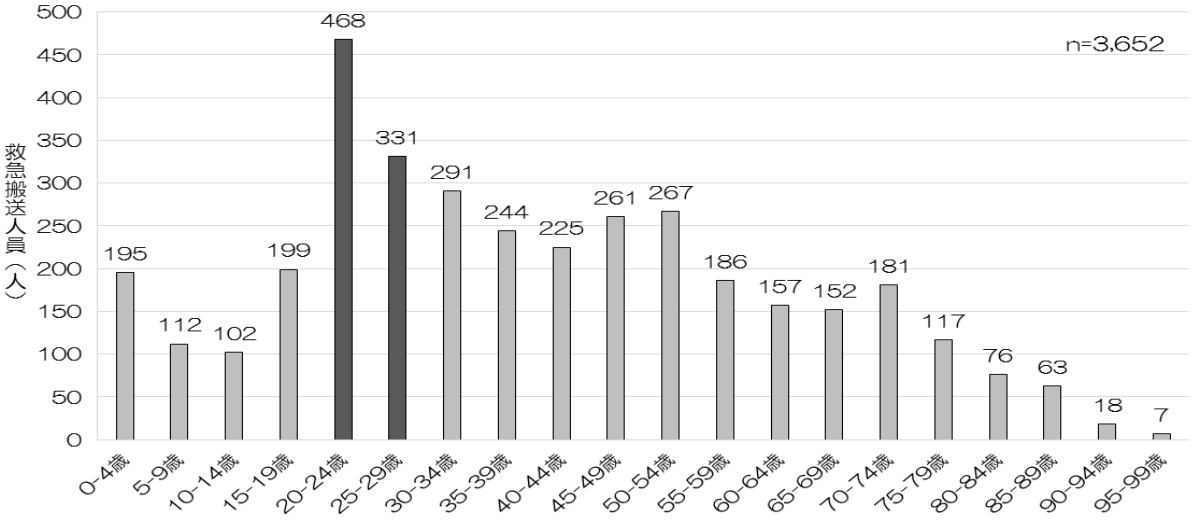


図２－２１　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く約６割を占めており、次いで店舗・遊技施設等、会社・公共施設等が多くなっています（図２－２２）。

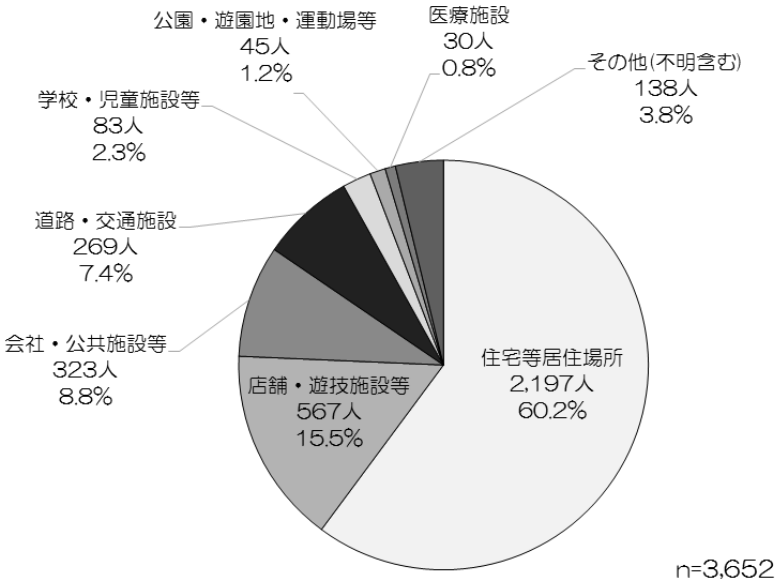


図２－２２　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

「切る・刺さる」事故では、全体の１割を超える人が中等症以上と診断されています（図２－２３）。

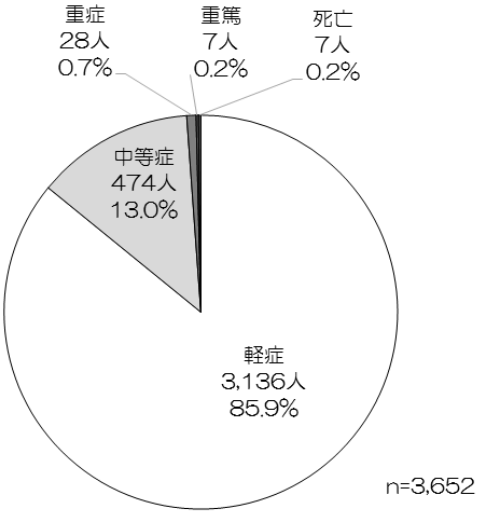


図２－２３　初診時程度別救急搬送人員

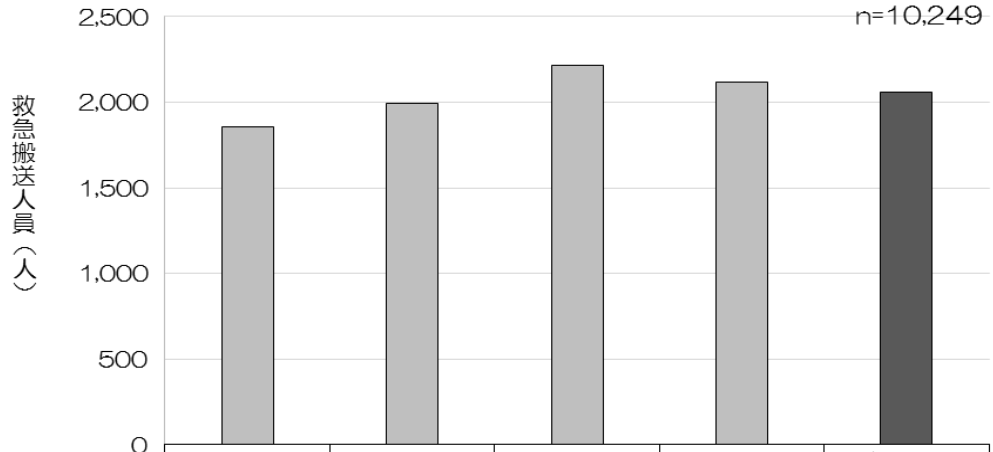
【事例　切る】

建築現場にて電動のこぎりを使用して作業中に、誤って指を切創した（２０代　中等症）。

6. はさむ・はさまれる

(1) 年別搬送人員

ドアや機械、鉄道車両の戸袋などにはさまれたり巻き込まれたりする事故で、令和元年中に2,０６１人が救急搬送されています（図２－２４）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	1,859	1,992	2,219	2,118	2,061
前年比		107.2%	111.4%	95.4%	97.3%

図２－２４　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、０歳から４歳が最も多く３２６人が救急搬送されています（図２－25）。

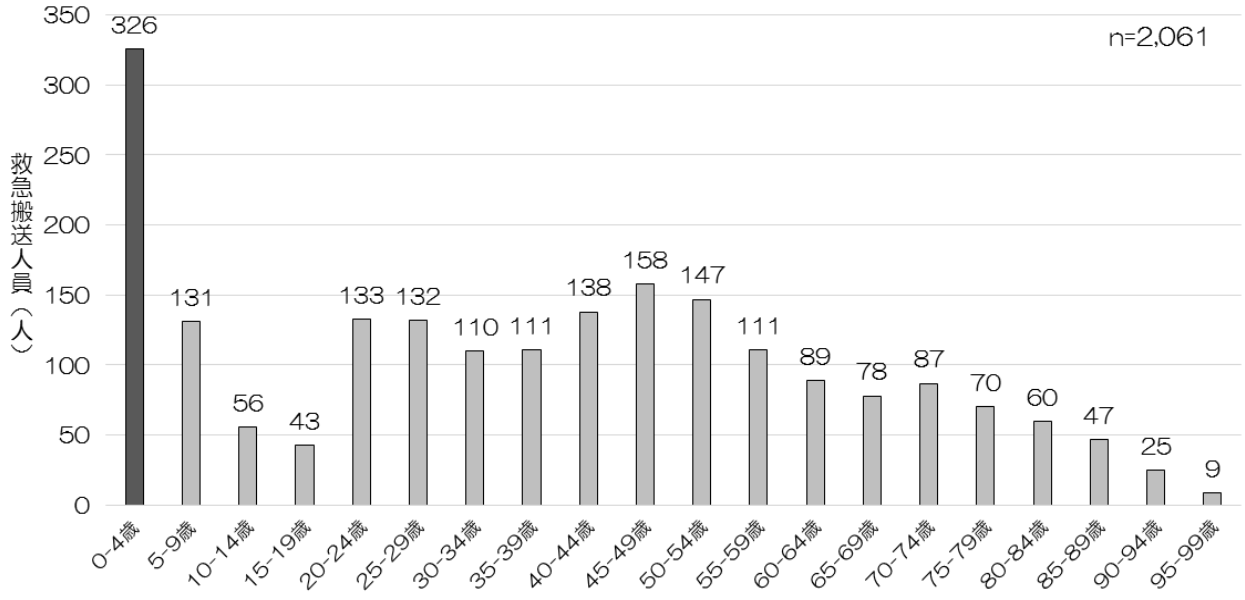


図２－２５　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が約３割以上と最も多く、次いで会社・公共施設等や道路・交通施設でも多く発生しています（図２−26）。

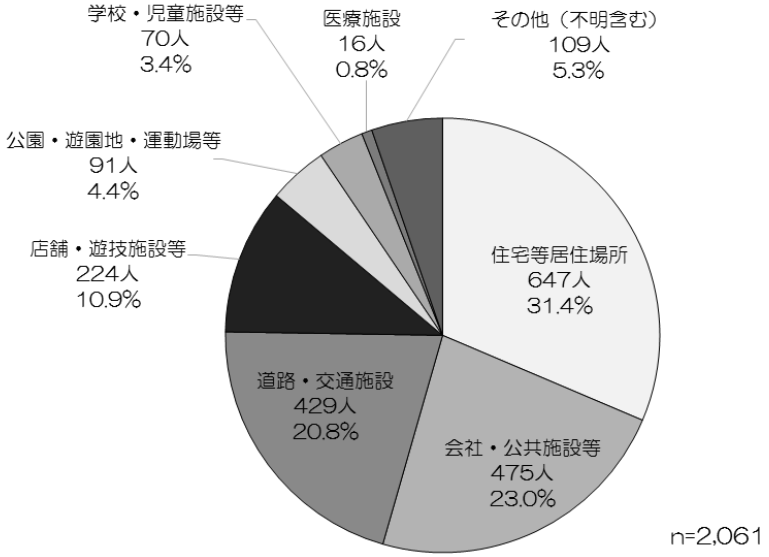


図２−26　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

「はさむ・はさまれる」事故では、約３割が中等症以上と診断されています（図２−27）。

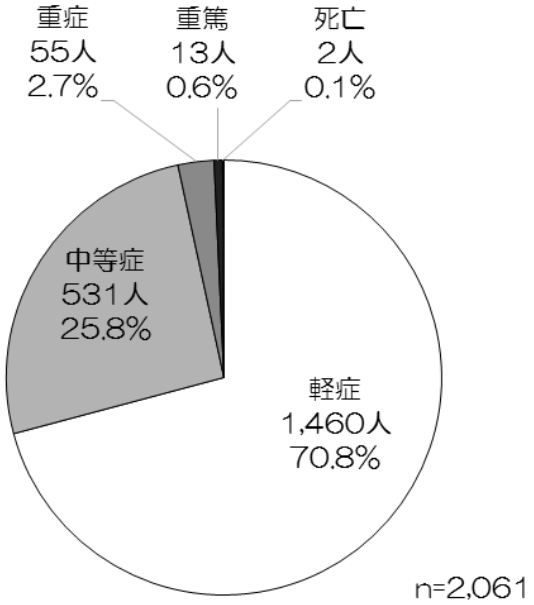


図２−27　初診時程度別救急搬送人員

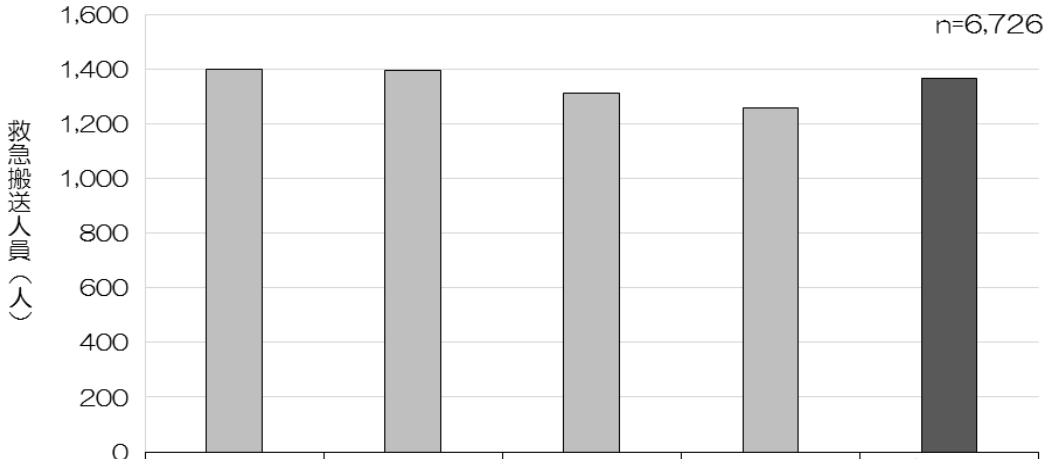
【事例　はさまれる】

ベビーカーに子どもを乗せて電車に乗車中、ドアが開いた際に子どもの足が戸袋にはさまれた（０歳　軽症）。

7. やけど

(1) 年別搬送人員

熱湯や天ぷら油等によるやけどで、令和元年中に１,３６５人が救急搬送されています（図２−28）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	1,397	1,395	1,310	1,259	1,365
前年比		99.9%	93.9%	96.1%	108.4%

図２−28　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、０歳から４歳が最も多く、３９７人が救急搬送され、全体の約３割以上を占めています（図２−29）。

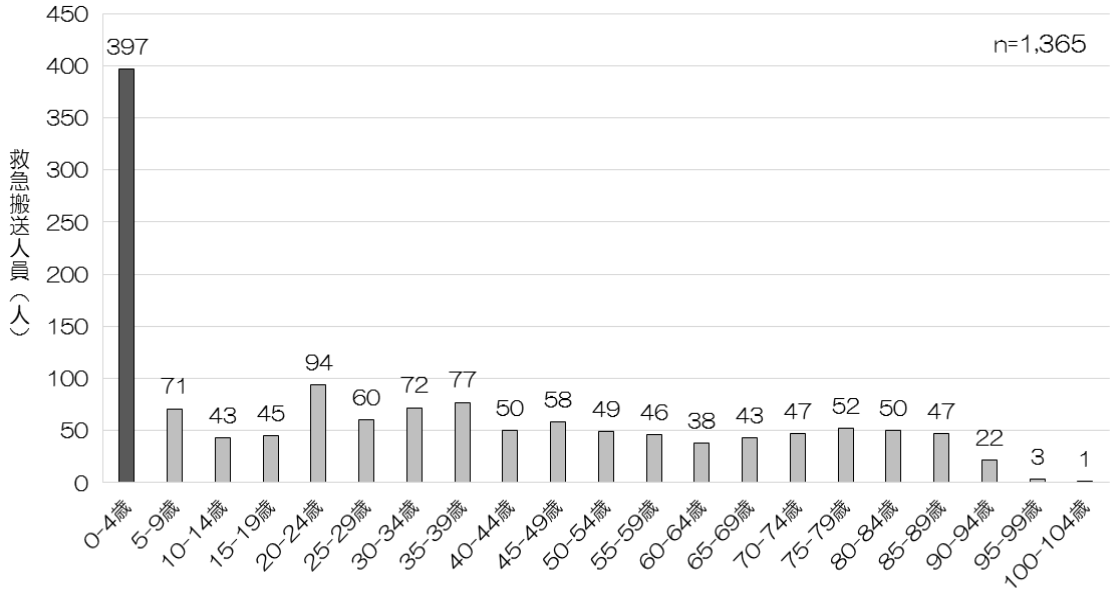


図２−29　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所の割合が最も多く、７割以上となっています（図２―30）

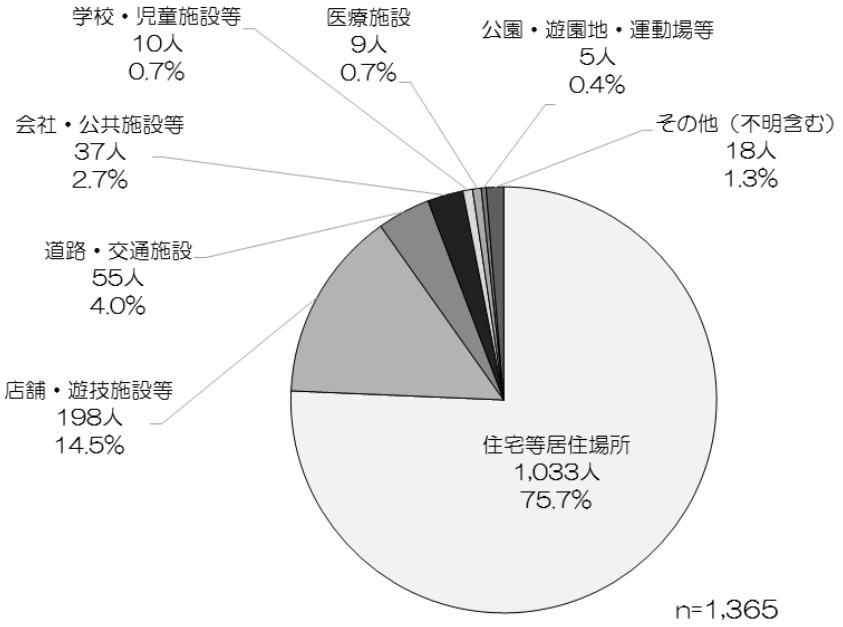


図２－30　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

初診時程度では、約２割が中等症以上と診断されています（図２－31）。

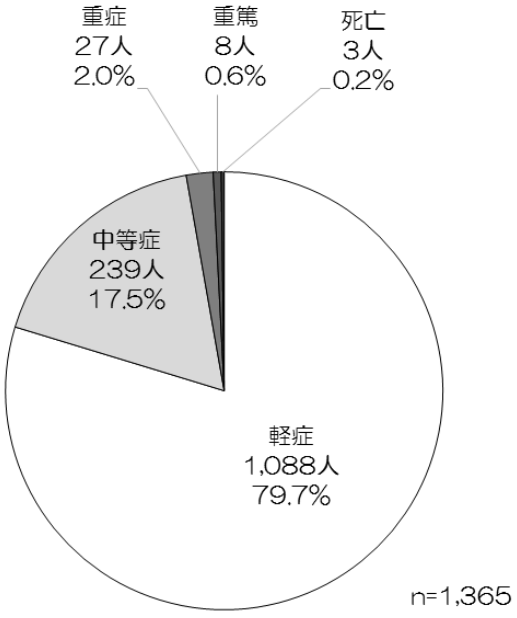


図２－31　初診時程度別救急搬送人員

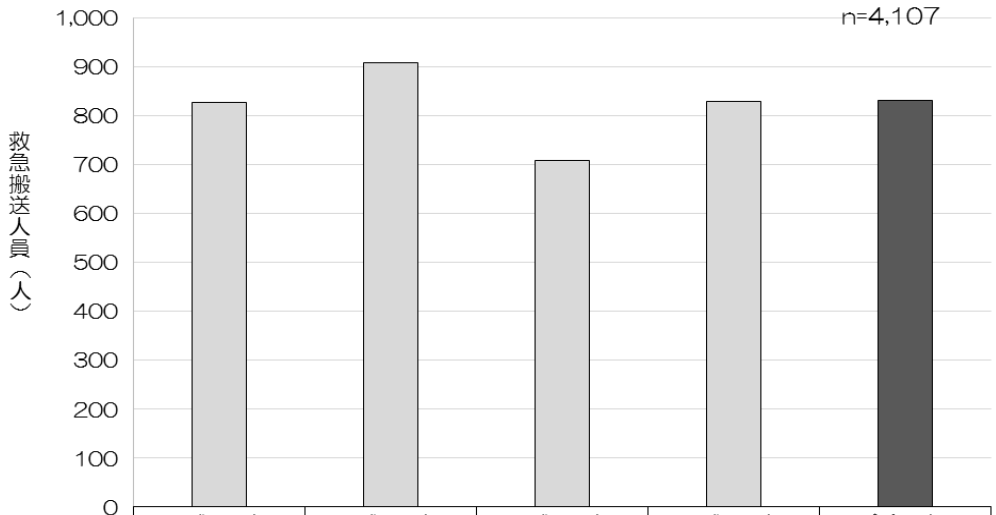
【事例　やけど】

テーブルの上に置いてあったインスタント味噌汁を倒してしまい、テーブルから垂れてきた味噌汁でやけどした（１歳　重症）。

8. かまれる・刺される

(1) 年別搬送人員

犬にかまれる、蜂に刺される等で、令和元年中に８３２人が救急搬送されています（図２−32）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	828	908	709	830	832
前年比		109.7%	78.1%	117.1%	100.2%

図２−32　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別では、５０歳から５４歳と７０歳から７４歳が７０人以上と多くなっています（図２−33）。

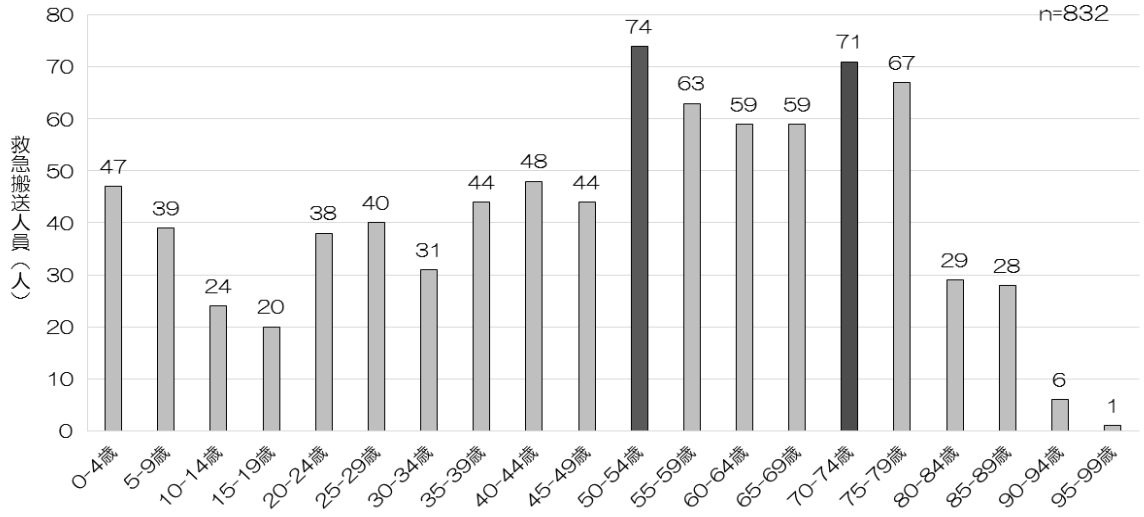


図２−33　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

発生場所別にみると、住宅等居住場所が多く、次いで、道路・交通施設が多くなっています（図２−34）。

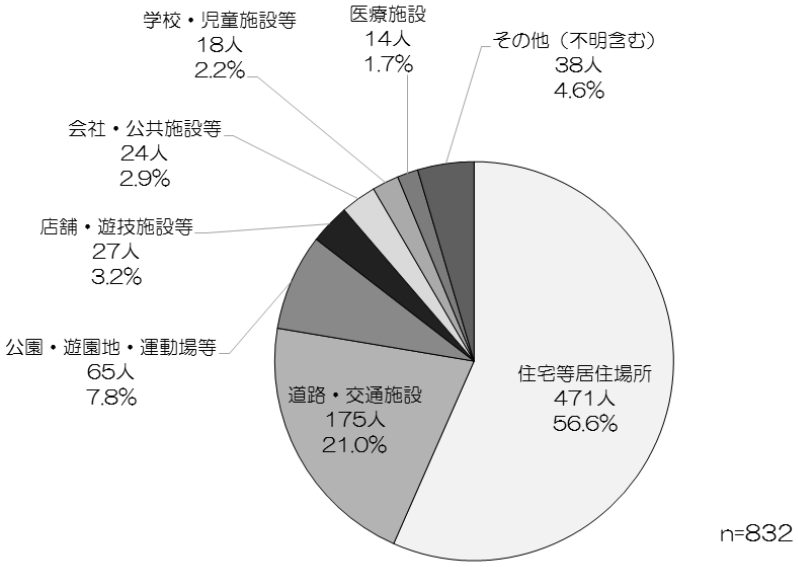


図２−３４　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

軽症が約９割を占めていますが、中等症と診断される事故も発生しています（図２−35）。

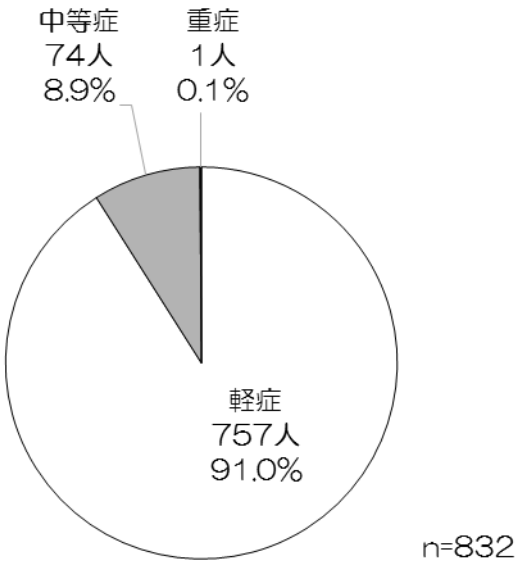


図２−３５　初診時程度別救急搬送人員

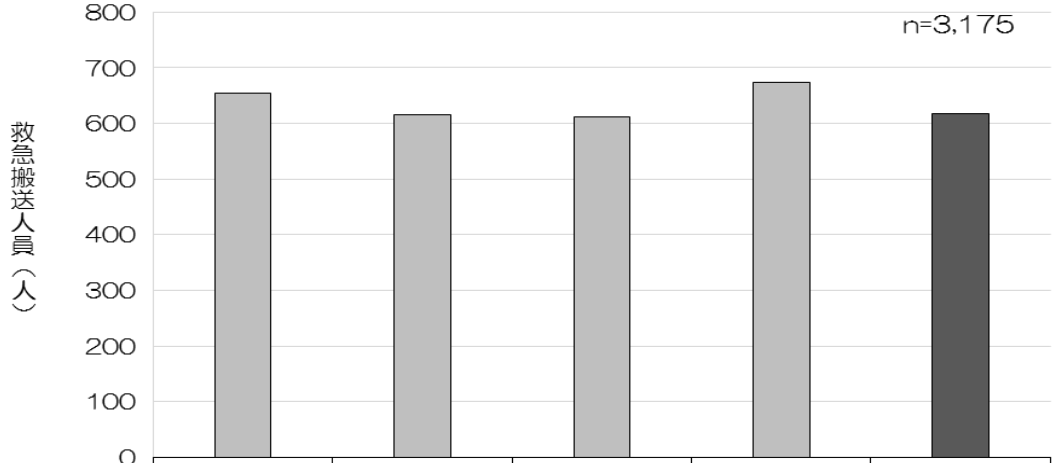
【事例　刺される】

自宅の庭で植木の剪定中に、蜂に刺された（６０代　中等症）。

9. おぼれる

(1) 年別搬送人員

浴槽や海、河川等での事故で、令和元年中は６１８人が救急搬送されています（図２－36）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	655	616	612	674	618
前年比		94.0%	99.4%	110.1%	91.7%

図２－36　年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

「おぼれる」事故は、乳幼児、高齢者に多く発生しています（図２－37）。

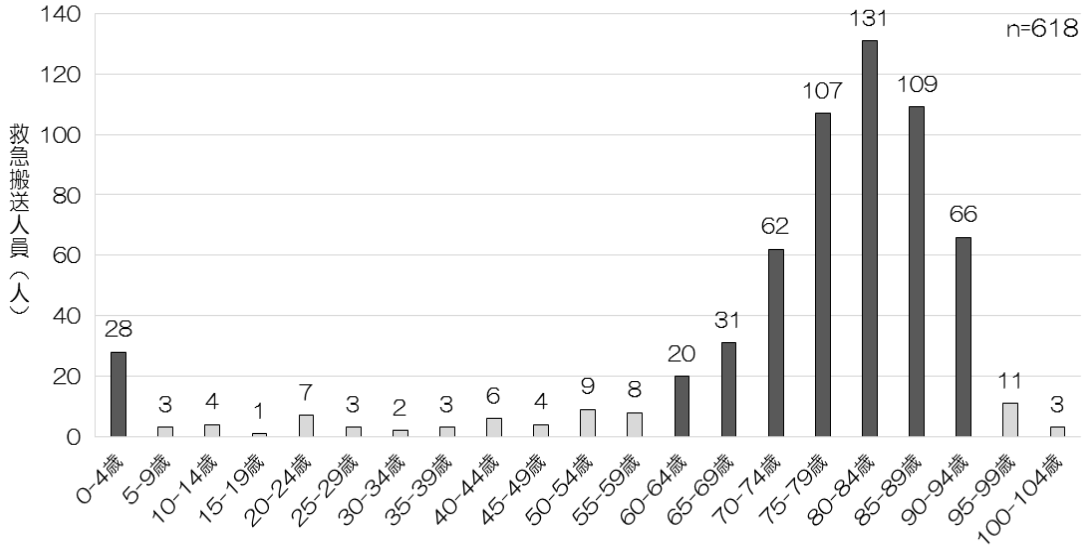


図２－37　年齢層別救急搬送人員

⑶　発生場所別搬送人員

「おぼれる」事故の発生場所は、住宅等居住場所が８割以上で最も多くなっています（図２−38）。

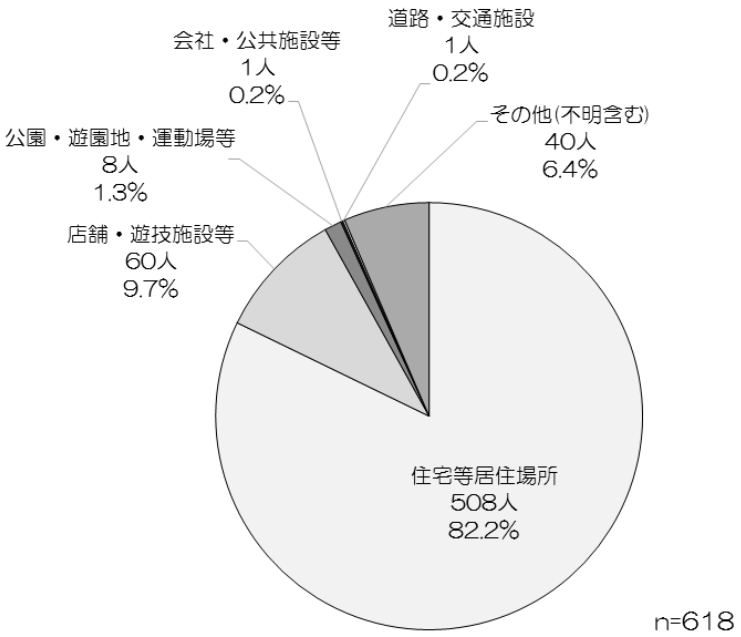


図２−３８　発生場所別救急搬送人員

⑷　初診時程度別搬送人員

初診時程度別にみると、９割以上が中等症以上と診断されており、さらに約８割が重篤又は死亡と診断されています（図２−39）。

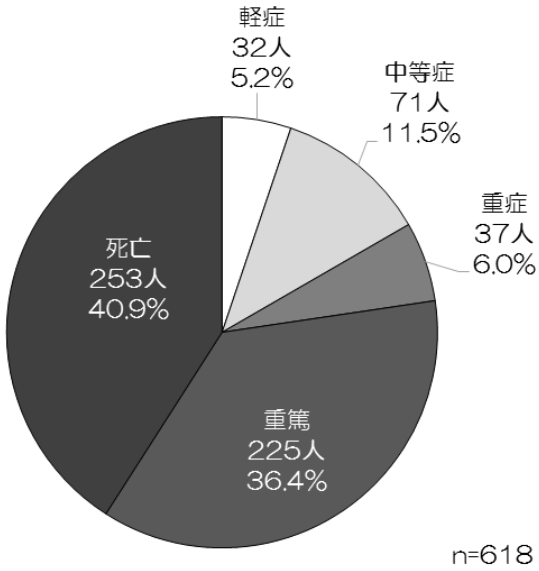


図２−３９　初診時程度別救急搬送人員

【事例　おぼれる】

入浴後、風呂から出てこないため心配し様子を見に行くと、浴槽内で顔を水没させ意識の無い状態でいるのを発見した（８０代　重篤）。

第３部　年齢からみた事故

ここでは、年齢層別での比較や乳幼児、就学区分、成人、高齢者などの年齢区分ごとに事故の傾向や事故の要因等を取り上げています。

令和元年中の救急搬送人員を年齢層別にみると、７０代が２５,０００人、８０代が３５,０００人を超え、多く救急搬送されています。

また、若い年代をみると９歳以下が１１,９１９人と多く救急搬送されています（図３－１）。

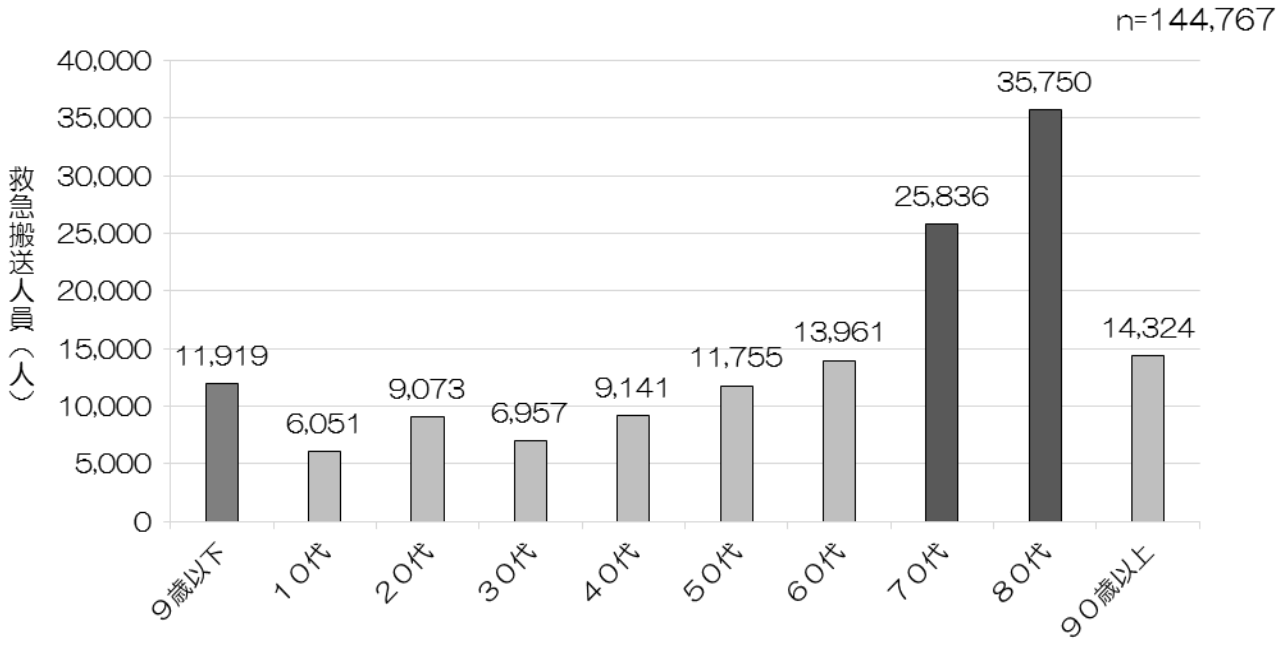


図３－１　年齢層別救急搬送人員

1. 年齢層別での比較

(1)　年別搬送人員での比較

過去５年間の救急搬送人員を比較すると、９ 歳以下から６０代はほぼ横ばいで推移している一方で７０歳以上では増加傾向にあります（図３－２から図３－１１）。

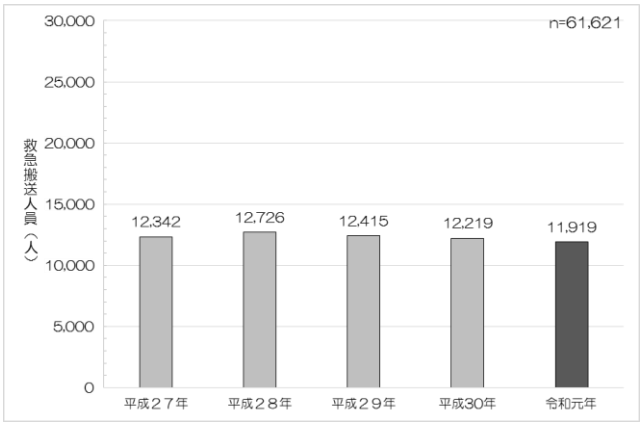


図３－２　９歳以下

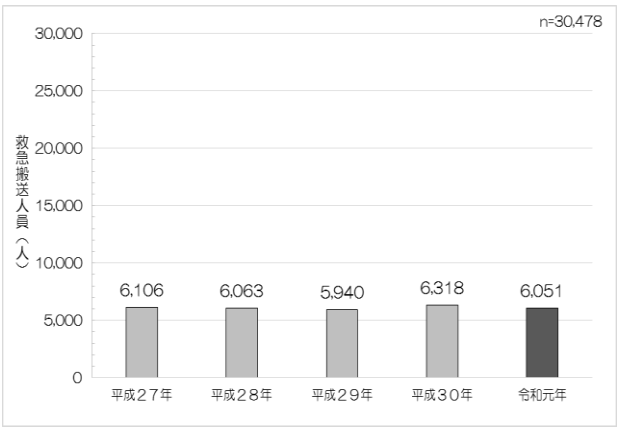


図３－３　１０代

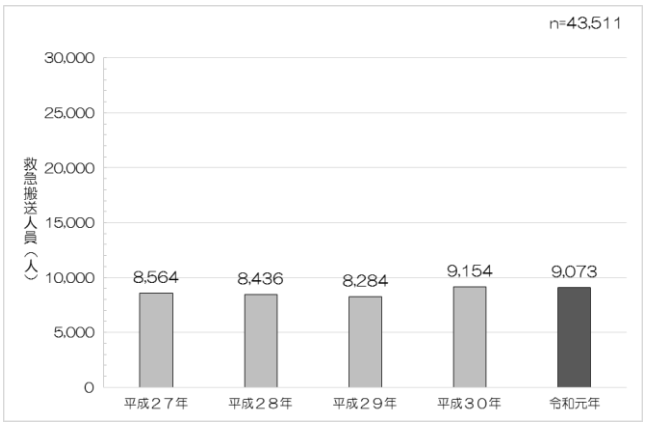


図３－４　２０代

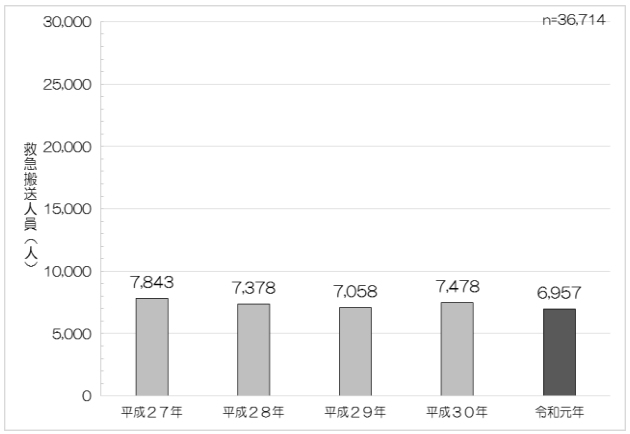


図３－５　３０代

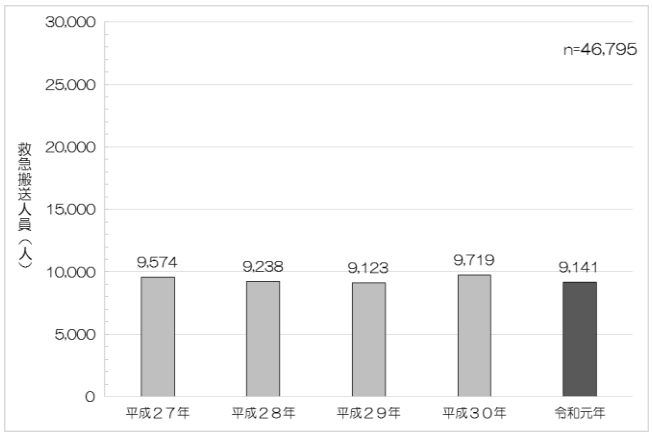


図３－６　４０代

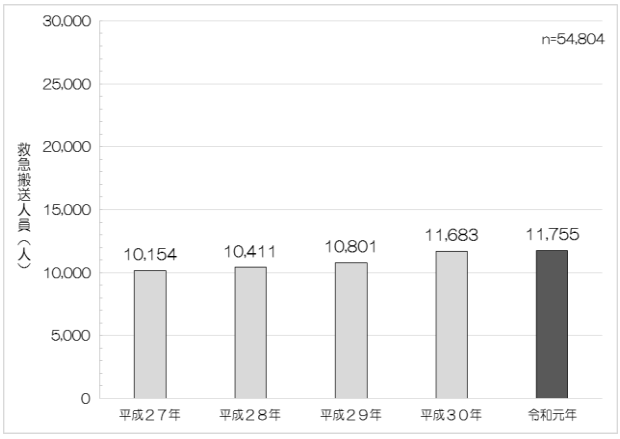


図３－７　５０代

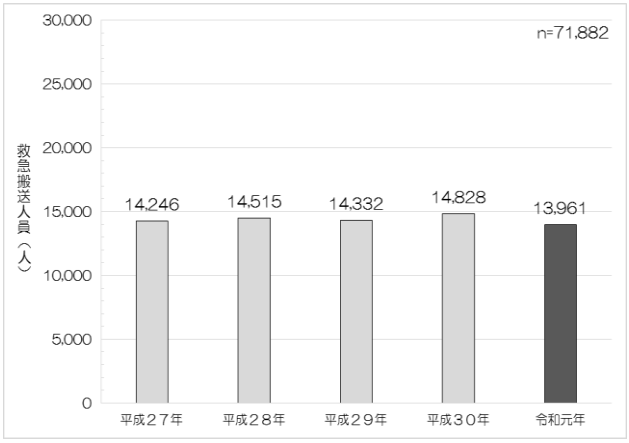


図３－８　６０代

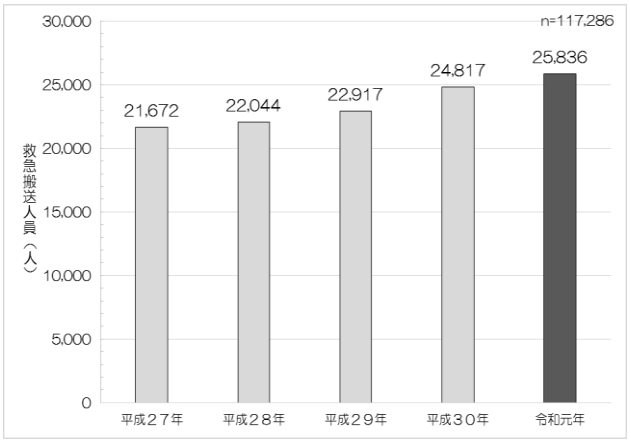


図３－９　７０代

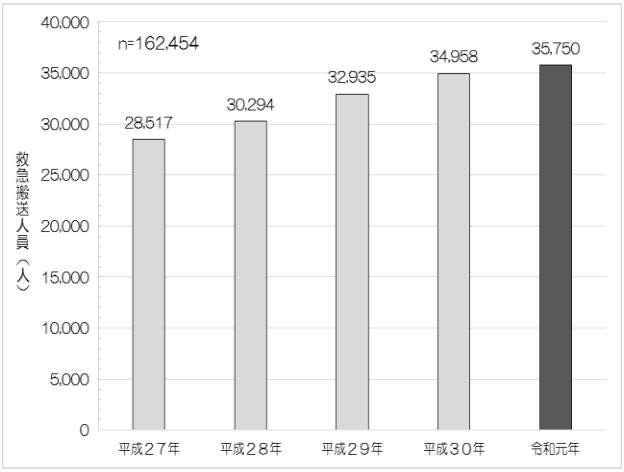


図３－１０　８０代

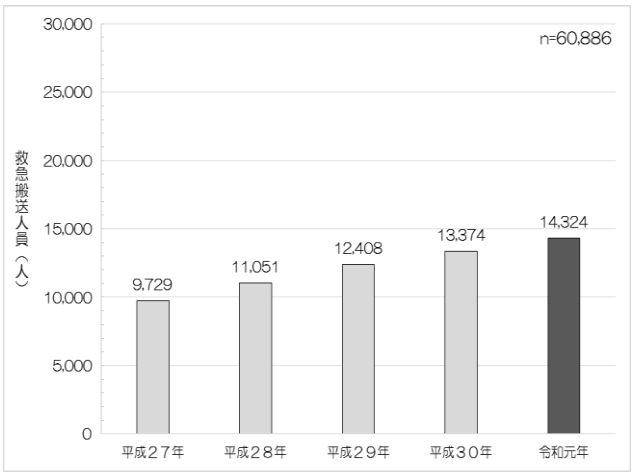


図３－１１　９０歳以上

（2） 事故種別（その他、不明を除く）ごとの比較

事故種別（その他、不明を除く）ごとに比較すると、「ころぶ」事故の割合は、５０代から全体の６割以上を占めています。「落ちる」事故では９歳以下で約３割を占めています。「切る・刺さる」事故では２０代と３０代で１割以上を占めています。「ものがつまる等」の事故については、９歳以下では１割以上を占めています（図３－１２から図３－２１）。

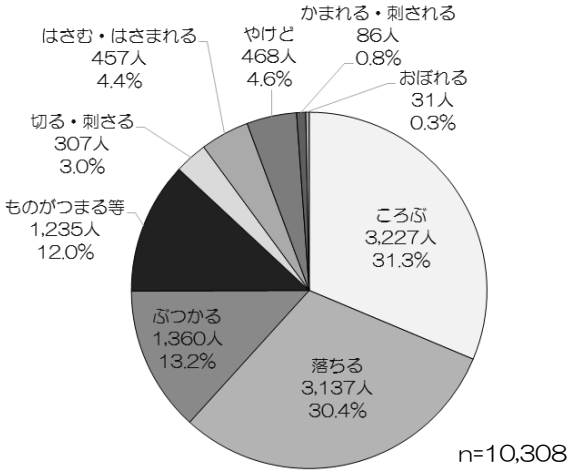


図３－１２　９歳以下

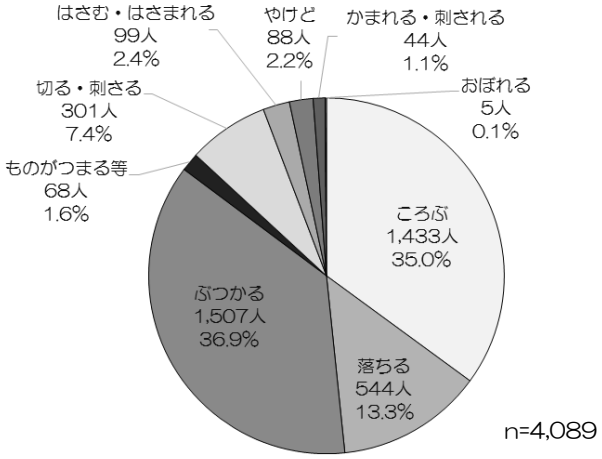


図３－１３　１０代

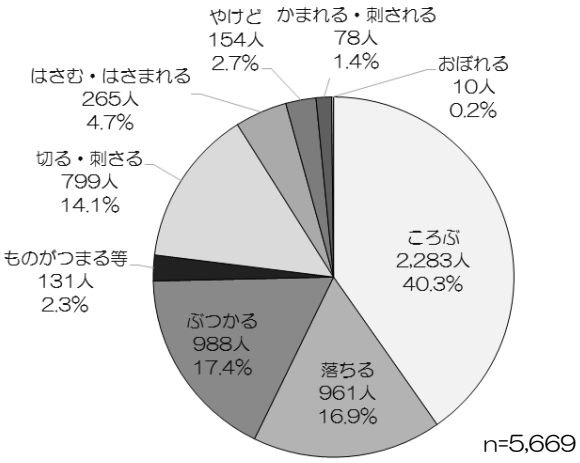


図３－１４　２０代

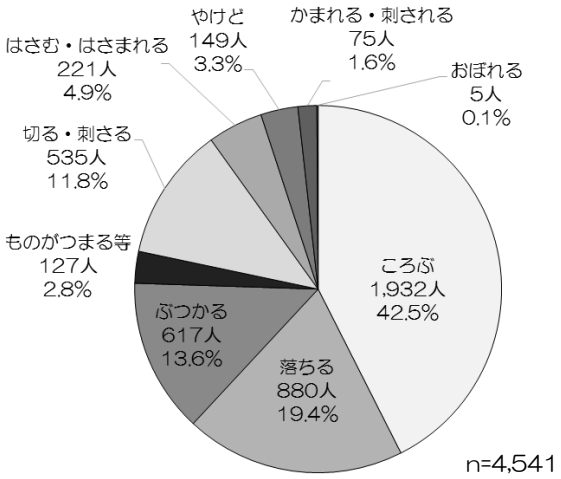


図３－１５　３０代

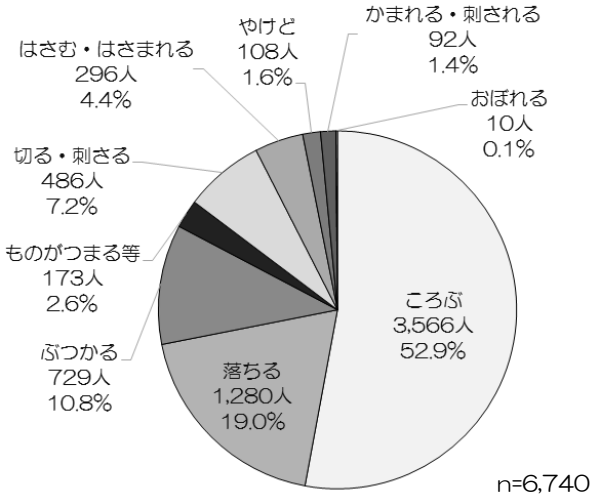


図３－１６　４０代

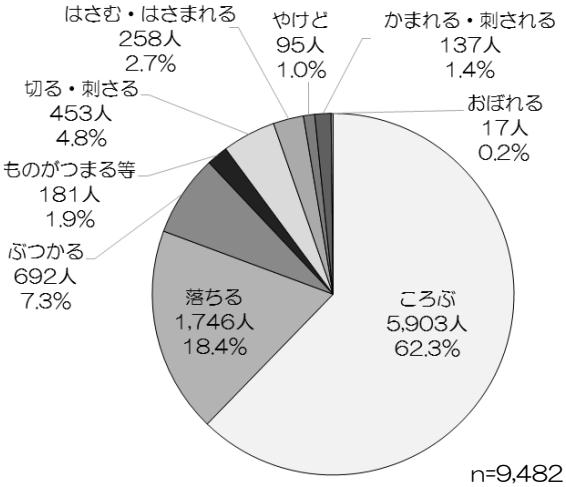


図３－１７　５０代

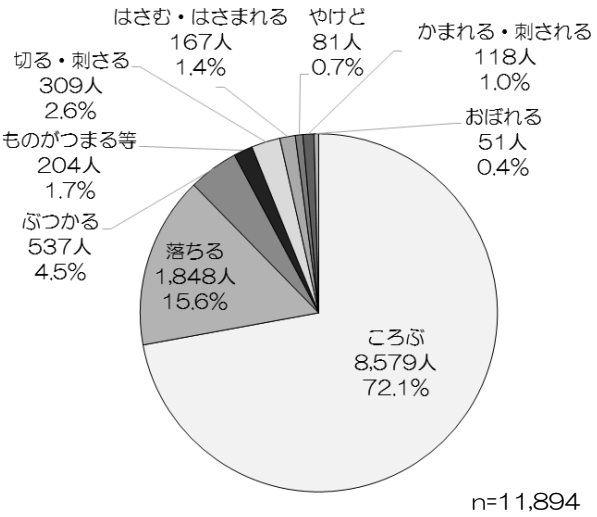


図３－１８　６０代

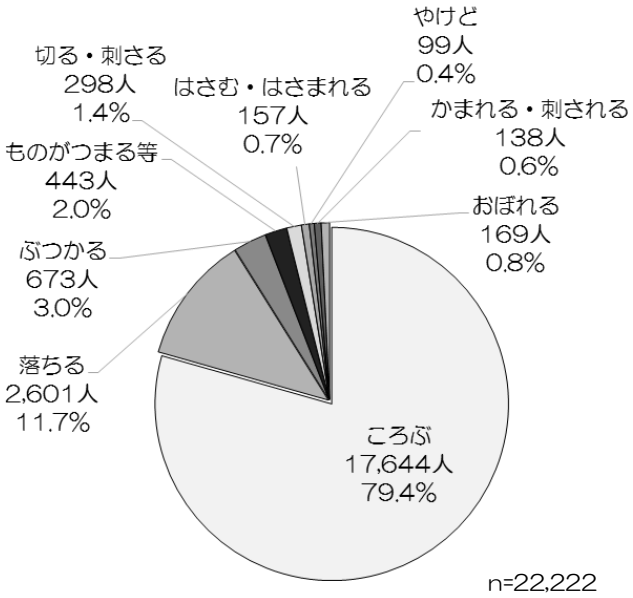


図３－１９　７０代

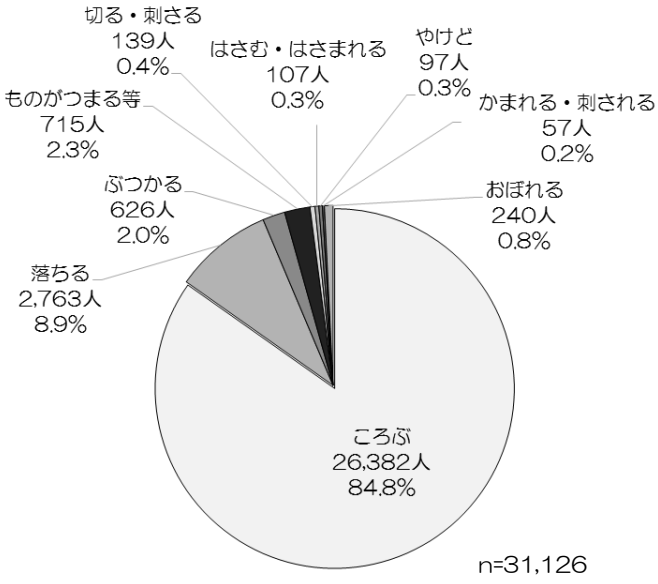


図３－２０　８０代

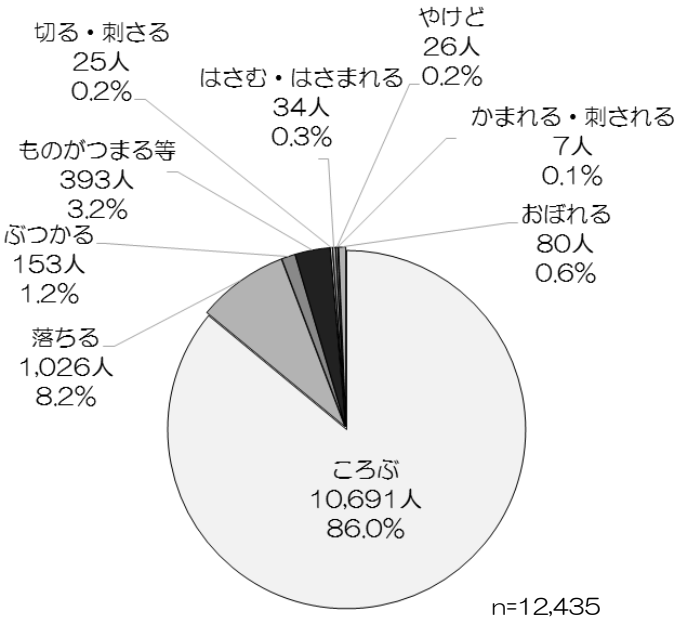


図３－２１　９０歳以上

（3） 時間帯別での比較

時間帯別に比較すると、９歳以下では１７時から２０時までの時間帯で1,０００人以上が救急搬送されています。１０代では日中が多くなっており、２０代から５０代にかけては夜間に増加しています。６０代では夜間に加えて、日中でも多く救急搬送されています。７０代以上では夜間の救急搬送が減少し、日中に多く救急搬送されています（図３－２２から図３－３１）。

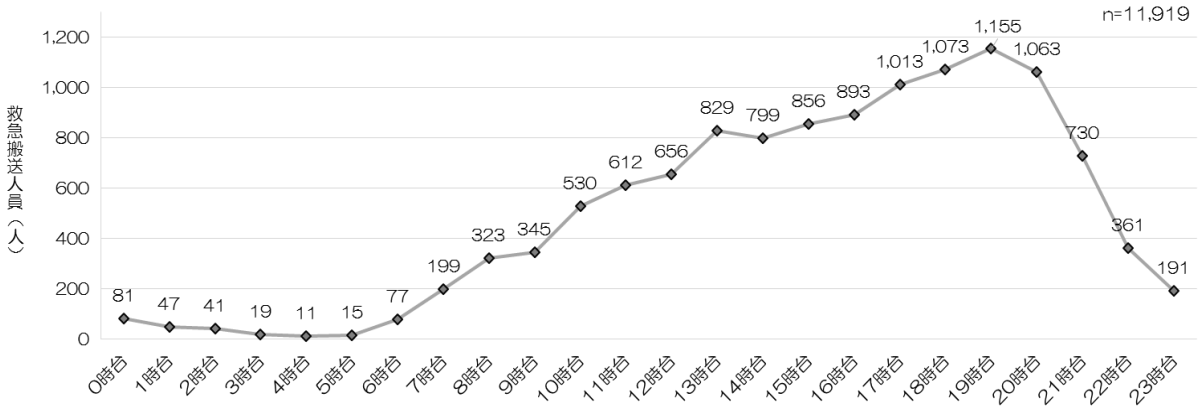


図３－２２　９歳以下

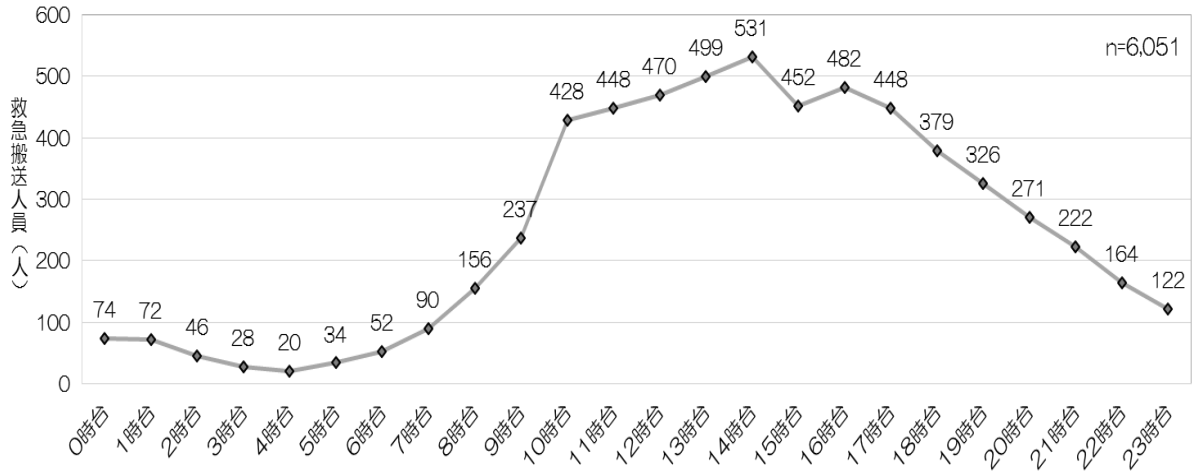


図３－２３　１０代

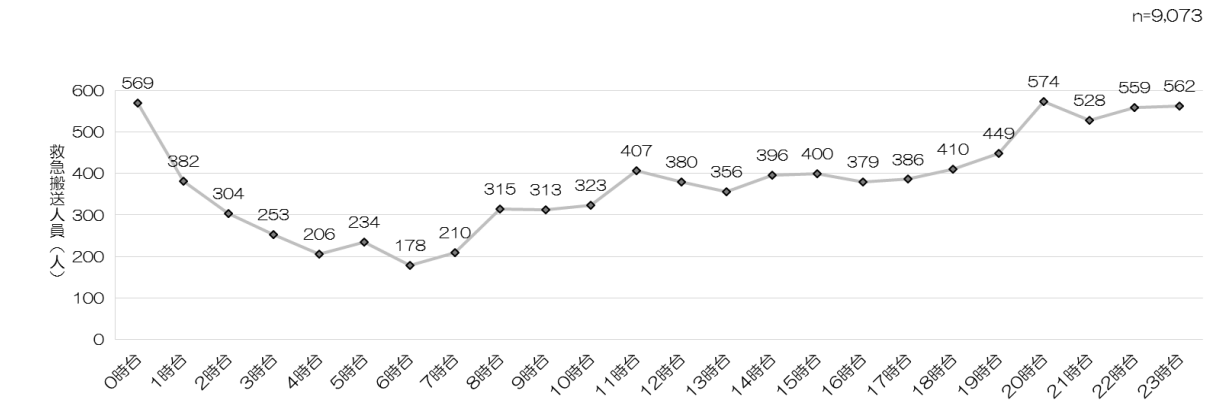


図3−24　20代

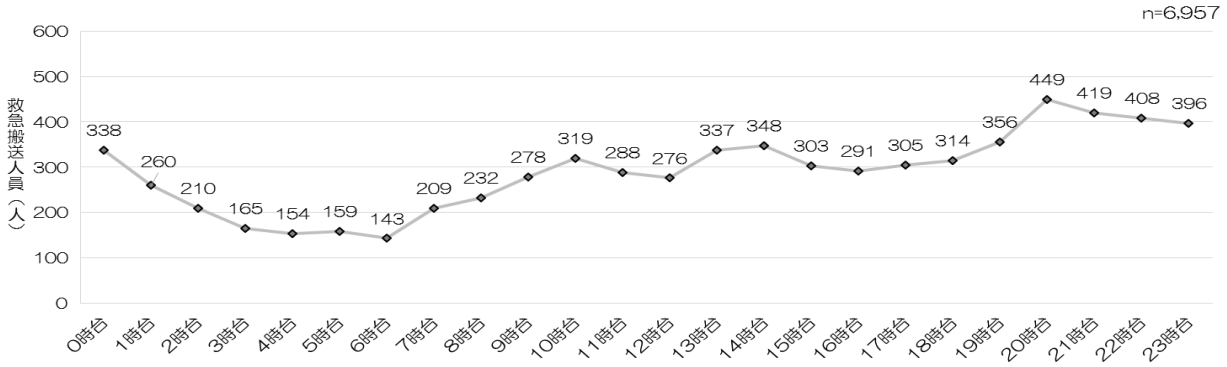


図3−25　30代

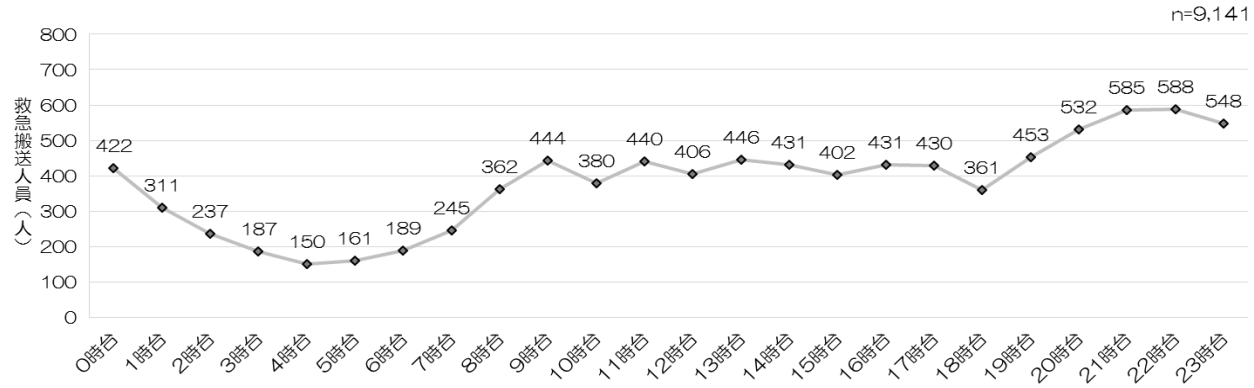


図3−26　40代

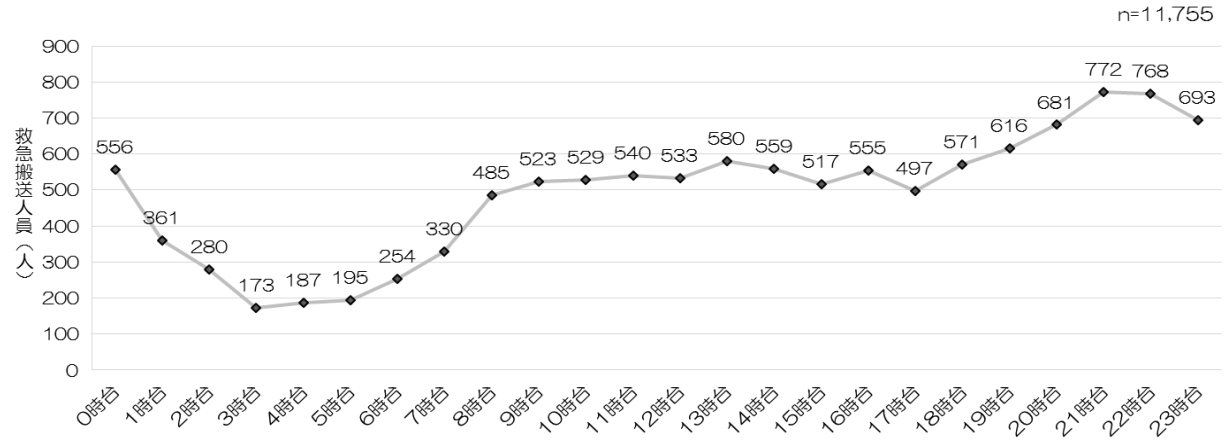


図3−27　50代

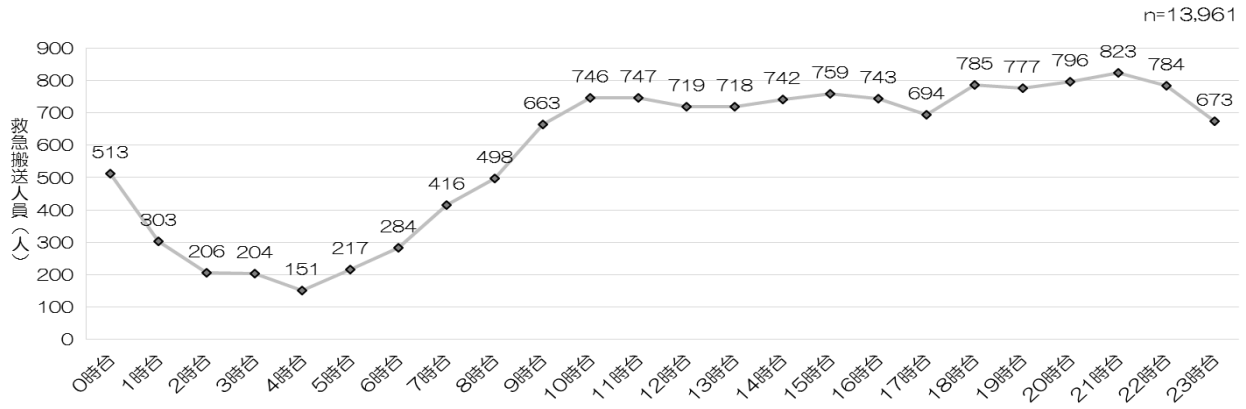


図３－２８　６０代

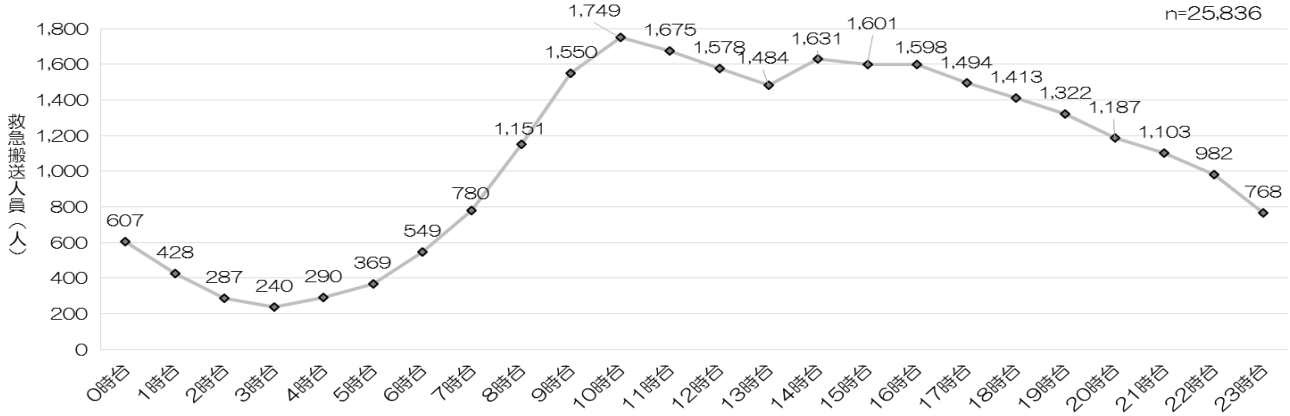


図３－２９　７０代

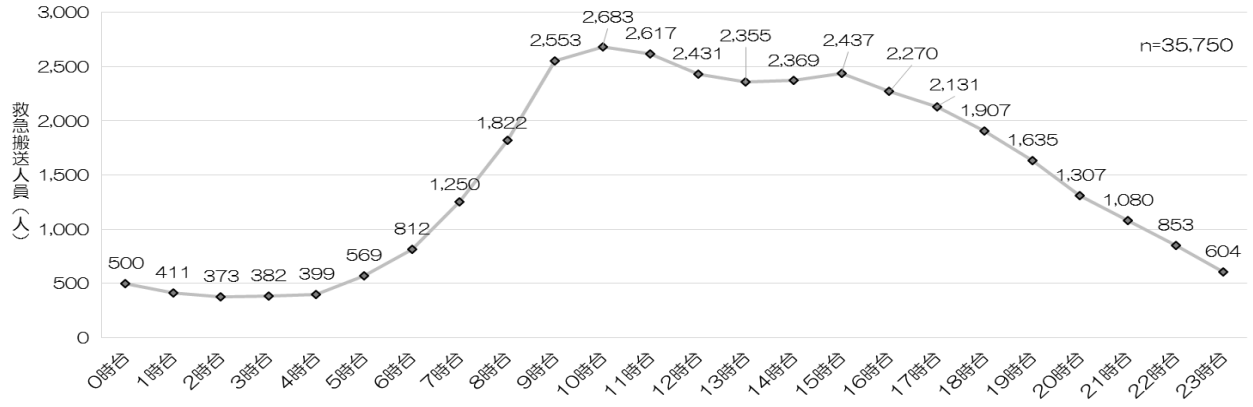


図３－３０　８０代

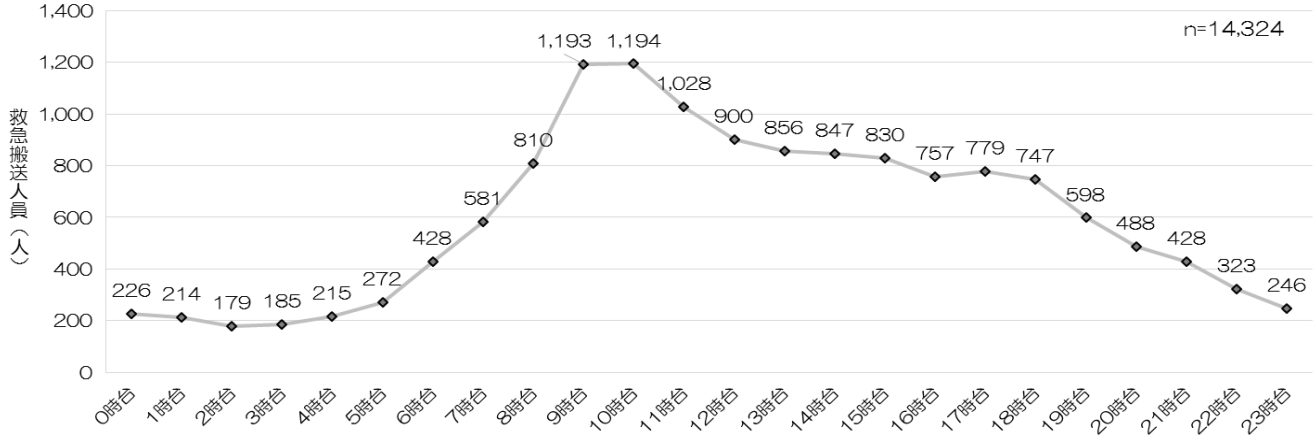


図３－３１　９０歳以上

2. 年齢区分からみた事故

⑴　０歳～５歳（乳幼児）の事故

①　０歳～５歳

ア　年別搬送人員

０歳から５歳の乳幼児の事故で、平成２７年から令和元年までの５年間に４８,２２６人が救急搬送されています。令和元年は、昨年より減少し9,２７５人が救急搬送されています（図３－３２）。

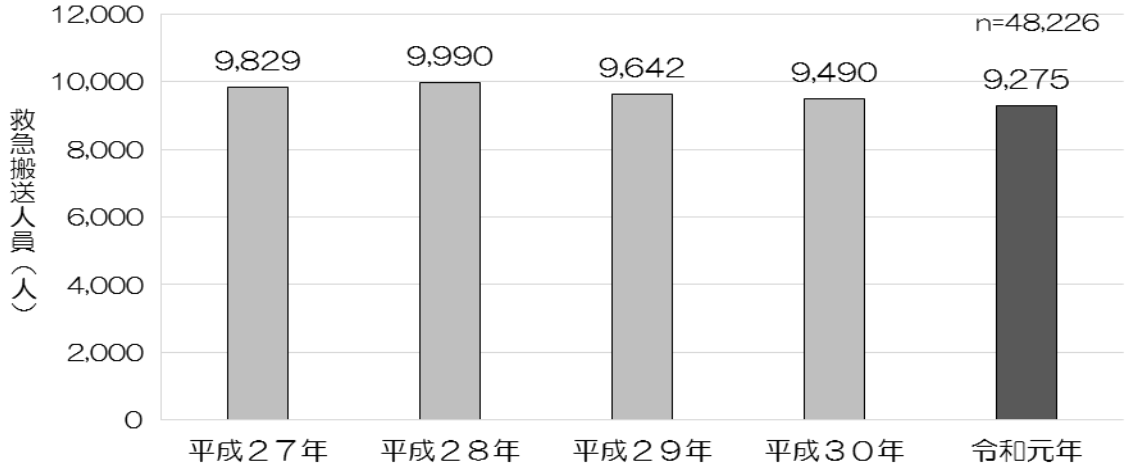


図３－３２　年別の救急搬送人員

イ　年齢別搬送人員

令和元年中の乳幼児の事故を年齢別にみると、１歳児の救急搬送人員が2,２１８人と最も多く、次いで２歳児が1,８７４人となっています（図 ３－３３）。

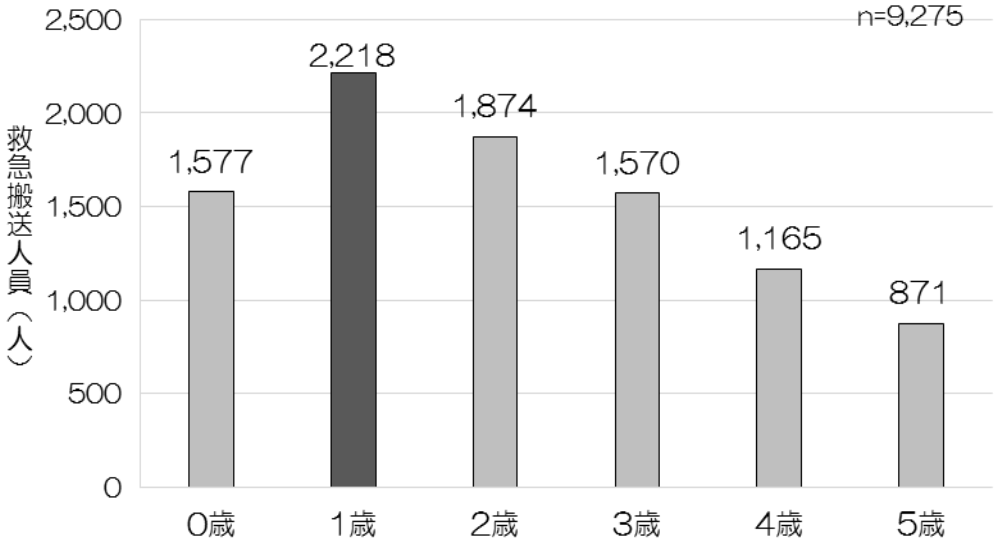


図３－３３　年齢別救急搬送人員

ウ　時間帯別搬送人員

時間帯別では、１８時台から２０時台に多く救急搬送されています（図３－３４）。

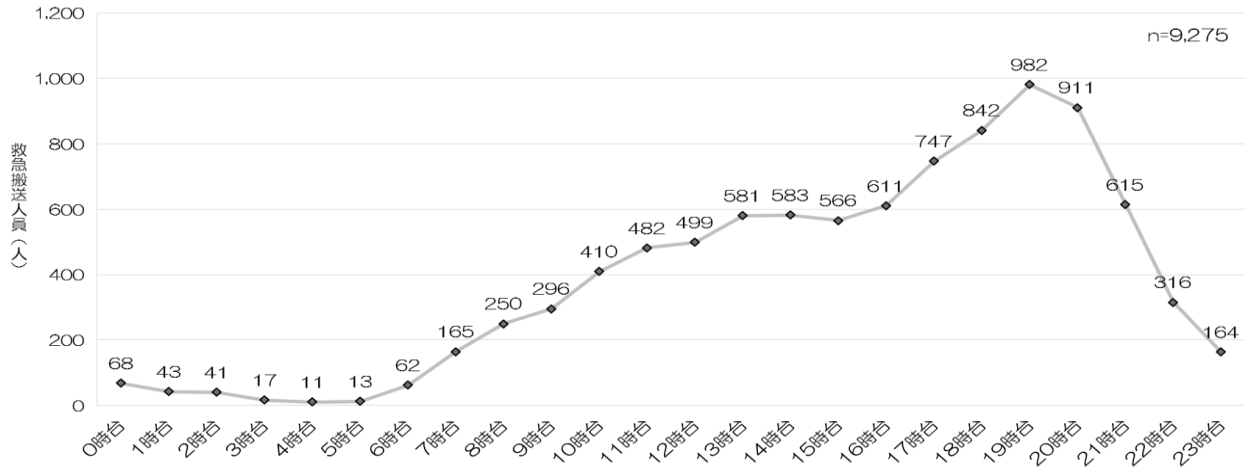


図 ３－３４　時間帯別救急搬送人員

エ　発生場所別搬送人員

乳幼児の事故の発生場所の約７割は、住宅等居住場所となっています（図 ３－３５）。

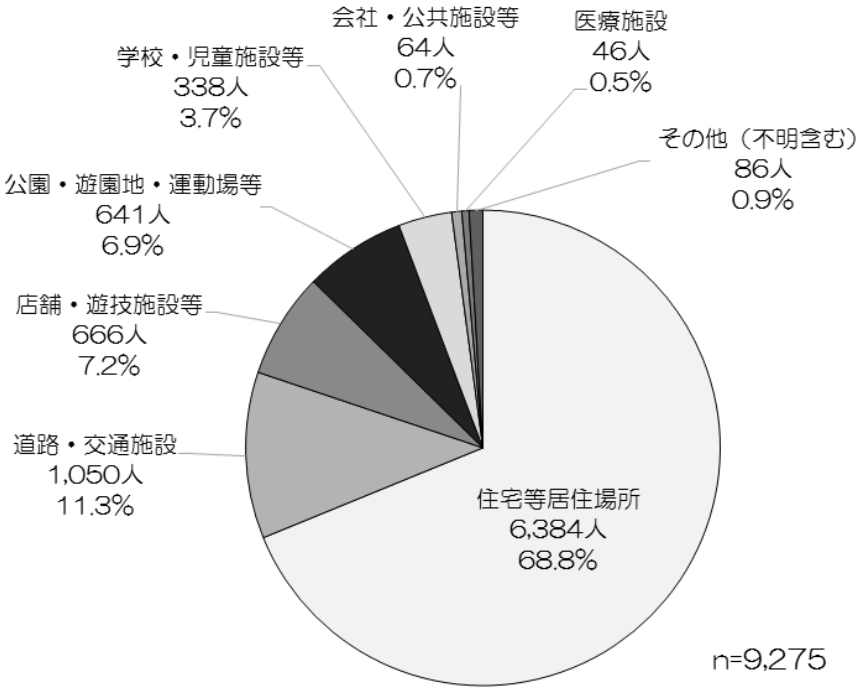
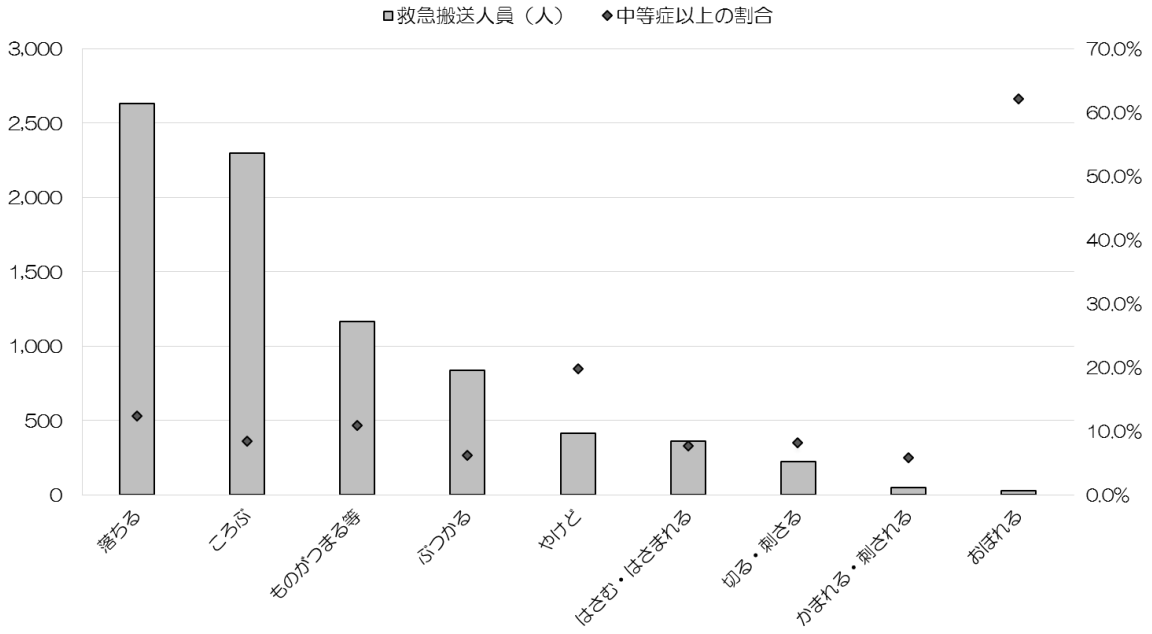


図３－３５　発生場所別救急搬送人員

オ　事故種別ごとの搬送人員

乳幼児の事故でもっとも多いのは「落ちる」事故で、2,６３３人が救急搬送されています。初診時程度で中等症以上の割合が最も高いのは「おぼれる」事故で、６割以上と突出して高くなっています。また、「やけど」でも約２割が中等症以上と診断されています（図３－３６）。



事故種別	落ちる	ころぶ	ものがつまる等	ぶつかる	やけど	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	2,633人	2,300人	1,163人	839人	414人	362人	223人	51人	29人
中等症以上の割合	12.3%	8.5%	10.8%	6.2%	19.8%	7.7%	8.1%	5.9%	62.1%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－３６　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

カ　年齢ごとにみる特徴的な事故の変化

乳幼児は日々成長し、昨日できなかったことが、今日はできるようになっているかもしれません。子供の発達を知り、その時期に起こりやすい事故を知り対策をとることで、重大な事故を防ぐことが出来ます。

０歳

ベッド（１３４人）や**人（１２１人）**が抱いている状態から「落ちる」事故が多く発生しています。また、**包み・袋（９５人）**や**たばこ（５６人）、玩具（４４人）**を「誤って飲み込む」事故も多く発生しており、なんでも口に入れてしまう特徴がみてとれます。また、**ポット・魔法瓶（２９人）**で「やけど」をする事故も発生しています。

１歳

一人歩きを始める頃で、**階段（１４２人）**や**椅子（１０２人）**などの家具から「落ちる」事故や、**その他の家具（４８人）や机・テーブル（４３人）**に起因する「ころぶ」事故、「ぶつかる」事故が多く発生しています。
その他にも、**たばこ（３９人）**や**薬剤等（２７人）**を「誤って飲み込む」事故や、**手動ドア（３５人）**に「はさむ・はさまれる」事故、**お茶・コーヒー類（３４人）**などによる「やけど」の事故など、様々な事故が発生しています。

２歳

階段（１１７人）や椅子（６２人）などに起因する「落ちる」事故が多く発生しており、**自転車の補助イス（６０人）でも発生して**います。「ころぶ」事故では、**机・テーブル（４４人）**などの家具類で多く発生しています。また、「ぶつかる」事故、**手動ドア（３２人）**に「はさむ・はさまれる」事故も多く発生しています。**熱湯（９人）**や**カップ麺（８人）**に起因する「やけど」の事故も発生しており、注意が必要です。

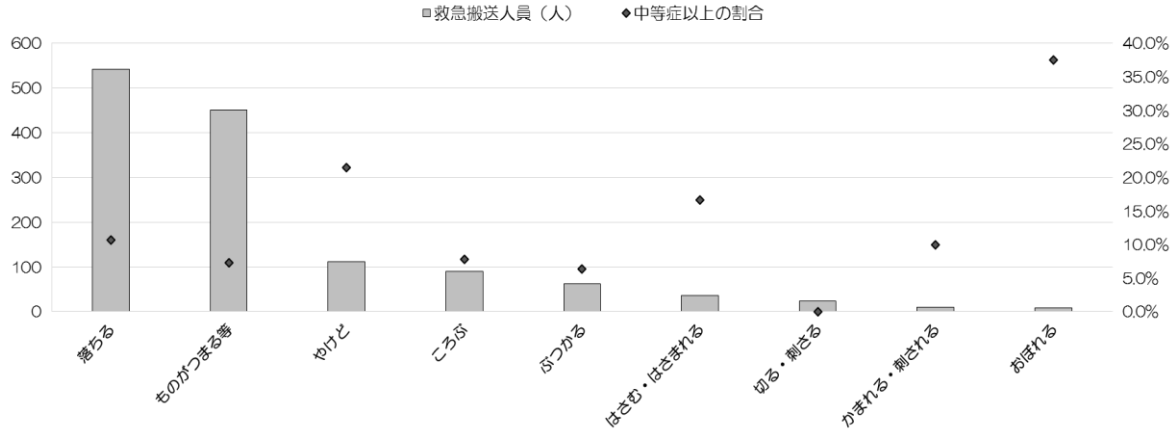
３歳
｜
５歳

階段（８４人）や**机・テーブル（７６人）**で「ころぶ」事故が多く発生しています。また、２歳児と同じく、**自転車の補助イス（７６人）**から「落ちる」事故も多く発生しています。**その他の玩具（４５人）**などを「誤って飲み込む」事故や、**ナイフ（１６人）**による「切る・刺さる」事故が発生しており、注意が必要です。

② ０歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

０歳児に最も多いのは「落ちる」事故で５４２人が救急搬送されています。「おぼれる」事故は、中等症以上となる割合が約４割と最も高くなっています（図３－３７）。



事故種別	落ちる	ものがつまる等	やけど	ころぶ	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	542人	451人	112人	90人	63人	36人	24人	10人	8人
中等症以上の割合	10.7%	7.3%	21.4%	7.8%	6.3%	16.7%	0.0%	10.0%	37.5%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－３７ 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

０歳児に最も多い事故は、ベッドから落ちる事故で１３４人が救急搬送されています。「ものがつまる」等の事故ではお菓子の袋やペットボトルのラベルなどの「包み・袋」の誤飲による事故が多く発生しています（表１）。

表１ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

種別／順位	落ちる	ものがつまる等	やけど	ころぶ	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
1位	ベッド	包み・袋	ポット・魔法瓶	机・テーブル	人	手動ドア	ハサミ・爪切り	動物等	浴槽
	134人	95人	29人	12人	9人	10人	9人	10人	8人
2位	人	たばこ	味噌汁・スープ	その他の玩具	その他の家具	エレベーター	ナイフ		
	121人	56人	20人	4人	7人	2人	3人		
3位	階段	その他の玩具	お茶・コーヒー類	床・畳	机・テーブル	その他の玩具	耳掻き・綿棒		
	43人	44人	15人	3人	6人	2人	3人		
4位	ソファ	異物	熱湯	ベッド	壁・天井	その他の家具	アルミ缶		
	42人	22人	15人	2人	6人	2人	2人		
5位	ベビーカー	薬剤等	鍋	自動車	ベッド	ベッド	歯ブラシ		
	41人	11人	7人	2人	5人	2人	2人		

※その他の玩具とは、プラスチック製の玩具やフィギュア、シールや積み木など。

※その他の家具とは、棚や箱など。

ウ　０歳の事故事例

【事例１　ベビーベッドから転落】

親がミルクを作っている間、子どもから目を離していたところ、ベッドから転落した（４か月　中等症）。

【事故防止ポイント】

ベッドやソファ、階段などから「落ちる」事故は、０歳児に多く発生しています。昨日までできなかった寝返りが、今日できるかもしれません。目を離すときはベビーベッドの柵を上げましょう。また、高い所に寝かせないようにしましょう。

階段の上下には、転落防止用の柵等をつけましょう。

【事例２　フィルムを誤って飲み込む】

ペットボトルのラベルをかじっており、その後嘔吐した（９か月　軽症）。

【事故防止ポイント】

子どもが飲み込めそうなものが子どもの届くところにないように、日頃から整理整頓をこころがけましょう。早い子では、５か月頃から「物をつかむ」、つかんだら「口に入れる」行動が見られます。乳幼児は、トイレットペーパーの芯（３９mm）を通る大きさのものなら、口に入れてしまい飲み込む危険性があります。

【事例３　親が寝てしまい浴槽でおぼれる】

親と入浴し、その後物音がないことを不安に思った家族が浴室を確認したところ、浴槽に水没している子どもと、寝てしまっている親を発見した（５か月　中等症）。

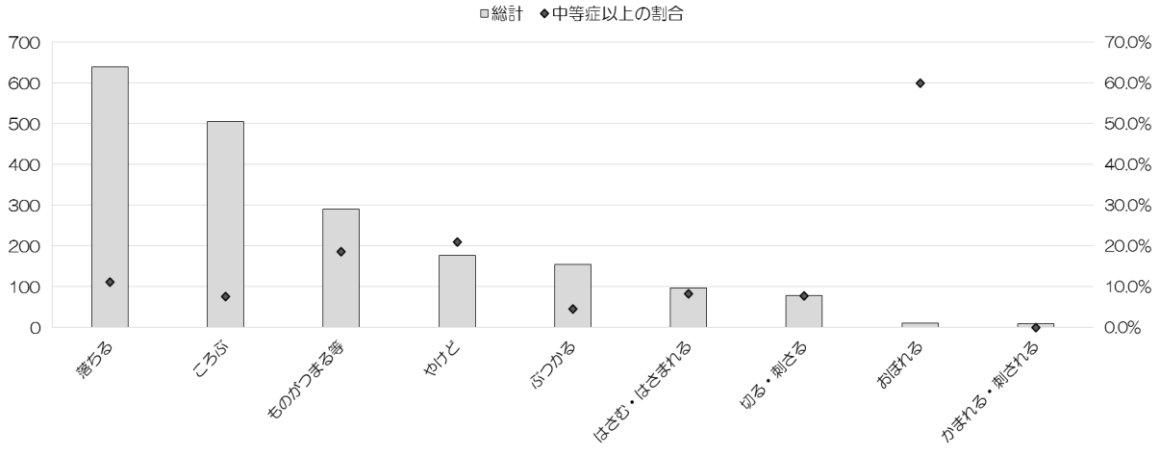
【事故防止ポイント】

おぼれの事故は重症化しやすいため、十分気を付けましょう。また、幼児は水深が浅くてもおぼれる可能性があるため、わずかな時間でも目を離さないようにしましょう。

③ １歳

ア　事故種別ごとの搬送人員

１歳になると、歩く、走る、といった行動ができるようになる時期なので、０歳に比べ、「落ちる」や「ころぶ」事故が多くなります。「おぼれる」事故は、中等症以上となる割合が最も高く、「やけど」事故でも２割以上が中等症以上と診断されています（図３－３８）。



事故種別	落ちる	ころぶ	ものがつまる等	やけど	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	おぼれる	かまれる・刺される
救急搬送人員	640人	505人	290人	176人	155人	97人	78人	10人	9人
中等症以上の割合	11.1%	7.5%	18.6%	21.0%	4.5%	8.2%	7.7%	60.0%	0.0%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－３８　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

１歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、お茶・コーヒー類による「やけど」事故も多く発生しています（表２）。

表２　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

順位＼種別	落ちる	ころぶ	ものがつまる等	やけど	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	おぼれる	かまれる・刺される
1位	階段	その他の家具	たばこ	お茶・コーヒー類	その他の家具	手動ドア	歯ブラシ	浴槽	動物等
	142人	48人	39人	34人	19人	35人	20人	9人	9人
2位	椅子	机・テーブル	薬剤等	熱湯	机・テーブル	エレベーター	ナイフ	公園	
	102人	43人	27人	29人	19人	9人	17人	1人	
3位	人	ベッド	野菜・果物	味噌汁・スープ	壁・天井	その他の家具	ハサミ・爪切り		
	53人	31人	24人	29人	14人	5人	11人		
4位	自転車の補助イス	椅子	電池	ポット・魔法瓶	ベッド	自転車	食器類		
	51人	28人	20人	19人	13人	5人	9人		
5位	ベビーカー	階段	その他の玩具	鍋	手動ドア	フェンス・柵・塀	耳掻き・綿棒		
	47人	27人	18人	16人	9人	4人	5人		

※その他の玩具とは、プラスチック製の玩具やフィギュア、シールや積み木など。

※その他の家具とは、棚や箱など。

ウ　１歳の事故事例

【事例１　階段から落ちる】

マンションの踊り場で遊んでいた際に、足を滑らせて階段から転落し受傷した（１歳　重症）。

【事故防止ポイント】

１歳児は０歳児と比べ、活発に動くようになります。普段から目を離さないよう注意しましょう。また、椅子などに座らせる時は、チェアベルト等を活用し、大きな事故にならないように工夫しましょう。

【事例２　薬の誤飲】

自宅のテーブル上に置いてあった親の処方薬を、子どもが誤飲した（１歳　中等症）。

【事故防止ポイント】

医薬品は、子供の手の届くところに置かないようにしましょう。

医薬品は、薬理作用があるため、保管や管理には細心の注意を払いましょう。

シロップ等、子供が飲みやすいように味付けしてあるものは、冷蔵庫に入れておいても、自ら取り出して飲んでしまうことがあるため、保管・管理には十分注意しましょう。

【事例３　歯ブラシが刺さった事故】

ソファの上に立って歯磨きをしている際に転倒し、口腔内から出血があった（１歳　軽症）。

【事故防止ポイント】

歯ブラシを口に入れたまま、歩いたり走ったりさせないようにしましょう。過去には口腔内に刺さる事例も発生しています。

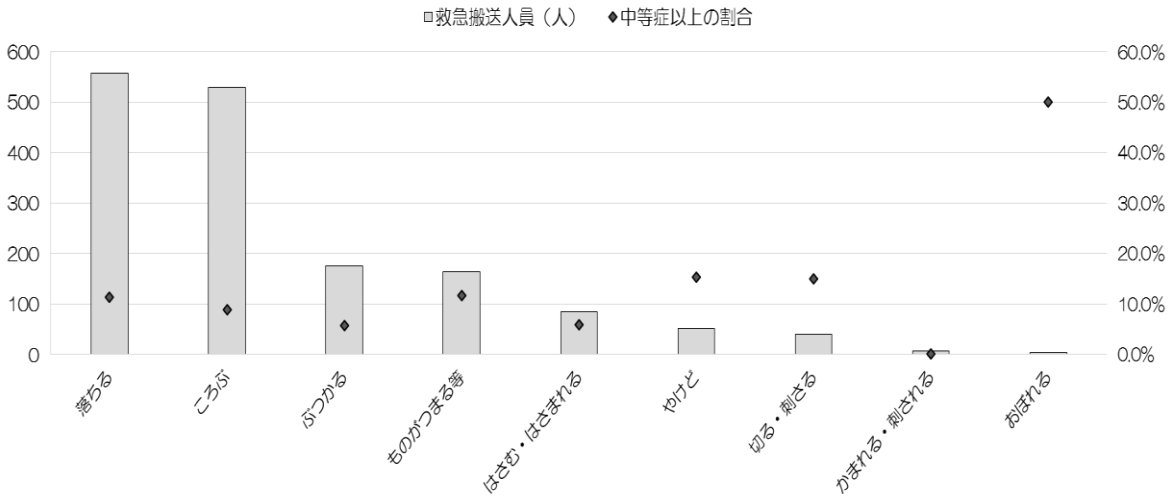
不安定な場所で歯みがきをしていて、転落した事例もあることから、椅子や踏み台等に乗った状態で歯みがきをさせないようにしましょう。

歯みがき中に人や物と接触し、受傷するケースも多くあるため、歯みがき中は保護者が付き添い、周囲にも注意を払いましょう。

④ ２歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

「落ちる」事故、「ころぶ」事故に次いで、「ぶつかる」事故が多く発生しています。「おぼれる」事故では５割が中等症以上と診断されています（図３－３９）。



事故種別	落ちる	ころぶ	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	やけど	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	557人	530人	175人	163人	84人	52人	40人	7人	4人
中等症以上の割合	11.3%	8.9%	5.7%	11.7%	6.0%	15.4%	15.0%	0.0%	50.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－３９　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

２歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、運動機能が発達し、自由に動き回れるようになってくるため、家の中を走り回って、家具等に「ぶつかる」事故も発生しています（表３）。

表３　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

順位＼種別	落ちる	ころぶ	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	やけど	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
1位	階段	机・テーブル	机・テーブル	その他の玩具	手動ドア	熱湯	ハサミ・爪切り	虫	浴槽
	117人	44人	28人	25人	32人	9人	9人	4人	4人
2位	椅子	その他の家具	その他の家具	魚等の骨	エレベーター	カップ麺	歯ブラシ	動物等	
	62人	35人	26人	14人	8人	8人	5人	3人	
3位	自転車の補助イス	階段	窓・サッシ	アメ玉類	鉄道車両の戸袋	鍋	食器類		
	60人	28人	11人	11人	8人	6人	5人		
4位	人	椅子	柱	薬剤等	その他の家具	味噌汁・スープ	ナイフ		
	45人	28人	11人	10人	5人	6人	4人		
5位	滑り台	ベッド	手動ドア	ビー玉類	自転車	お茶・コーヒー類	耳掻き・綿棒		
	39人	16人	10人	9人	5人	4人	3人		

※その他の玩具とは、プラスチック製の玩具やフィギュア、シールや積み木など。

※その他の家具とは、棚や箱など。

ウ　２歳の事故事例

【事例１　落ちる事故】

自宅の庭で泣き声がするので親が見に行くと、直前まで２階のベランダで遊んでいた子どもが泣きながら立っていた（２歳　中等症）。

【事故防止ポイント】

ベランダや窓の他に、椅子などの家具からの墜落事故も発生しています。高所からの墜落は重症化しやすいため十分注意しましょう。

【事例２　ボタン電池の誤飲】

腕時計用のボタン電池を交換しようとしたところ、目を離した際に腕時計を口にくわえており、ボタン電池がなくなっていた（２歳　軽症）。

【事故防止ポイント】

子どもが飲み込めそうなものは、子どもの手の届くところに置かないようにしましょう。

ボタン電池は放電能力が高いため、非常に短時間で消化管壁に潰瘍を作ります。

【事例３　はさまれる事故】

自宅内の扉の蝶番側の隙間に、子どもの指が入っていることに気付かず親が扉を閉めてしまい指が挟まり受傷した（２歳　軽症）。

【事故防止ポイント】

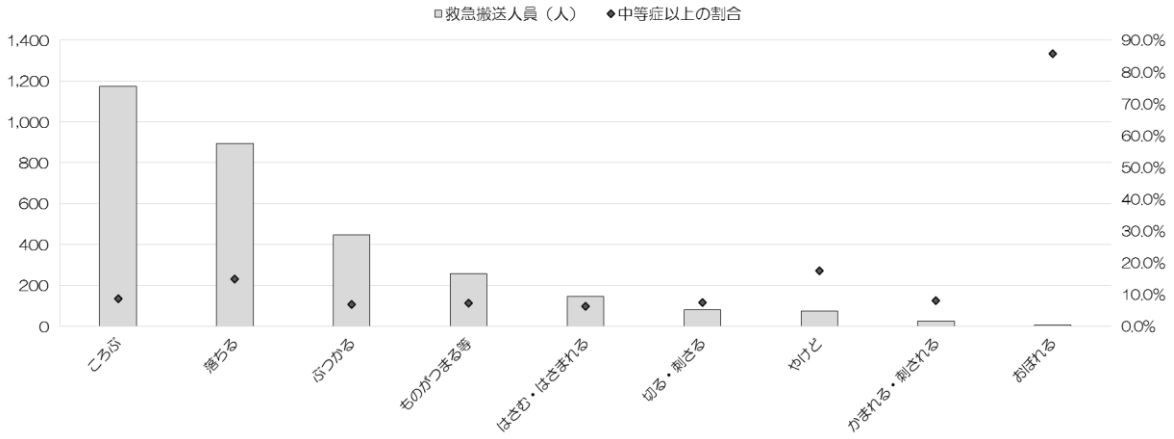
子供の「はさまれ」の原因で一番多いのは「手動ドア」です。子供の手や足は大人より小さく、狭い隙間でも入ってしまいます。指の切断に至ることもあるのでドアの開閉時は、注意しましょう。

ドアの蝶番側は、指はさみを防止するグッズなどでカバーすることも事故防止に効果的です。

⑤ ３歳～５歳

ア　事故種別ごとの搬送人員

３歳から５歳では、「ころぶ」事故が最も多くなっています。「おぼれる」事故は８割以上が中等症以上となっており、「落ちる」事故と「やけど」の事故は、１割以上が中等症以上と診断されています（図３－４０）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	1,175人	894人	446人	259人	145人	81人	74人	25人	7人
中等症以上の割合	8.8%	14.9%	7.0%	7.3%	6.2%	7.4%	17.6%	8.0%	85.7%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－４０　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

３歳から５歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、机・テーブルで「ぶつかる」事故も多く発生しています（表４）。

表４　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

種別／順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	階段	階段	机・テーブル	その他の玩具	手動ドア	ナイフ	味噌汁・スープ	虫	浴槽
	84人	147人	53人	45人	58人	16人	11人	16人	6人
2位	机・テーブル	自転車の補助イス	その他の家具	魚等の骨	自転車	ハサミ・爪切り	カップ麺	動物等	プール
	76人	76人	36人	28人	17人	11人	10人	9人	1人
3位	椅子	椅子	人	ビー玉類	鉄道車両の戸袋	歯ブラシ	熱湯		
	67人	68人	35人	25人	12人	6人	10人		
4位	その他の家具	ソファ	手動ドア	アメ玉類	エレベーター	ガラス片	ポット・魔法瓶		
	63人	59人	24人	23人	6人	4人	7人		
5位	段差	人	壁・天井	硬貨	その他の家具	食器類	お茶・コーヒー類		
	44人	56人	23人	13人	6人	4人	6人		

※その他の玩具とは、プラスチック製の玩具やフィギュア、シールや積み木など。
※その他の家具とは、棚や箱など。

ウ　３歳～５歳の事故事例

【事例１　ころぶ事故】

プールサイドを走っていた際に滑って転倒し、後頭部を受傷した（３歳　中等症）。

【事故防止ポイント】

３歳になると運動能力も高くなり行動範囲が広がっています。危険や安全の判断がまだ十分にできていませんので、危険な行動は繰り返し教えてあげましょう。

【事例２　遊具からの転落】

公園の滑り台から、約２m下の地面に落ちて受傷した（３歳　中等症）。

【事故防止ポイント】

墜落事故は重大事故につながる可能性が高い事故の一つです。

遊具からの転落事故の他、窓やベランダに置いてあったイスや室外機にのぼり、誤って墜落する事故も発生しています。

ベランダや窓の近くには子供がのぼれるものを置かないようにしましょう。

【事例３　やけどの事故】

机の上に置いてあったコーヒーの入ったマグカップを倒してしまい、体にコーヒーがかかり受傷した（４歳　重症）。

【事故防止ポイント】

やけどの恐れのあるものは、子供の手の届くところに置かないようにしましょう。

テーブル上に置かれた熱いものが入った容器を乳幼児が引き寄せ、やけどを負う事故が多く発生しています。テーブルの隅など、乳幼児の手の届きやすいところに熱いものは絶対に置かないようにしましょう。

⑵　６歳～１２歳（小学生）の事故

ア　年別搬送人員

小学生の年代では、令和元年中に４,３０７人が救急搬送されています（図 3－４１）。

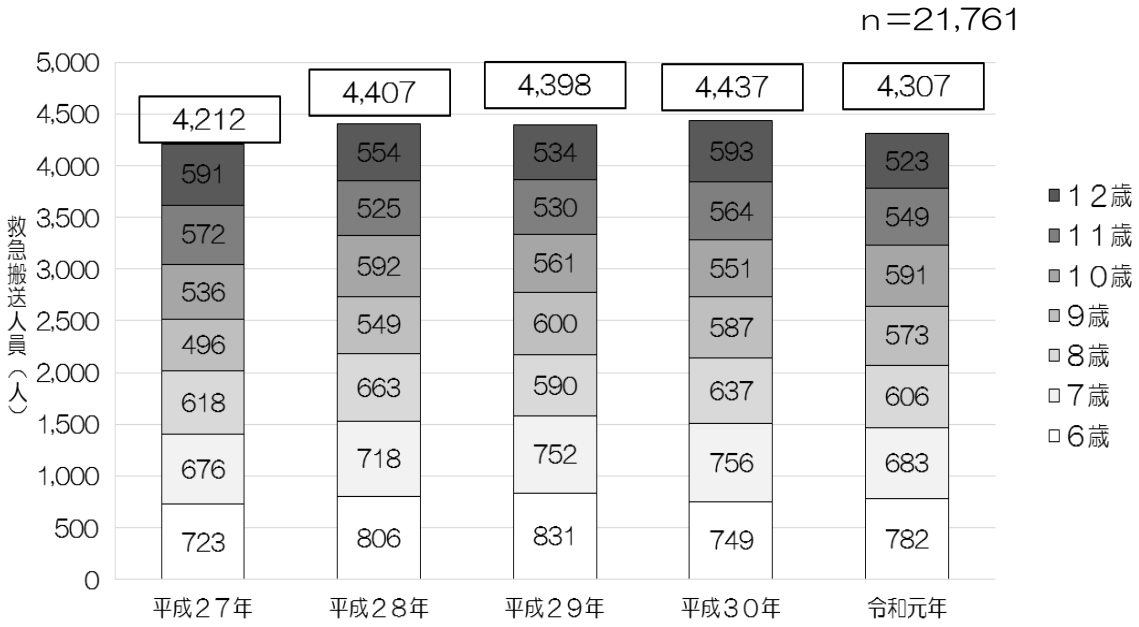


図３－４１　年別救急搬送人員（６歳～１２歳）

イ　月別搬送人員

月別では、5月から7月に多く搬送されています（図３－４２）。

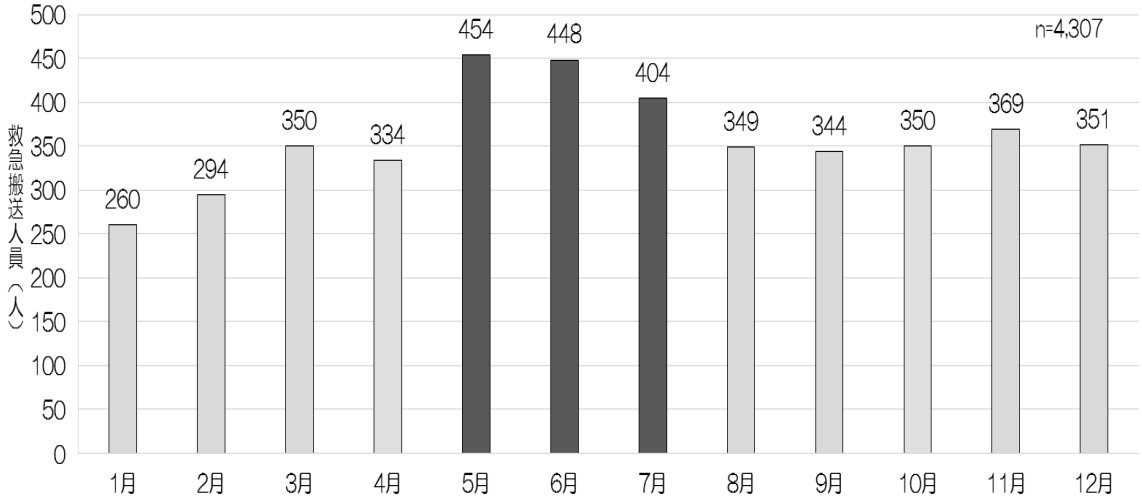


図３－４２　月別救急搬送人員

ウ　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所の他に学校・児童施設等が多くなっています。また、公園・遊園地・運動場等での事故も多く発生しています（図３－４３）。

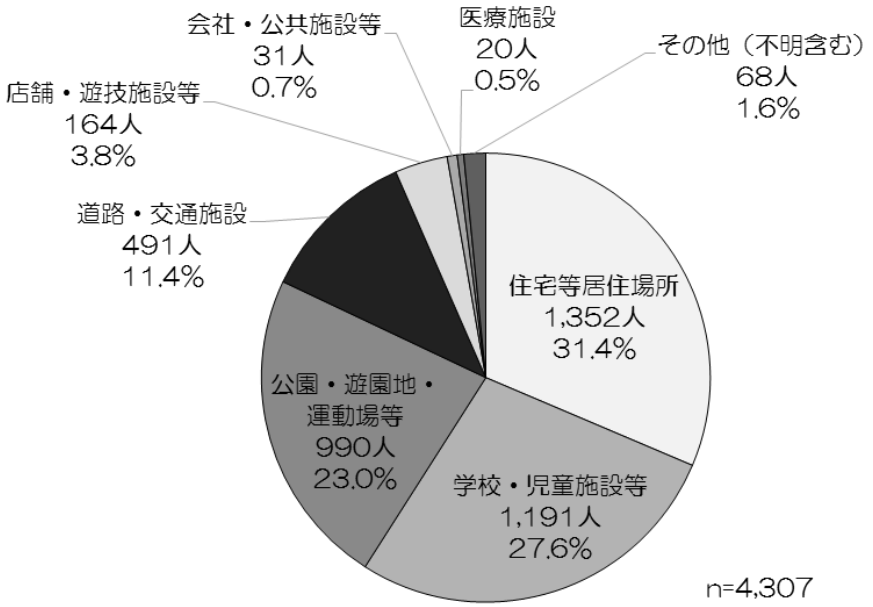
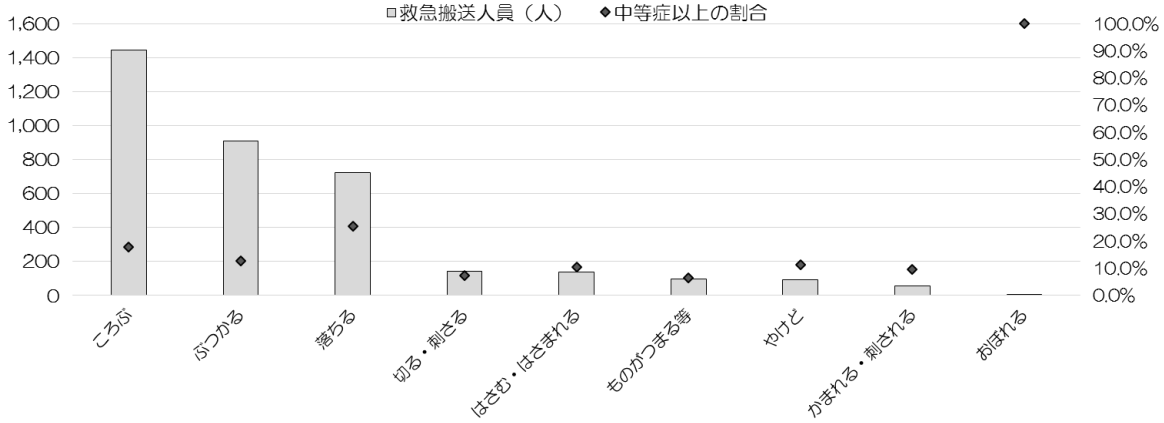


図３－４３　発生場所別救急搬送人員

エ　事故種別ごとの搬送人員

小学生は「ころぶ」事故の次に、「ぶつかる」事故が多く発生しています。「おぼれる」事故ではすべてが中等症以上となっています。また、「落ちる」事故は２割以上が中等症以上となっています（図３－４４）。



事故種別	ころぶ	ぶつかる	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	1,443人	906人	720人	140人	136人	96人	89人	53人	5人
中等症以上の割合	17.8%	12.7%	25.4%	7.1%	10.3%	6.3%	11.2%	9.4%	100.0%

※　事故種別が「その他」、「不明」なものを除く

図３－４４　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

階段で「ころぶ」事故が多く発生しています。子ども同士で「ぶつかる」事故も多く発生しています（表５）。

表５　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

順位＼種別	ころぶ	ぶつかる	落ちる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	階段	人	階段	自転車	ナイフ	魚等の骨	味噌汁・スープ	虫	浴槽
	82人	168人	81人	36人	33人	13人	25人	31人	3人
2位	スケートボード	ボール	雲梯	手動ドア	手動ドア	アメ玉類	鍋	動物等	河川
	39人	72人	68人	30人	12人	12人	11人	22人	1人
3位	その他の家具	柱	その他の遊具	植物	ガラス片	ビー玉類	カップ麺		プール
	38人	37人	62人	7人	11人	6人	10人		1人
4位	キックボード	机・テーブル	鉄棒	鉄道車両の戸袋	ミシン（ミシン針含む）	洗剤等	ポット・魔法瓶		
	37人	33人	47人	7人	8人	6人	8人		
5位	自転車	壁・天井	滑り台	自動車のドア	食器類	その他の玩具	熱湯		
	34人	31人	44人	6人	7人	5人	8人		

※その他の玩具とは、プラスチック製の玩具やフィギュア、シールや積み木など。
※その他の家具とは、棚や箱など。
※その他の遊具とは、木製遊具や吊橋遊具、トンネル遊具など。

カ　６歳～１２歳の事故事例

【事例１　高所から落ちる】

友達と遊んでいて、ガラス屋根の上を歩いていたところ、ガラスが割れ約３m下のコンクリートの地面に墜落し受傷した（１１歳　重症）。

【事故防止ポイント】

高所からの墜落は、生命に危険を及ぼす重大な事故となることから、保護者等は、危険性を子どもに教え、理解させましょう。

小学生の年代は、運動能力の発達に加え、身長、体重、運動量、俊敏性、冒険心の増大が事故につながっていると考えられます。危険が予測される行動も多く見られることから、安全教育による事故防止も不可欠です。

⑶　１３歳～１８歳（中学生・高校生）の事故

ア　年別搬送人員

令和元年中は、３,５５０人が救急搬送されています（図３－４５）。

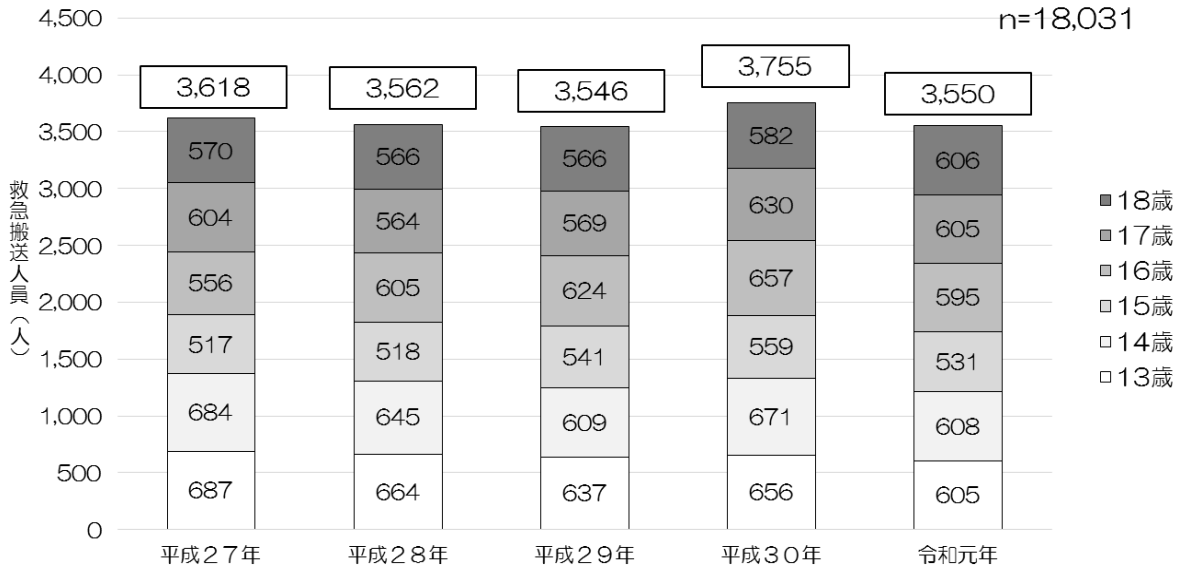


図３－４５　年別救急搬送人員（13 歳～18 歳）

イ　月別搬送人員

月別にみると、８月が最も多く、次いで５月に多く搬送されています（図３－４６）。

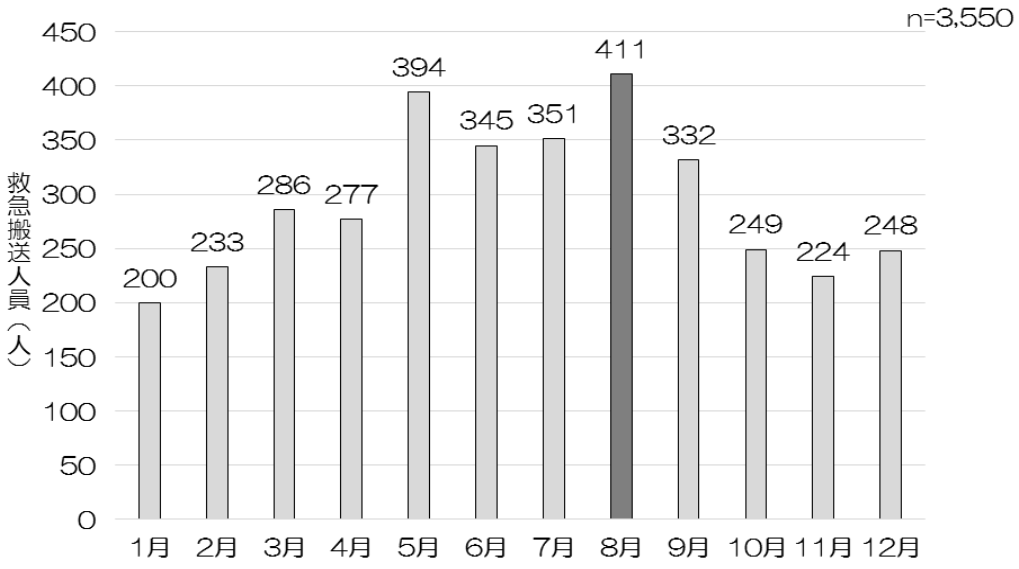


図３－４６　月別救急搬送人員

ウ　発生場所別搬送人員

学校・児童施設等が最も多く、次いで公園・遊園地・運動場等が多くなっています（図３－４７）。

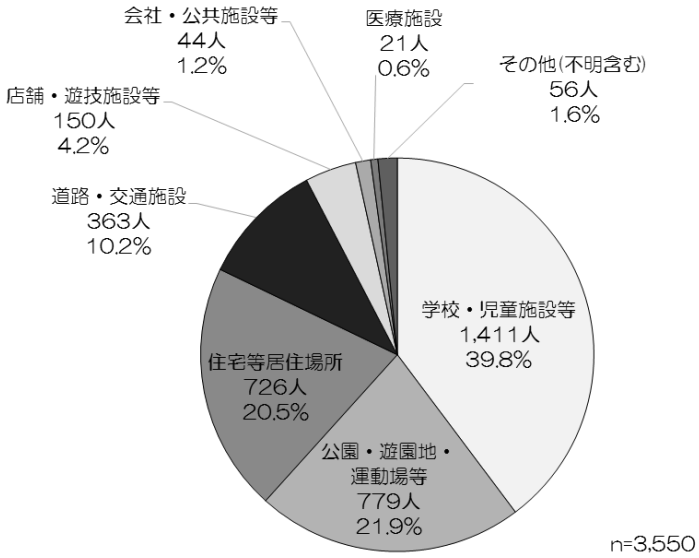
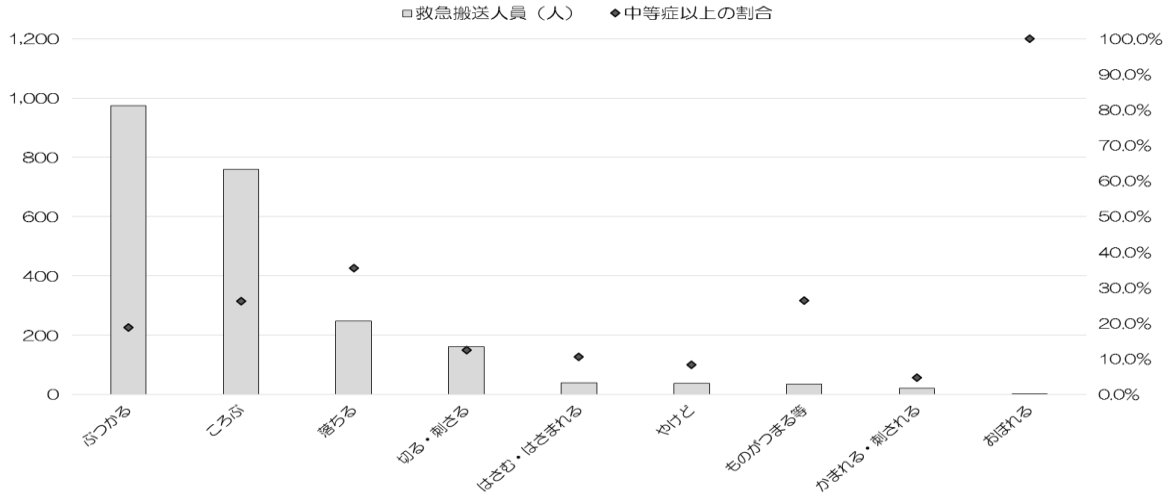


図３－４７　発生場所別救急搬送人員

エ　事故種別ごとの搬送人員

１３歳から１８歳では、事故種別ごとにみると、「ぶつかる」事故が最も多くなっています。また、「おぼれる」事故の全てで中等症以上となっています（図３－４８）。



事故種別	ぶつかる	ころぶ	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	やけど	ものがつまる等	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	975人	759人	248人	160人	38人	36人	34人	21人	2人
中等症以上の割合	18.8%	26.2%	35.5%	12.5%	10.5%	8.3%	26.5%	4.8%	100.0%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－４８　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

この年代では、人と「ぶつかる」事故が多く発生しています。また、スポーツでボールにぶつかる等の事故が多くなっています（表６）。

表６　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

種別／順位	ぶつかる	ころぶ	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	**人**	**階段**	**階段**	**ナイフ**	**バーベル**	**異物**	熱湯	**虫**	**浴槽**
	311人	**65人**	**89人**	**41人**	**2人**	**3人**	**8人**	**13人**	**1人**
2位	ボール	自転車	ホーム	手動ドア	机・テーブル	魚等の骨	鍋	動物等	河川
	222人	12人	12人	23人	2人	3人	4人	8人	1人
3位	手動ドア	スケートボード	鉄棒	食器類	自転車	食物	味噌汁・スープ		
	34人	11人	6人	17人	2人	3人	4人		
4位	壁・天井	床・畳	ベランダ	ガラス片	ゴールポスト	接着剤	ポット・魔法瓶		
	22人	9人	5人	15人	1人	2人	3人		
5位	バット	エスカレーター	ベッド	窓・サッシ	携帯電話	肉	ヤカン		
	16人	9人	5人	11人	1人	2人	3人		

カ　１３歳～１８歳の事故事例

【事例１　人とぶつかる】

サッカーの試合中に、対戦相手と接触して転倒し受傷した。（１０代　中等症）。

【事例２　運動中に落ちる】

ボルダリングジムにて高さ４mの壁体から、安全マット上に墜落した際に足首を捻り受傷した（１０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

中学生、高校生の年代では、運動中の事故が多く発生しています。

ウォーミングアップやストレッチは入念に行い、けがの予防に努めましょう。

指導者や保護者等は、普段の練習や競技の前には事故防止の注意喚起を行うとともに、不測の事態に備え、応急手当、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）の使用方法等を身につけましょう。

⑷　１９歳～６４歳の事故

ア　年別搬送人員

１９歳から６４歳まででは、令和元年中に４３,７３０人が救急搬送されています（図３－４９）。

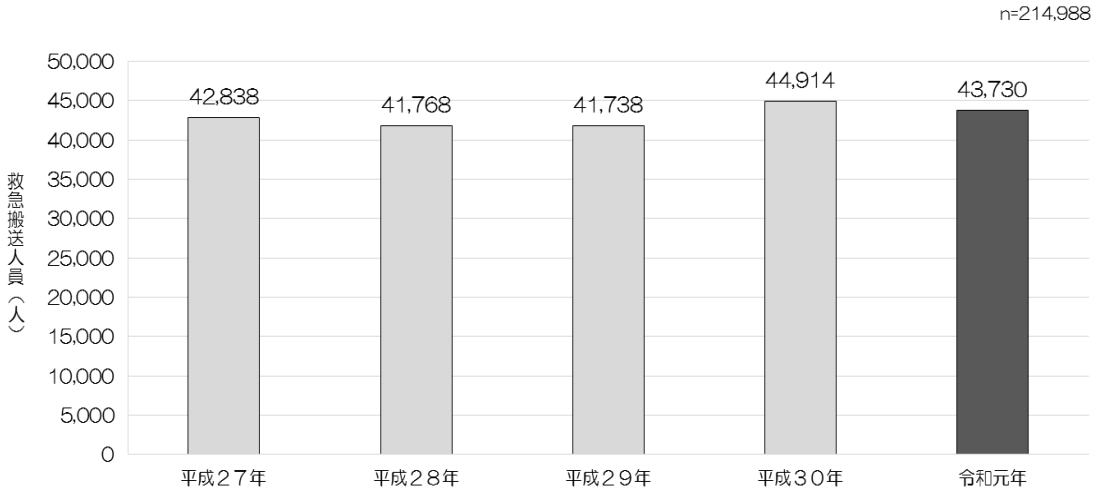


図３－４９　年別の救急搬送人員

イ　月別搬送人員

令和元年を月別にみると、８月に最も多く搬送され、次いで１２月が多くなっています（図３－５０）。

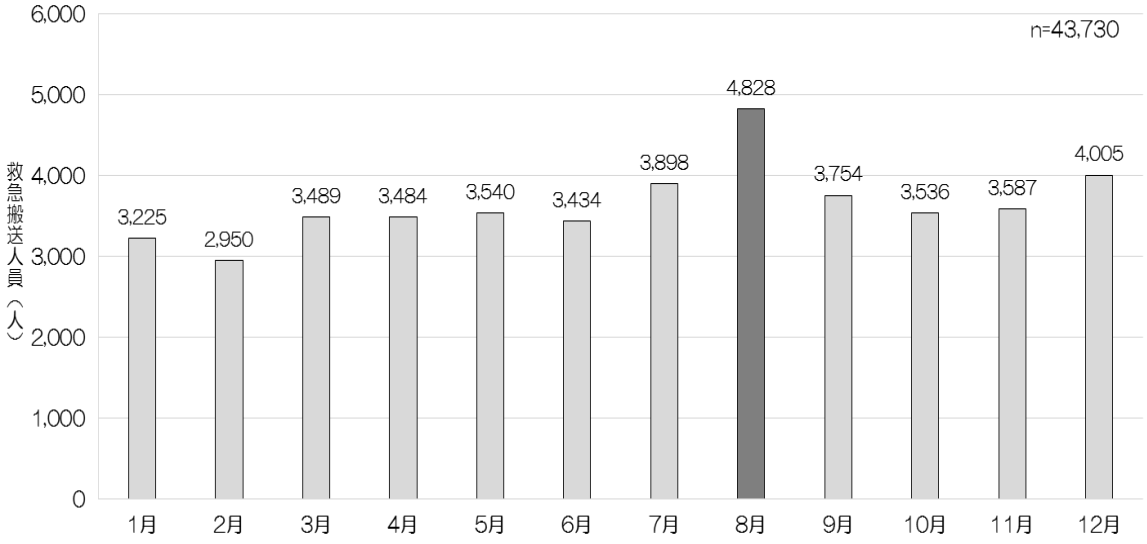


図３－５０　月別の救急搬送人員

ウ　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所、道路・交通施設での事故が多く発生しています（図３－５１）。

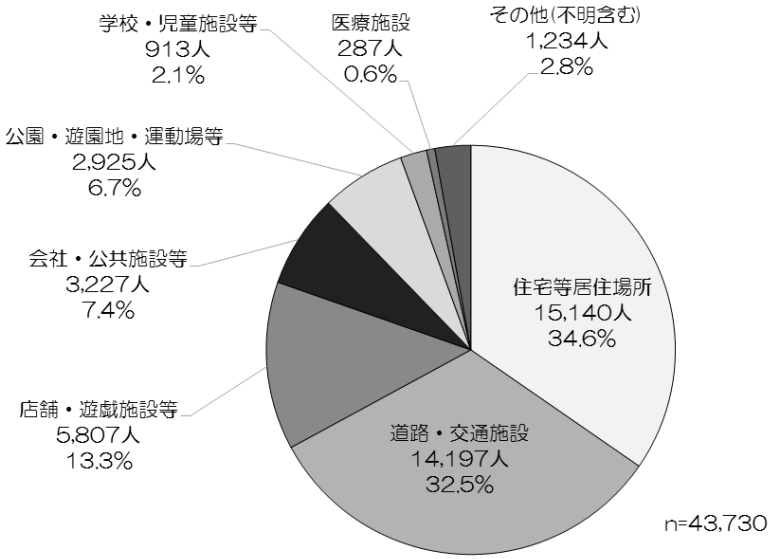
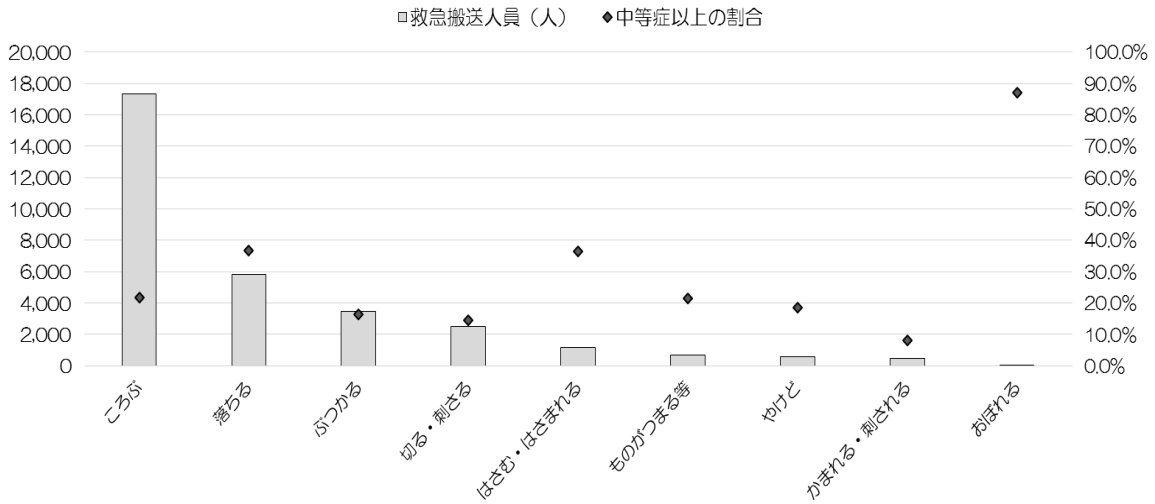


図３－５１　発生場所別救急搬送人員

エ　事故種別ごとの搬送人員

１９歳から６４歳では、「ころぶ」事故が最も多く発生しています。また、「おぼれる」事故は中等症以上の割合が最も高く、「落ちる」事故、「はさむ・はさまれる」事故の３割が中等症以上となっています（図３－５２）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	17,322人	5,805人	3,445人	2,515人	1,149人	705人	561人	446人	62人
中等症以上の割合	21.7%	36.6%	16.5%	14.4%	36.5%	21.4%	18.5%	8.1%	87.1%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－５２　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

「ころぶ」事故、「落ちる」事故ともに「階段」での事故が最も多く発生しています（表7）。

表7　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

種別／順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	階段	階段	人	ナイフ	手動ドア	洗剤等	鍋	動物等	浴槽
	1,553人	2,911人	510人	936人	107人	78人	86人	235人	36人
2位	段差	脚立・踏み台・足場	ボール	食器類	自動車	肉	天プラ油	虫	河川
	598人	381人	211人	313人	68人	55人	72人	205人	5人
3位	床・畳	ホーム	壁・天井	ガラス片	その他の機械	食物	熱湯	魚介類	公園
	438人	235人	151人	132人	57人	47人	69人	1人	1人
4位	自転車	椅子	その他の家具	電動のこぎり	フォークリフト	包み・袋	味噌汁・スープ		
	382人	198人	138人	107人	52人	40人	56人		
5位	エスカレーター	軌道敷	手動ドア	スライサー	建材	魚等の骨	ポット・魔法瓶		
	269人	190人	127人	91人	44人	37人	41人		

カ　１９歳～６４歳の事故事例

【事例１　ホームから落ちる】

スマートフォンを見ながら駅のホーム上を歩行していた際に、軌道敷に転落し腰部を受傷した（２０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

飲酒後や歩きスマホにより、駅のホームから転落する事故が多く発生しています。ホームの線路側を歩かないようにし転落防止をしましょう。

【事例２　機械に指をはさむ】

機械の動作確認をしていたところ、チェーン部分に誤って指を挟んでしまい受傷した（４０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

機械によるはさむ・はさまれる事故は重症化しやすいことを認識しましょう。

機械を稼働させたまま詰まりを除去しようとして受傷する事故も発生しています。

機械の点検、掃除、修理をする場合には、機械のスイッチを切断し、コンセントを抜くなど、誤って電源が入ることがないことを確認してから作業しましょう。

⑸　６５歳以上（高齢者）の事故

①　６５歳以上（高齢者）

ア　年別搬送人員

高齢者の事故は年々増加しています。令和元年中の救急搬送人員は８３,９０５人で平成２７年と比較すると１５,７８３人増加しています（図３－５３）。

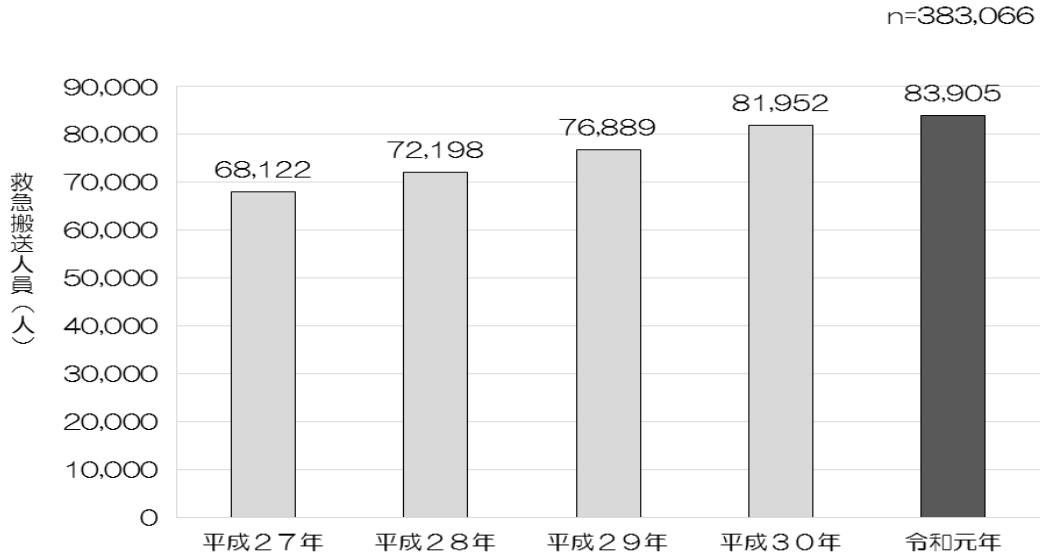


図３－５３　年別の救急搬送人員

イ　初診時程度別搬送人員

高齢者は、入院を必要とする中等症以上となる割合が高く、約４割となっています（図３－５４）。

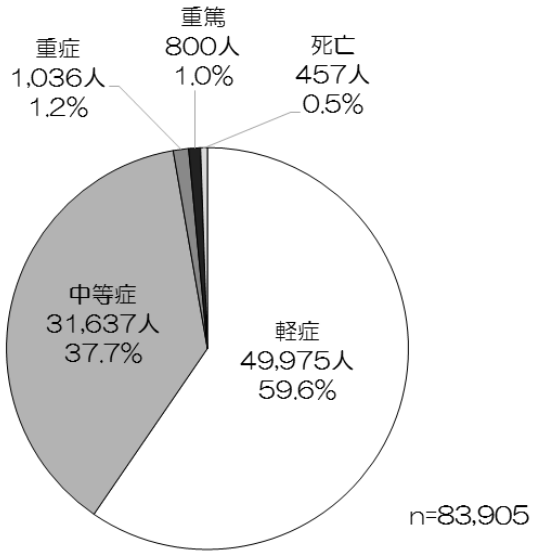


図３－５４　初診時程度別救急搬送人員

ウ　発生場所別搬送人員

住宅等居住場所での事故が６割を超え、道路・交通施設での事故と合わせると約９割を占めています（図３－55）。

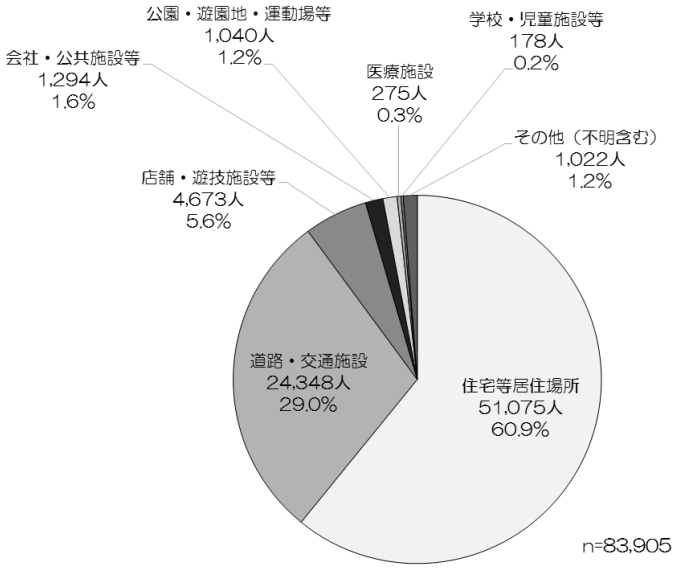
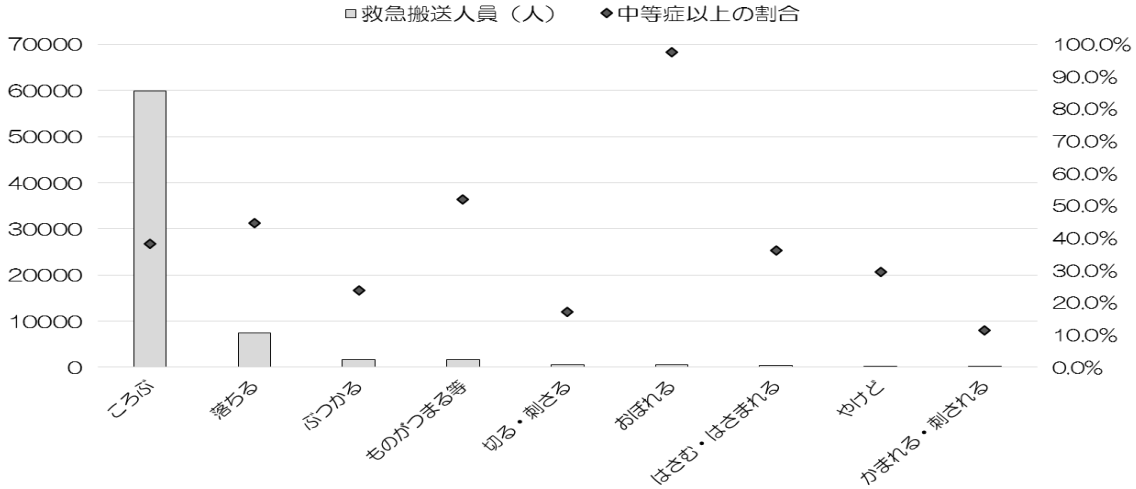


図３－55　発生場所別救急搬送人員

エ　事故種別ごとの搬送人員

高齢者の「おぼれる」事故は、９７．５%が中等症以上と最も高く、「ころぶ」事故、「落ちる」事故、「ものがつまる等」の事故、「はさむ・はさまれる」事故は３割を超える人が中等症以上となっており、高齢者は他の年代と比べ、重症化しやすくなっています（図３－56）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	切る・刺さる	おぼれる	はさむ・はさまれる	やけど	かまれる・刺される
救急搬送人員	59,816人	7,380人	1,717人	1,672人	614人	520人	376人	265人	261人
中等症以上の割合	38.2%	44.7%	23.7%	52.0%	17.1%	97.5%	36.2%	29.4%	11.5%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－56　事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ　事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位５つ）

「ころぶ」事故は畳・床や段差、階段で多く発生しています。また、「落ちる」事故は、階段、ベッド、椅子が多くなっており、「おぼれる」事故は、そのほとんどが浴槽で発生しています（表８）。

表８　事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位５つ

種別／順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	切る・刺さる	おぼれる	はさむ・はさまれる	やけど	かまれる・刺される
1位	畳・床	階段	その他の家具	食物	ナイフ	浴槽	手動ドア	鍋	虫
	2,499人	2,895人	103人	403人	189人	491人	42人	39人	135人
2位	段差	ベッド	人	包み・袋	電気のこぎり	河川	ベッド	熱湯	動物等
	2,447人	1,117人	100人	103人	70人	3人	24人	37人	126人
3位	階段	椅子	壁・天井	餅	ハサミ・爪切り	プール	自動車のドア	ヤカン	
	1,971人	549人	83人	78人	35人	2人	17人	34人	
4位	自転車	脚立・踏み台・足場	柱	肉	食器類		プレス機	ポット・魔法瓶	
	851人	385人	75人	77人	28人		15人	21人	
5位	椅子	エスカレーター	手動ドア	おかゆ類	入れ歯によるもの		その他の機械	天プラ油	
	788人	141人	72人	76人	27人		15人	15人	

※その他の家具とは、棚や箱など。

カ　６５歳以上（高齢者）の事故事例

【事例１　餅を詰まらせる】

自宅で団子を食べていた際に、喉に詰まらせ意識がなくなった（８０代　重症）。

【事故防止ポイント】

高齢者の「ものがつまる等」の事故は５割以上が中等症以上と診断されています。

食べ物は小さく切ってよく噛んで食べましょう。

【事例２　包みの誤飲】

薬を服用する際に、誤って薬のパッケージごと飲んでしまった（８０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

高齢者が薬を服用する際は、パッケージを飲み込まないように、適時様子を見るなど注意を払いましょう。

【事例３　ころぶ事故】

公園内を歩行中に、地面の段差につまづき転倒し大腿部を受傷した（７０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

高齢者のころぶ事故の約４割が中等症以上と診断されています。

自宅内では整理整頓を心がけ、家具や敷物による転倒を防止しましょう。

【事例４　脚立から落ちる】

脚立に登って自宅の庭の立木を剪定中、誤ってバランスを崩して約２mの高さから墜落し受傷した（６０代　中等症）。

【事故防止ポイント】

脚立や踏み台に上がって作業や清掃をしていて転落する事故が多く発生しています。

○　脚立の天板の上、脚立・はしごの上方に乗って作業しないようにしましょう。

○　安定した足場を選び、バランスを崩さないようにしましょう。

○　使用時は補助者に支えてもらいましょう。

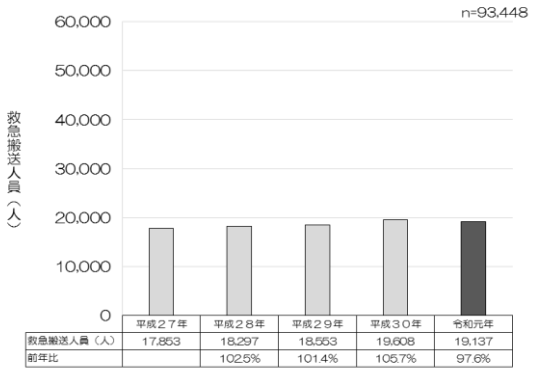
○　年齢や個々の体力を勘案し、無理な作業は控えましょう。

事業者の場合、法令では、２m以上の高所作業については、墜落等の危険を防止する措置（墜落制止用器具等の使用）をとることが事業者に義務付けられ、労働者も指示に従う義務があります。

② ６５歳～７４歳（前期高齢者）と７５歳以上（後期高齢者）

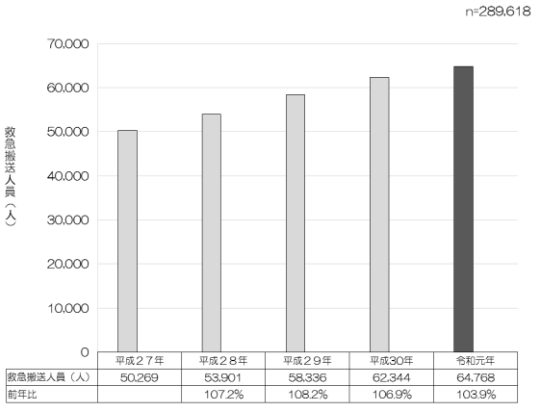
ア 年別搬送人員

前期高齢者と後期高齢者の救急搬送人員は年々増加しています。特に後期高齢者の増加ペースは前期高齢者に比べて早く、毎年２千人から４千人のペースで増加しています（図3-５７、図3-５８）。



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成３０年	令和元年
救急搬送人員（人）	17,853	18,297	18,553	19,608	19,137
前年比		102.5%	101.4%	105.7%	97.6%

図３－５７　年別の救急搬送人員（前期高齢者）



	平成２７年	平成２８年	平成２９年	平成30年	令和元年
救急搬送人員（人）	50,269	53,901	58,336	62,344	64,768
前年比		107.2%	108.2%	106.9%	103.9%

図３－５８　年別の救急搬送人員（後期高齢者）

イ 初診時程度別搬送人員

初診時程度別にみると、前期高齢者では中等症以上の割合が約３割ですが、後期高齢者になると、さらに増加して４割以上を占めています（図 3-５９、図3-６０）。

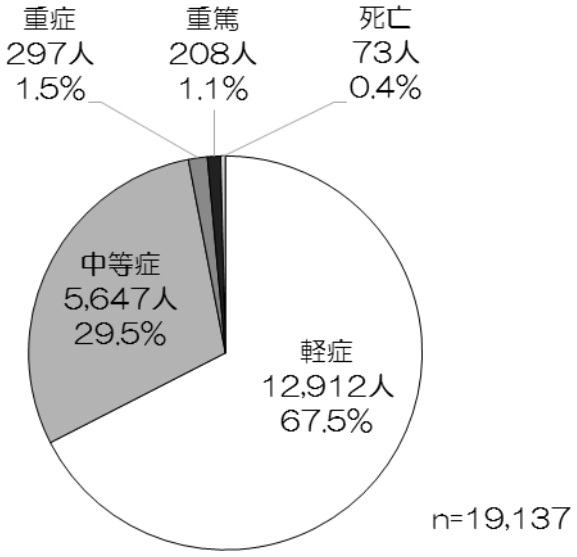


図３－５９　初診時程度別（前期高齢者）

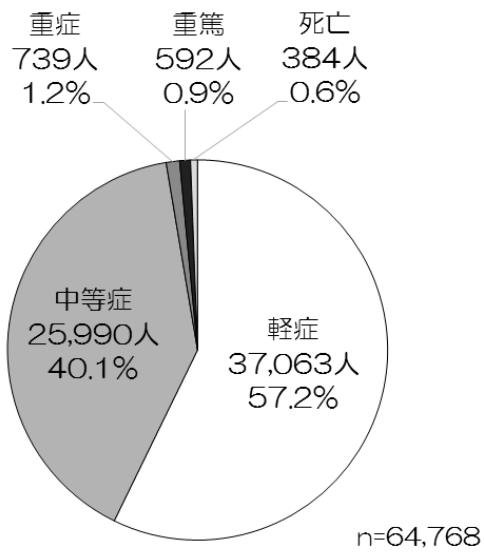


図３－６０　初診時程度別（後期高齢者）

ウ　発生場所別搬送人員

前期高齢者では住宅等居住場所での事故が最も多く４３．０%となっています。次いで多いのが道路・交通施設で３９．５%となっています。一方で後期高齢者になると、住宅等居住場所での割合が６６．２%に増加しています（図 3-６１、図 3-６２）。

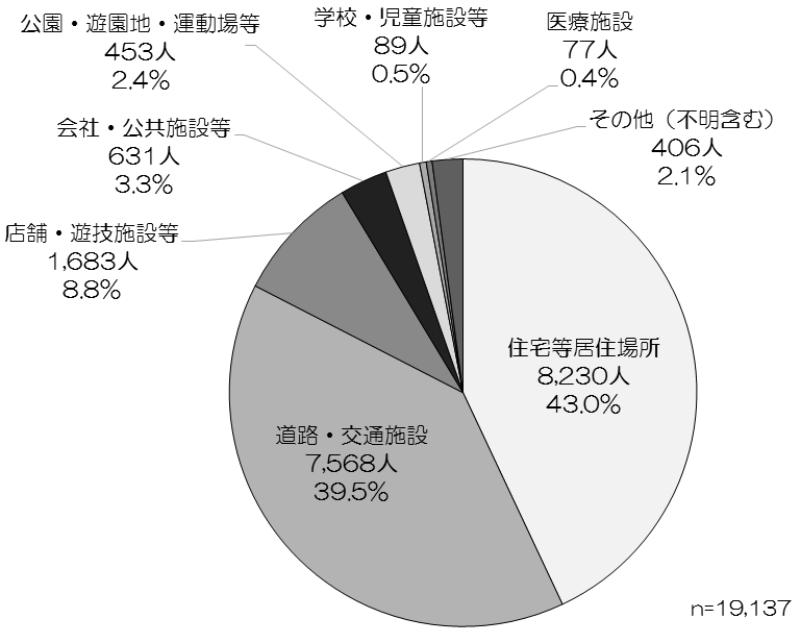


図３－６１　発生場所別救急搬送人員（前期高齢者）

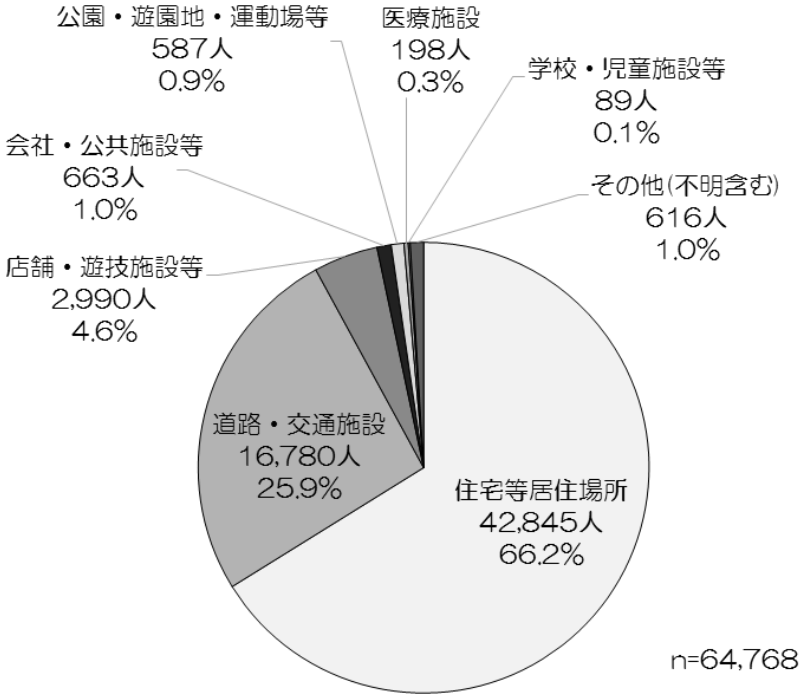
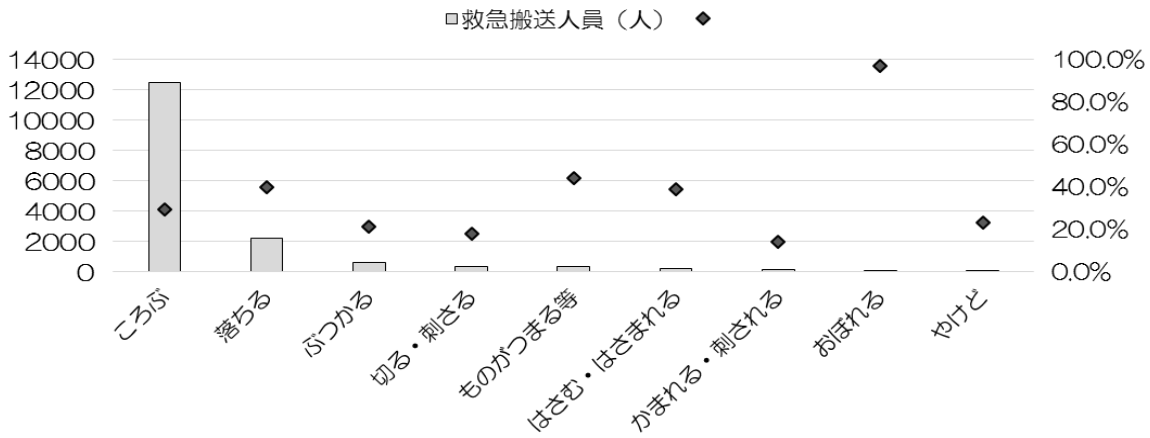


図３－６２　発生場所別救急搬送人員（後期高齢者）

エ　事故種別ごとの搬送人員

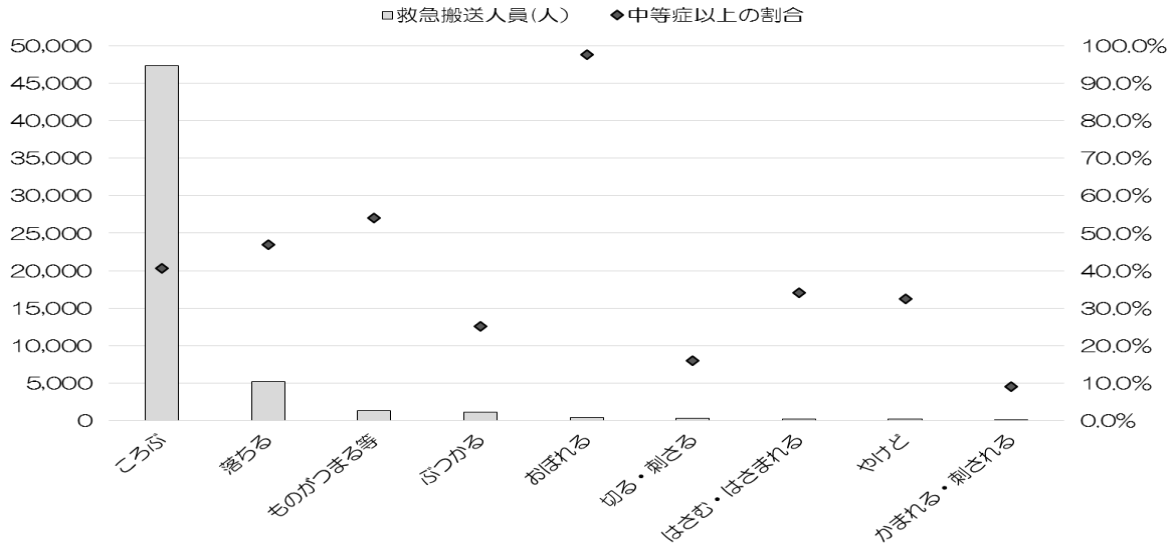
「ころぶ」、「落ちる」、「ものがつまる等」、「ぶつかる」、「おぼれる」、「やけど」の事故では前期高齢者に比べて後期高齢者の方が中等症以上の割合が多く、重症化しやくなっています（図３-６３、図３-６４）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	かまれる・刺される	おぼれる	やけど
救急搬送人員	12,471人	2,174人	602人	333人	327人	165人	130人	93人	90人
中等症以上の割合	29.5%	39.6%	21.1%	18.0%	44.0%	38.8%	13.8%	96.8%	23.3%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－６３　事故種別ごとの救急搬送人員（前期高齢者）



事故種別	ころぶ	落ちる	ものがつまる等	ぶつかる	おぼれる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	やけど	かまれる・刺される
救急搬送人員	47,345人	5,206人	1,345人	1,115人	427人	281人	211人	175人	131人
中等症以上の割合	40.5%	46.9%	54.0%	25.1%	97.7%	16.0%	34.1%	32.6%	9.2%

※　事故種別が「その他」、「不明」を除く

図３－６４　事故種別ごとの救急搬送人員（後期高齢者）

第４部　関連器物からみた事故

日常生活の中では、エスカレーターで転んだり、遊具から落ちたり、日々使用する様々なもの（器物）により事故に遭うことが多くあります。

ここでは、これまでに多くの事故が発生している器物について事故の傾向をまとめました。また、使い方によっては思いがけない危険が潜んでいる器物についても取り上げました。

１　エスカレーター

エスカレーターは、駅やショッピングセンター等、多くの場所で利用されています。エスカレーターに乗っていてバランスを崩して転んだり、小さな子供が靴を挟まれたりする事故が発生しています。

(1)　年別搬送人員

平成２７年から令和元年までの５年間で、６,９６０人が救急搬送されています。

令和元年中は１,４２８人が救急搬送されており、６５歳以上の高齢者が全体の６割以上を占めています（図４－１）。

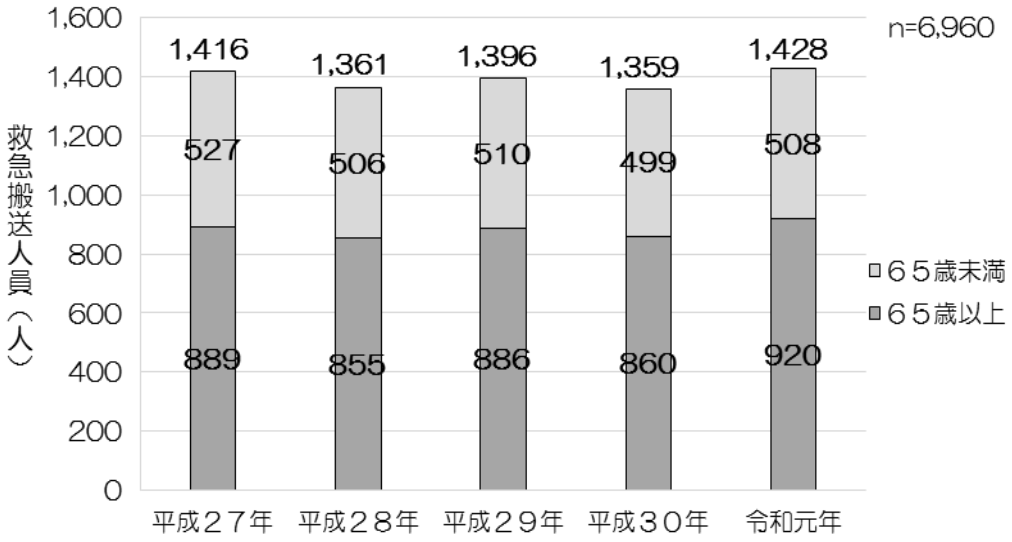


図４－１　年別救急搬送人員

(2)　年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別にみると、６５歳から８９歳までの各年齢層で１２０人以上が救急搬送されています（図４−2）。

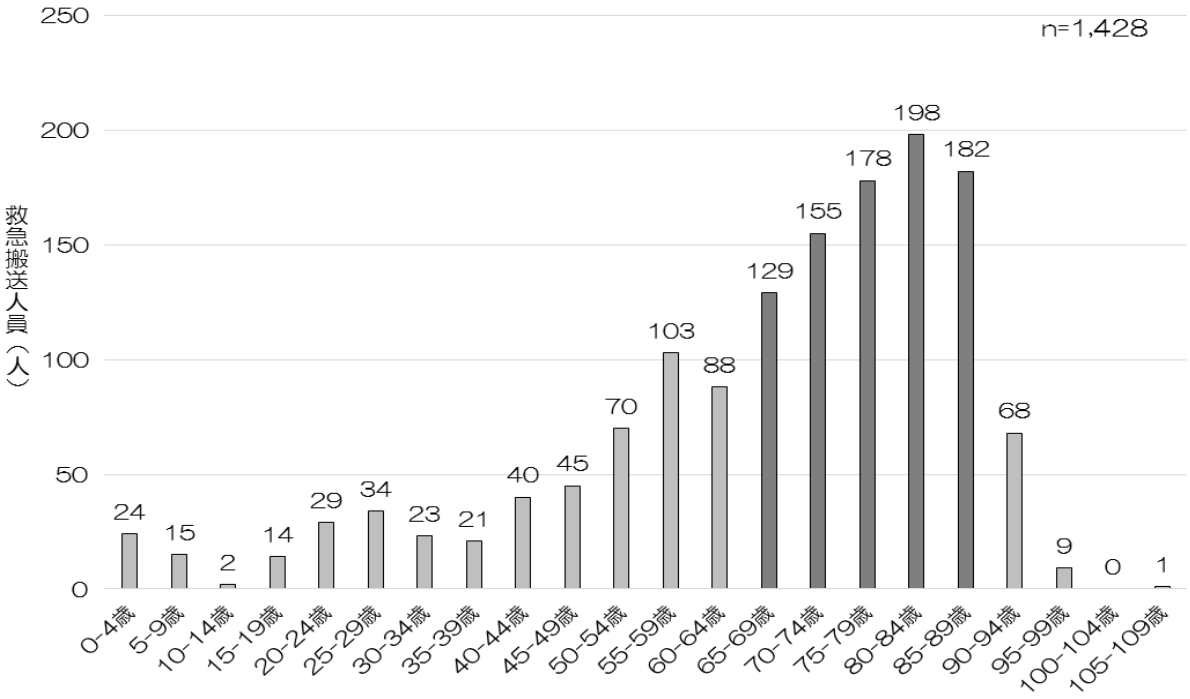
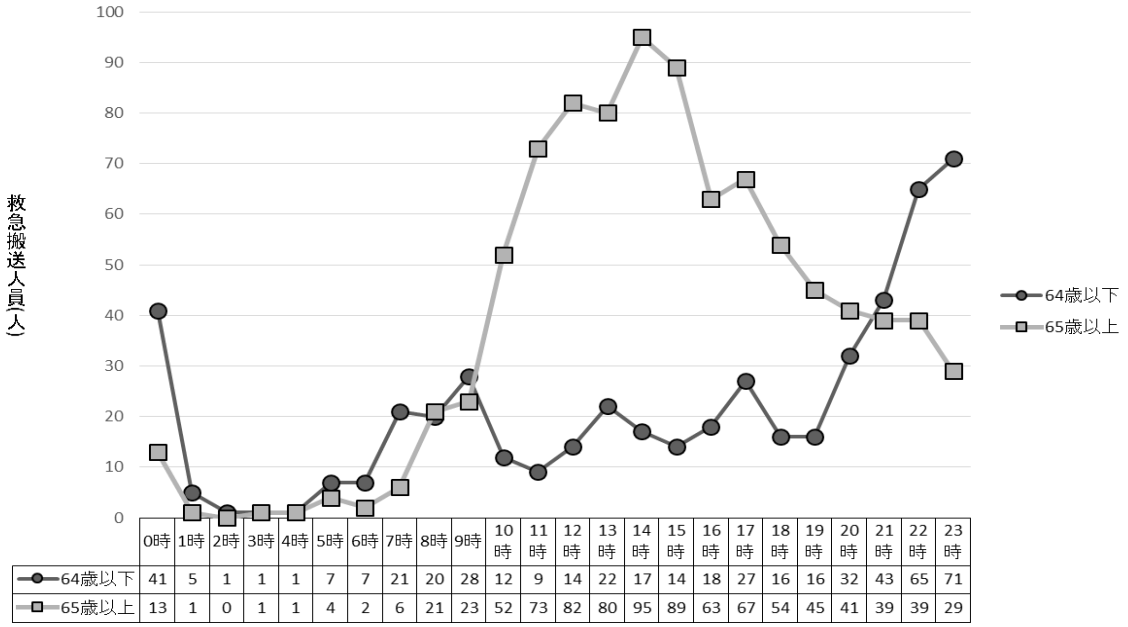


図４−2　年齢層別救急搬送人員

(3)　時間帯別搬送人員

高齢者と高齢者以外（６４歳以下）の時間帯別救急搬送人員をみると、高齢者では１１時台から１５時台に多く発生しています。また６４歳以下では、２０時台以降に増加し、２３時台が最も多くなっています（図４−3）。



	0時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	21時	22時	23時
64歳以下	41	5	1	1	1	7	7	21	20	28	12	9	14	22	17	14	18	27	16	16	32	43	65	71
65歳以上	13	1	0	1	1	4	2	6	21	23	52	73	82	80	95	89	63	67	54	45	41	39	39	29

図４−3　時間帯別救急搬送人員

⑷　事故種別ごとの搬送人員

エスカレーターでの事故を事故種別ごとにみると、「ころぶ」事故、「落ちる」事故が９割以上を占めています（図４－４）。

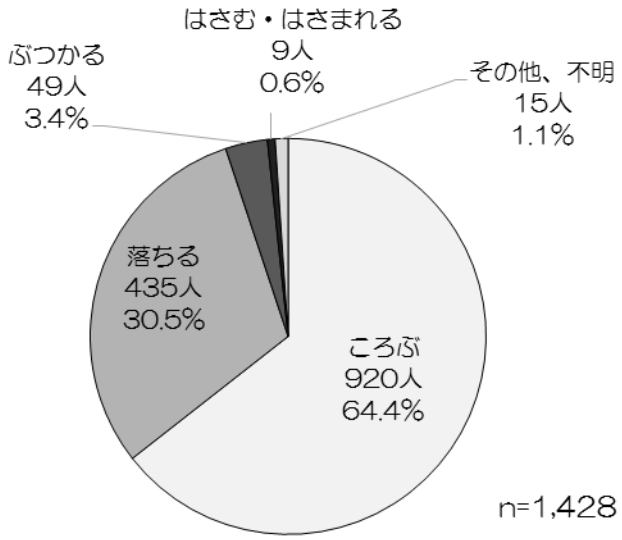


図４－４　事故種別ごとの救急搬送人員

⑸　初診時程度別搬送人員

エスカレーターで受傷して救急搬送された人の約２割は中等症以上と診断されています（図４－５）。

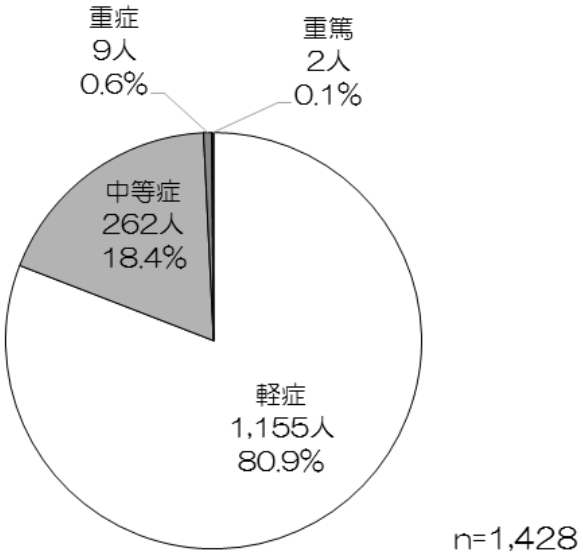


図４－５　初診時程度別救急搬送人員

⑹　発生場所別搬送人員

事故発生場所でみると、駅などの道路・交通施設で最も多く発生していますが、高齢者では店舗・遊技施設等が４割を占めています（図４－６、図４－７）。

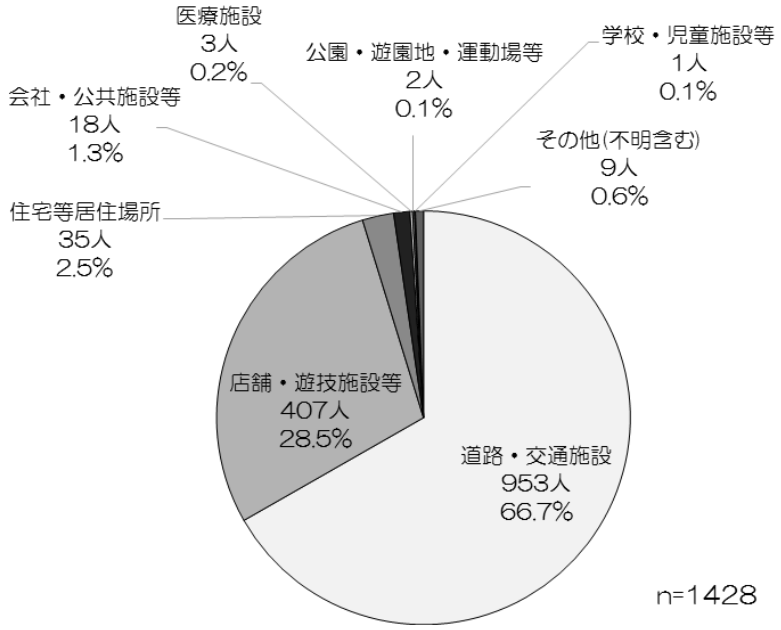


図４－６　発生場所別救急搬送人員

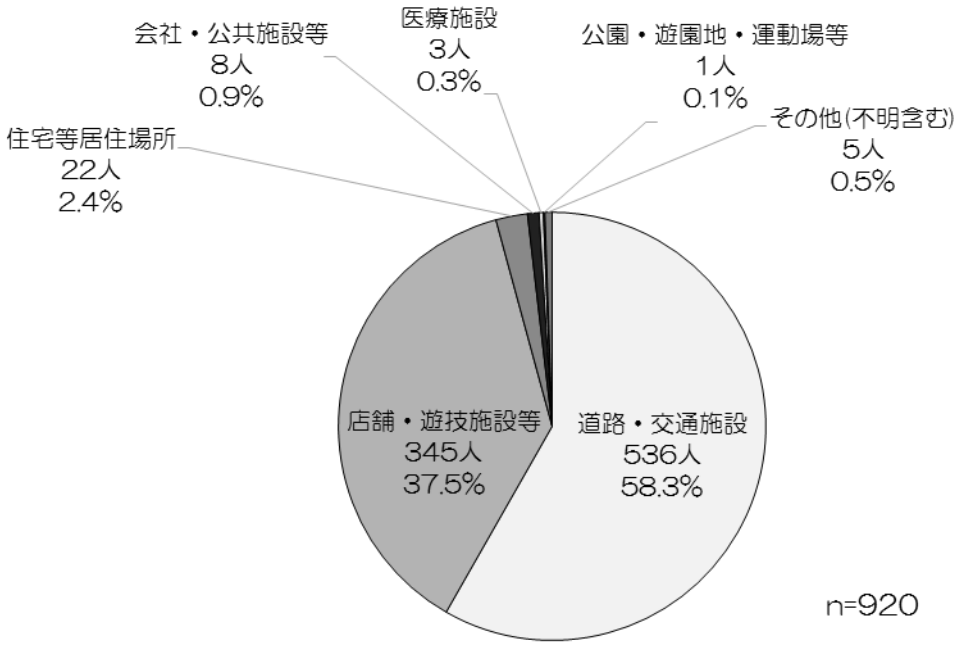


図４－７　発生場所別救急搬送人員（高齢者）

⑺　エスカレーターでの事故事例

【事例１　飲酒後に転倒】

飲酒後、エスカレーターを歩行中に転倒し前額部を受傷した（４０代　中等症）。

【事例２　サンダルがはさまれる】

エスカレーターに乗り下っていたときに、最下段で履いていたゴム製のサンダルがはさまり、足の指を受傷した（８歳　中等症）。

【事例３　指が挟まれる】

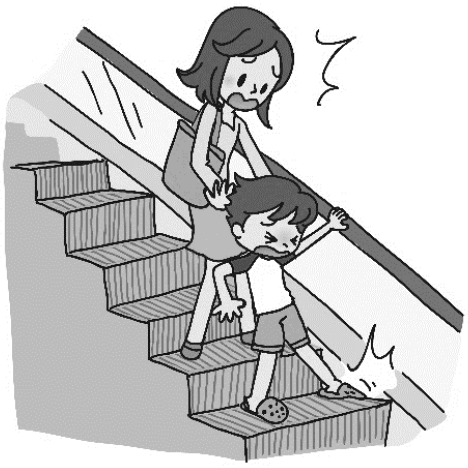
エスカレーターに乗り下っているときに、サンダルがはさまってしまい、手で取ろうとした際に受傷した（４歳　軽症）。

【事例４　物にぶつかり転倒】

下りエスカレーターで、上方から落下してきたスーツケースが体にぶつかり転倒し受傷した（３０代　中等症）。

【エスカレーターでの事故防止】

○　手すりにつかまりましょう。
○　飲酒後の事故が多く発生しているため十分に注意しましょう。
○　エスカレーター上の歩行は、バランスを崩しやすく、他の利用者と接触するおそれがあります。ステップに立ち止って利用しましょう。
○　靴の挟まれ等を防止するため、ステップの黄色い線の内側に立ちましょう。
○　買い物カート等を乗り入れると、バランスを崩すおそれがあるため、注意しましょう。
○　子供がエスカレーター近くで遊ばないよう注意しましょう。



２　エレベーター

エレベーターは、共同住宅やビル、店舗等、あらゆる場所で利用されています。エレベーターの乗降時に転んだり、小さな子供が手や指をはさまれたりする事故が発生しています。

(1)　年別搬送人員

平成２７年から令和元年までの５年間で７４５人が救急搬送されています。令和元年中は１３６人が救急搬送されています（図４－８）。

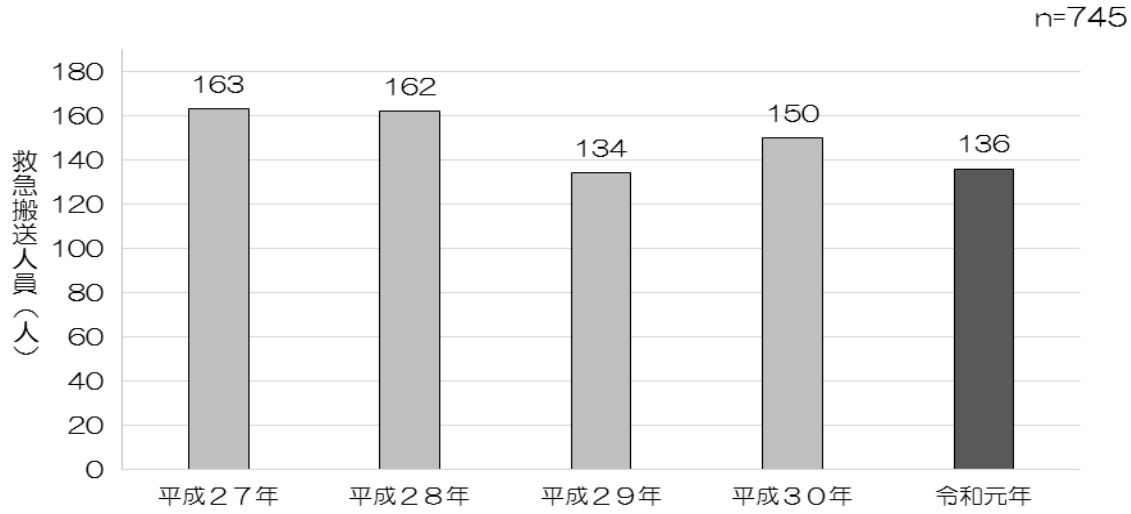


図４－８　年別救急搬送人員

(2)　年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別にみると、０歳から４歳が２６人と最も多くなっています（図４－９）。

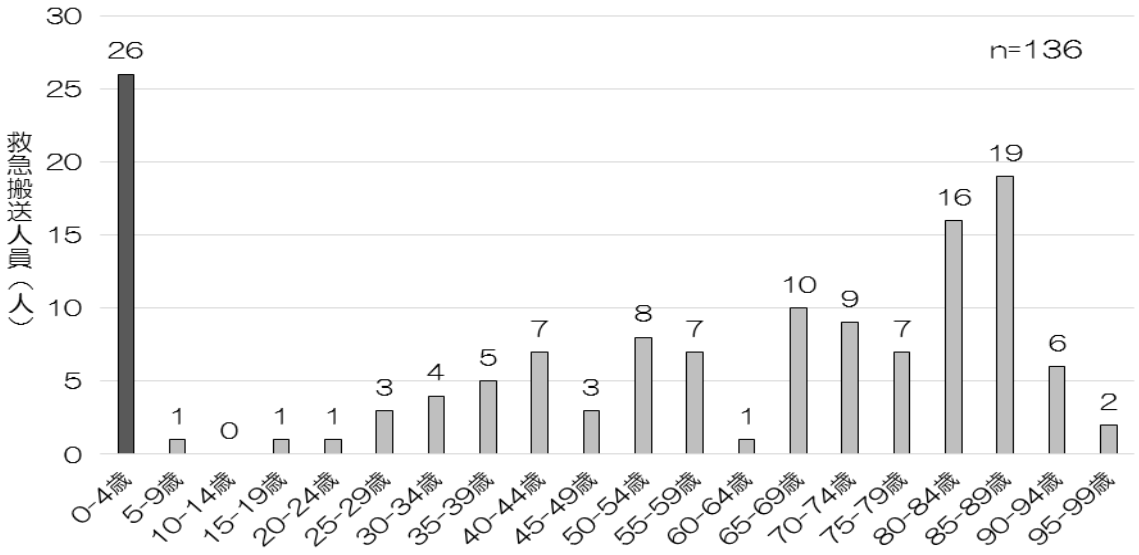


図４－９　年齢層別救急搬送人員

⑶　時間帯別搬送人員

時間帯別救急搬送人員をみると、１２時台が１３人と最も多く、全般的に日中の時間帯が多くなっています（図４−１０）。

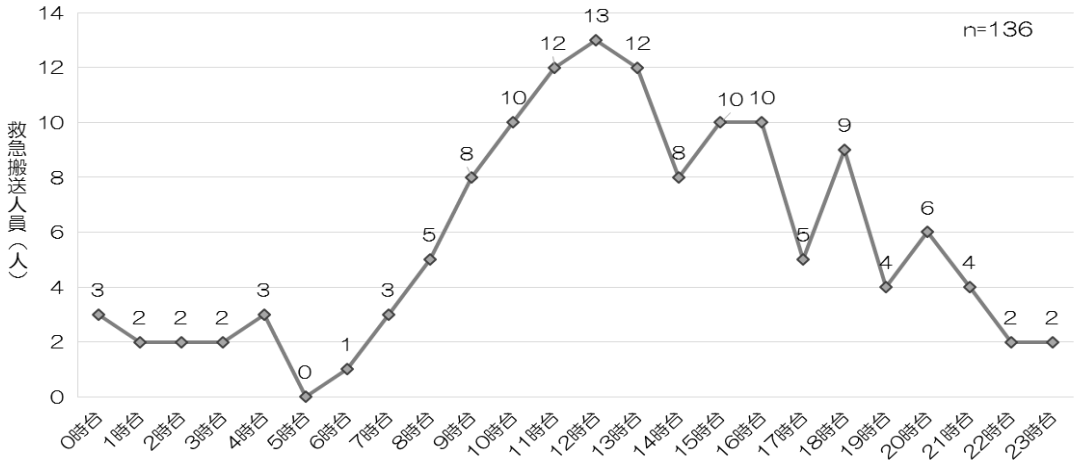


図４−１０　時間帯別救急搬送人員

⑷　事故種別ごとの搬送人員

エレベーターでの事故を事故種別ごとにみると、約５割がころんで受傷しています。また、手や指等が扉や戸袋にはさまれたりして受傷する事故も多く発生しています（図４−１１）。

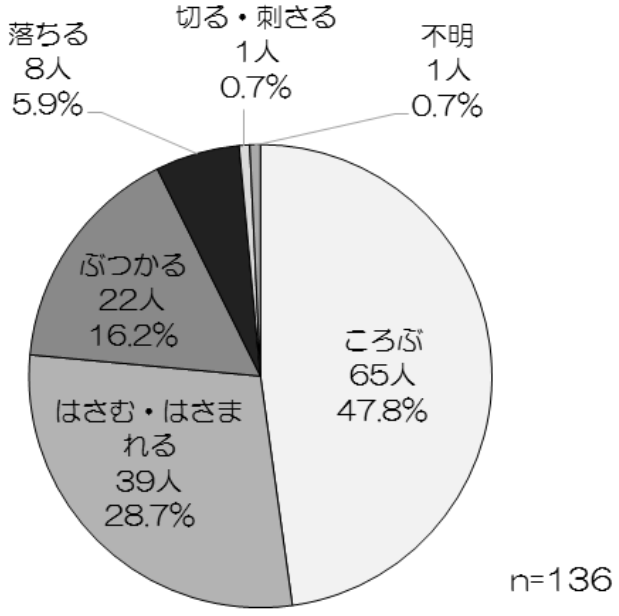


図４−１１　事故種別ごとの救急搬送人員

⑸　初診時程度別搬送人員

エレベーターでの事故で救急搬送された人の３割以上は、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されています（図４−１２）。

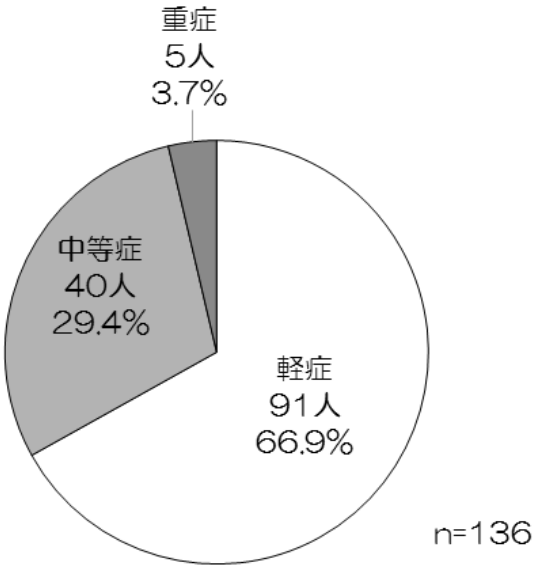


図４−１２　初診時程度別救急搬送人員

⑹　発生場所別搬送人員

事故発生場所でみると、住宅等居住場所や店舗・遊技施設等、道路・交通施設で多く発生しており、約８割がこの３つの場所で発生しています（図４−１３）。

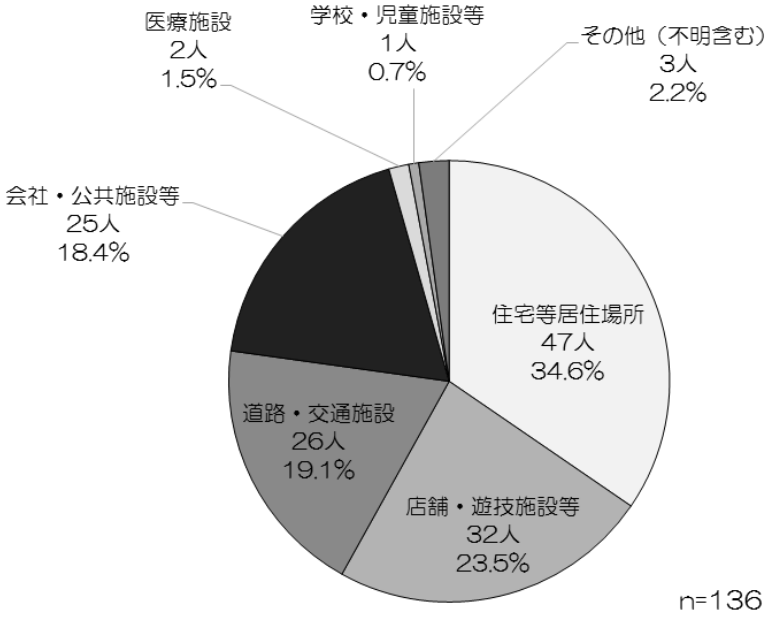


図４−１３　発生場所別救急搬送人員

⑺　０歳～５歳のエレベーターによる事故の内訳

０歳から５歳のエレベーターによる事故は、２６人中２５人が「はさむ・はさまれる」事故となっており、手や指等を挟まれる事故が多くなっています（表９）。

表９　０～５歳のエレベーターによる事故の内訳

	はさむ・はさまれる		ころぶ	総計
	戸袋	扉		
０歳	１	１	０	２
１歳	６	３	０	９
２歳	５	３	０	８
３歳	３	１	１	５
４歳	１	１	０	２
５歳	０	０	０	０
小計	１６	９	１	２６
総計	２５			

⑻　エレベーターでの事故事例

【事例１　戸袋にはさまれる】

エレベーターに乗る際、親が目を離した隙に子どもが誤ってエレベーターの戸袋に腕をはさまれて抜けなくなった（３歳　軽症）。

【事例２　扉にぶつかる】

エレベーターに乗ろうとしたところ、閉まりかけた扉と接触し後方に転倒し受傷した（７０代　軽症）。

【エレベーターでの事故防止】

○　乗降時は床との段差に注意し、駆け込みなど無理な乗降はやめましょう。

○　ドアの開閉時にはドアに触れず、荷物や衣服などが巻き込まれないように注意しましょう。また、子供はドアから離れた位置に乗せましょう。

○　エレベーターを使った作業時の事故は、重症事故につながることを認識し、作業手順、制限重量などに十分注意しましょう。

３　自転車の幼児用座席

保護者が自転車の幼児用座席に子供を乗せていて転倒したり、子供だけを残して自転車を離れ、自転車が倒れるなどして乳幼児が受傷する事故が多く発生しています。

(1)　年別搬送人員

自転車の幼児用座席から転落するなどして平成２７年から令和元年までの５年間に１，０４７人の乳幼児（０歳から５歳）が救急搬送されています。令和元年中は１９６人が救急搬送されています（図４−１４）。

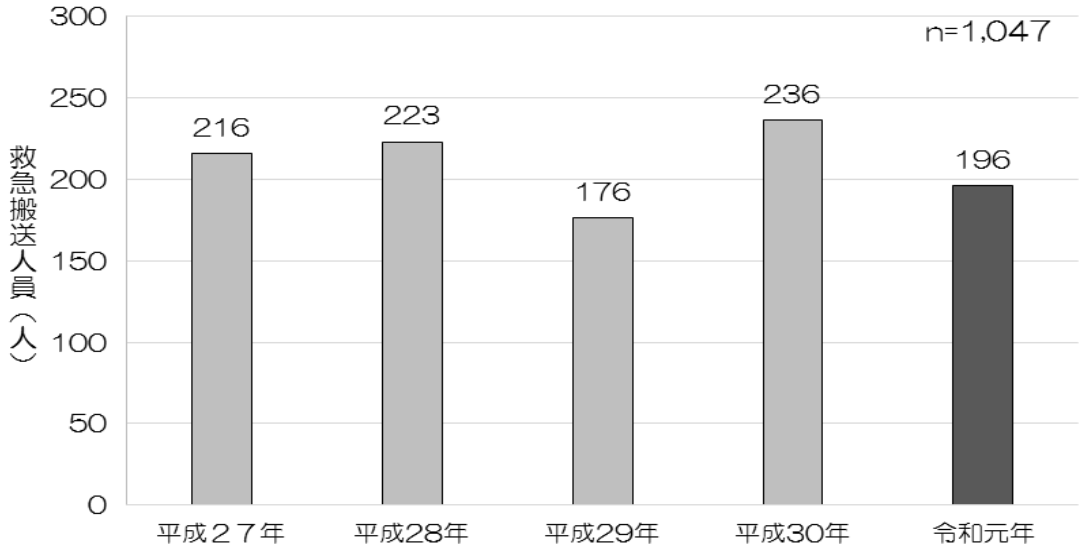


図４−１４　年別救急搬送人員

(2)　年齢別搬送人員

年齢別では、１歳児、２歳児の事故が多く発生しています（図４−１５）。

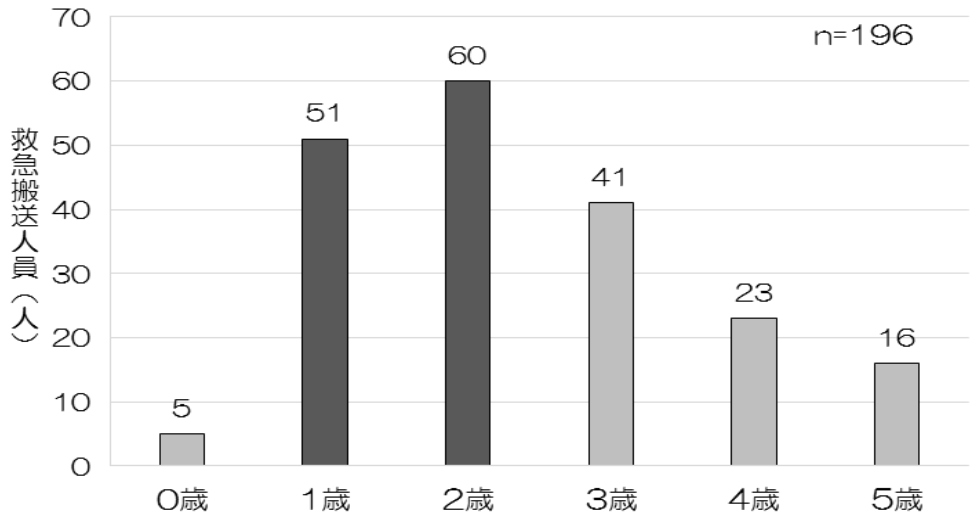


図４−１５　年齢別救急搬送人員

(3)　初診時程度別搬送人員

初診時程度では、軽症が８割以上となっています（図４−１６）。

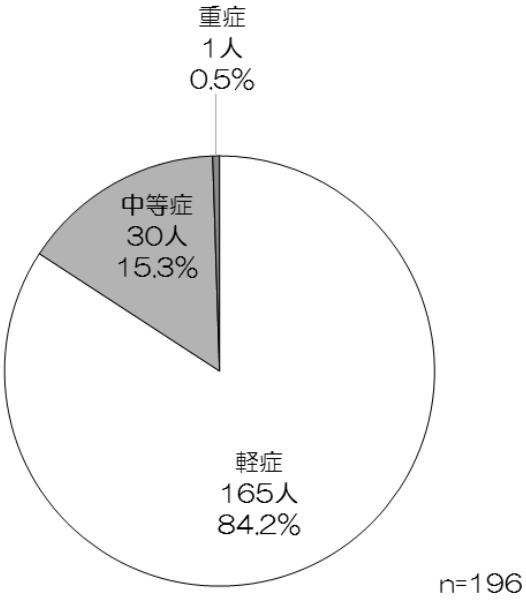


図４−１６　初診時程度別救急搬送人員

(4)　受傷部位別搬送人員

受傷部位別に分類すると、全体の約９割が顔や頭を受傷しています。また、足や腕を骨折する事故も発生しています（図４−１７）。

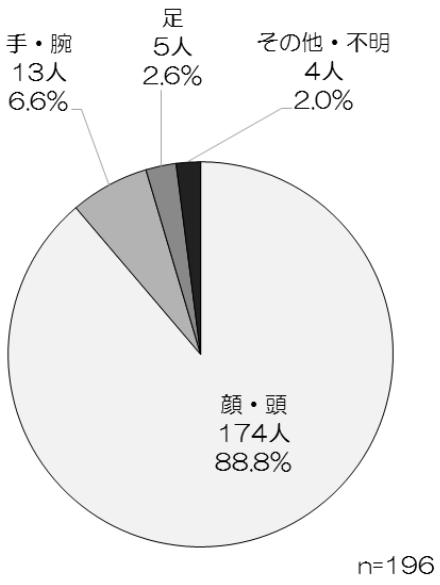


図４−１７　受傷部位別救急搬送人員

⑸　自転車の幼児用座席での事故事例

【事例１　バランスを崩す】

親が運転する自転車がバランスを崩して転倒し、小児用座席に乗っていた子どもが頭部をアスファルトにぶつけ受傷した（３歳　中等症）。

【事例２　目を離した際に】

自転車の小児用座席に子どもを乗せて停車中、母親が目を離した際に自転車ごと倒れ子どもが受傷した（１歳　軽症）。

【自転車の幼児用座席での事故防止】

○　子供を自転車の幼児用座席に乗せたまま自転車から離れないようにしましょう。

○　ヘルメットは、頭部への衝撃を緩和するのに有効であるため、ヘルメットを着用させてから自転車に乗せましょう。

○　転落防止のため、備え付けのベルトを締めましょう。

○　自転車走行中以外にも事故が発生することを意識しましょう。

○　ルールとマナーを守った運転を心がけましょう。

※　平成２５年７月１日に「東京都自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」が施行されました。

４　遊　具

(1)　年別搬送人員

遊具による事故で、平成２７年から令和元年までの５年間に4,４１５人の子供（12歳以下）が救急搬送されています。令和元年中は８５４人が救急搬送されています（図４－１８）。

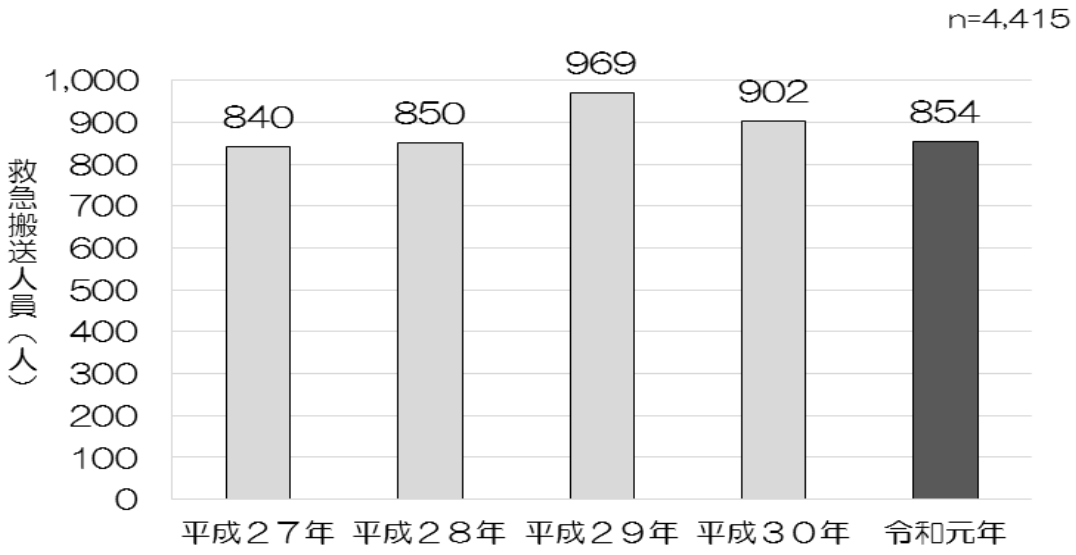


図４－１８　年別救急搬送人員

(2)　年齢別搬送人員

年齢別では、３歳が最も多く、９９人が救急搬送され、次いで、７歳が８９人となっています（図４－１９）。

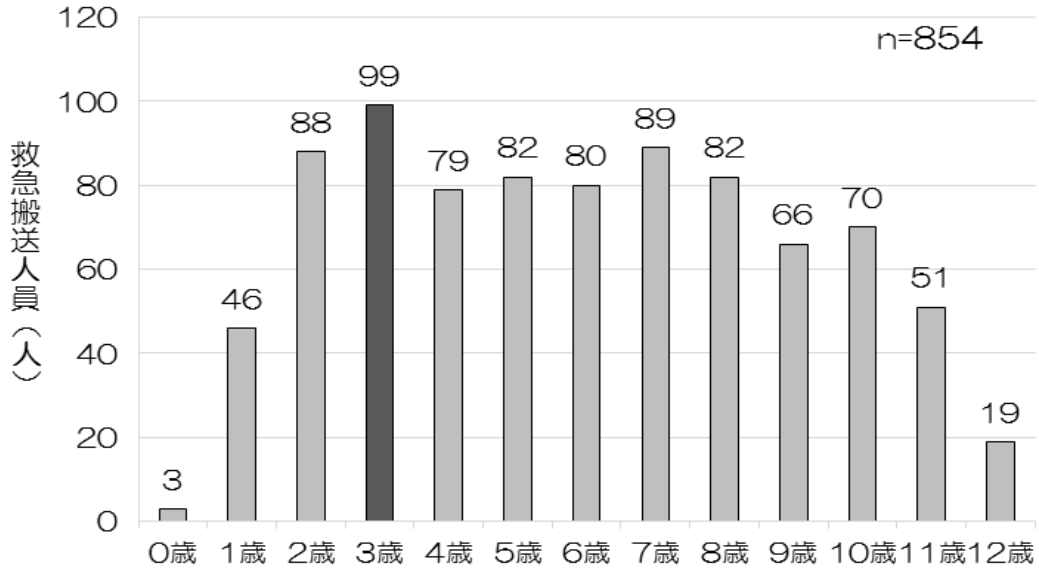


図４－１９　年齢別救急搬送人員

(3)　月別搬送人員

月別では、5月が最も多く、１０２人が救急搬送されています。次いで4月と6月に１００人の子供が救急搬送されています（図４−２０）。

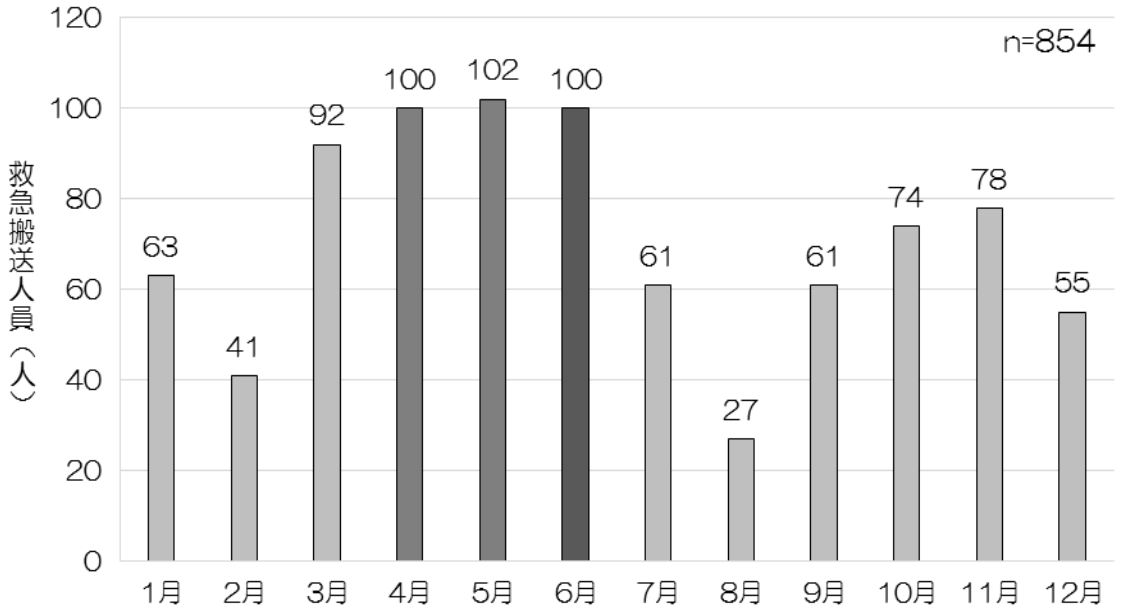
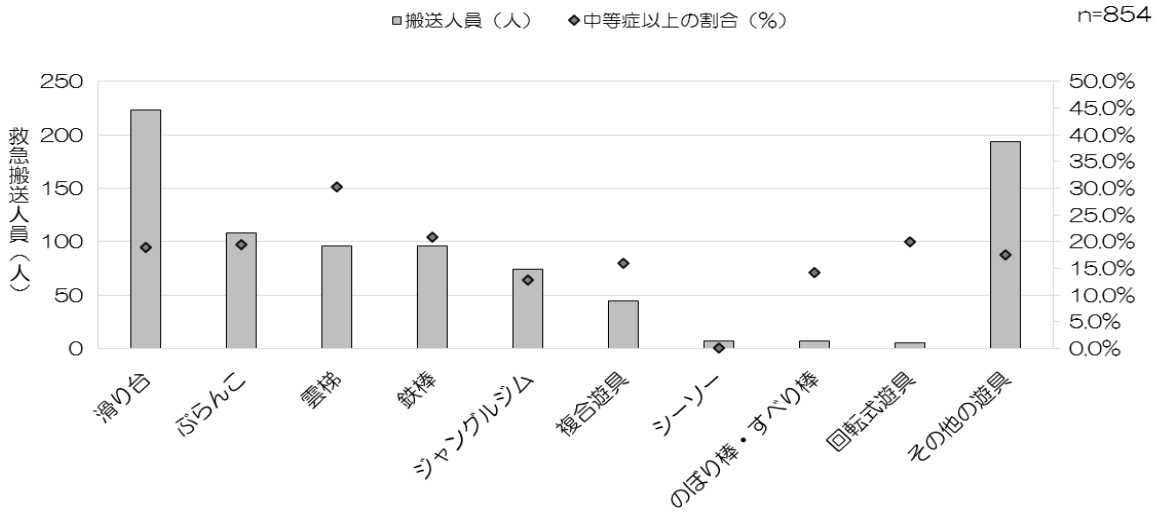


図４−２０　月別救急搬送人員

(4)　遊具別の搬送人員と中等症以上の割合

遊具別にみると滑り台での事故が最も多く発生しています。また、雲梯では中等症以上の割合が３割以上と最も高く、鉄棒や回転式遊具では中等症以上の割合が２割以上となっています（図４−２１）。



遊具	滑り台	ぶらんこ	雲梯	鉄棒	ジャングルジム	複合遊具	シーソー	のぼり棒・すべり棒	回転式遊具	その他の遊具
救急搬送人員	223人	108人	96人	96人	74人	44人	7人	7人	5人	194人
中等症以上の割合	18.8%	19.4%	30.2%	20.9%	12.9%	15.9%	0.0%	14.3%	20.0%	17.5%

※その他の遊具とは、木製遊具や吊橋遊具、トンネル遊具など。

図４−２１　遊具別の救急搬送人員と中等症以上の割合

⑸　遊具での事故事例

【事例１　滑り台】

滑り台の階段を降りようとした際に、約２m下の地面に頭部から転落した（４歳　中等症）。

【事例２　雲梯】

公園の曇梯にぶら下がっていたところ、前のめりに落下し顔面を地面にぶつけて受傷した（５歳　軽症）。

【事例３　ジャングルジム】

ジャングルジムで遊んでいる際に、高さ約２mの位置から転落し、頭部及び顔面を受傷した（１１歳　中等症）。

【事例４　ブランコ】

ブランコで遊んでいる子どもの前方を横切った際に、顔にブランコがぶつかり受傷した（１１歳　中等症）。

５　ガスによる事故

(1)　年別発生件数

ガスによる事故（火災、不救護を除く）は、平成２７年から令和元年までの５年間に２０８件発生しています。令和元年中は１４件発生しています（図４−２２）。

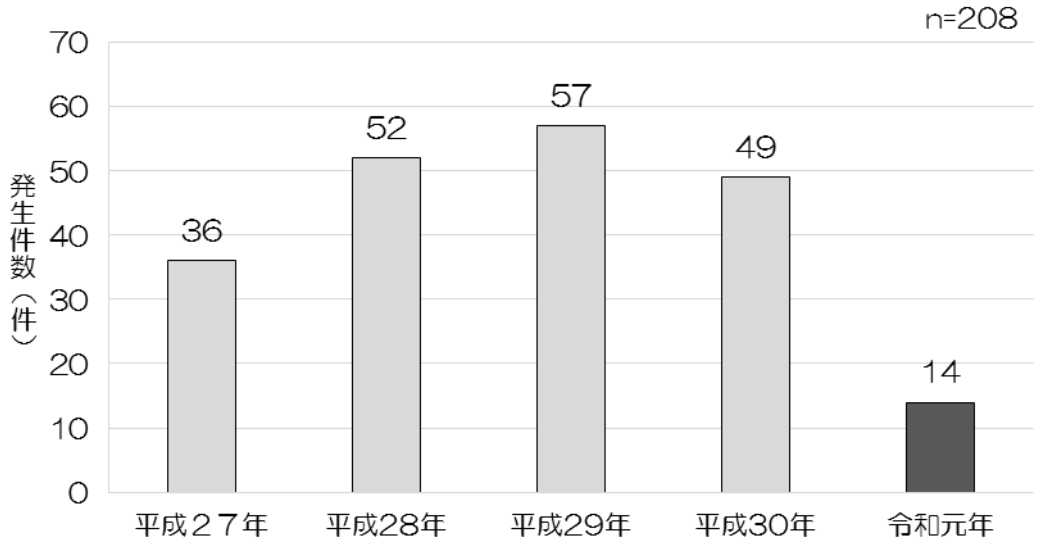


図４−２２　年別発生件数

(2)　月別発生件数

月別では、２月が３件と最も多くなっています（図４−２３）。

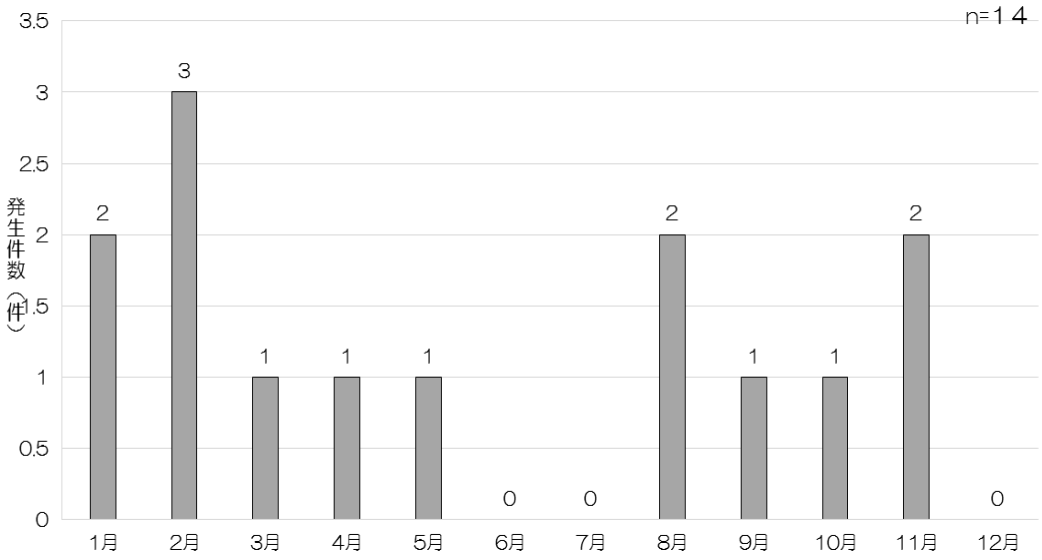


図４−２３　月別発生件数

⑶　年齢層別搬送人員

令和元年中にガスによる事故（火災、自損、不救護を除く）で、３２人が救急搬送されています。年齢層（５歳単位）別にみると、７０－７４歳が６人と最も多くなっています（図４－２４）。

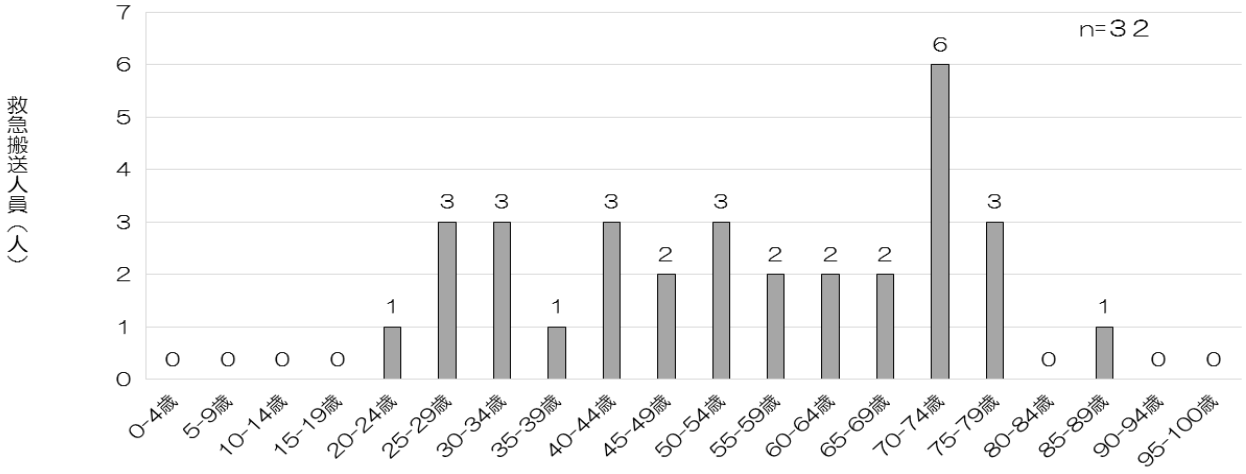


図４－２４　年齢層別救急搬送人員

⑷　発生場所別発生件数

事故発生場所でみると、８割以上が住宅等居住場所と店舗・遊技施設等で発生しています（図４－２５）。

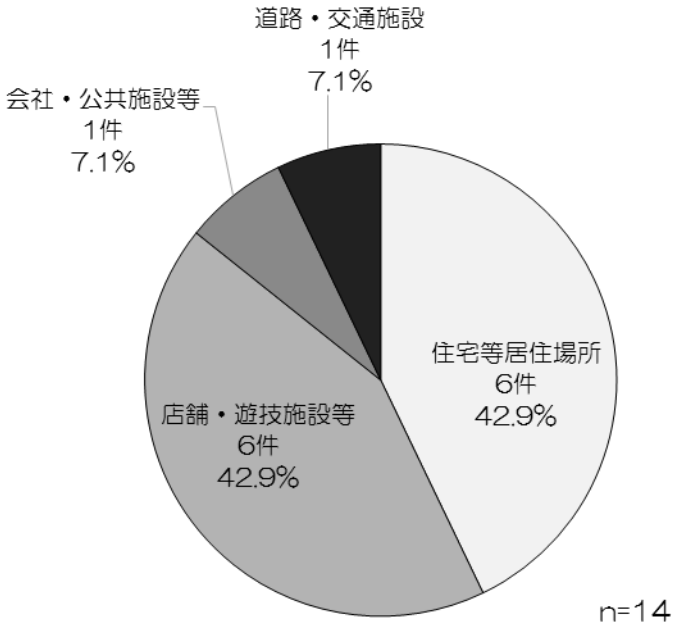


図４－２５　発生場所別発生件数

⑸　初診時程度別と原因別搬送人員

ガスによる事故で搬送された人の３割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断され、生命の危険が強いとされる重症以上も２割以上を占めています。（図４－２６）。

原因別にみると一酸化炭素中毒による搬送が最も多く５割以上を占めており、次いで洗剤等の混合となっています（図４－２７）。

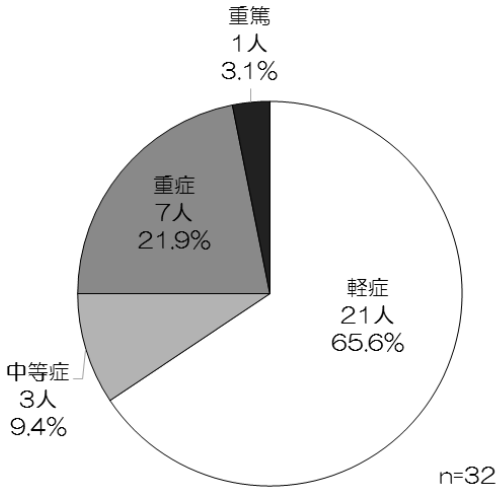


図４－２６　初診時程度別救急搬送人員

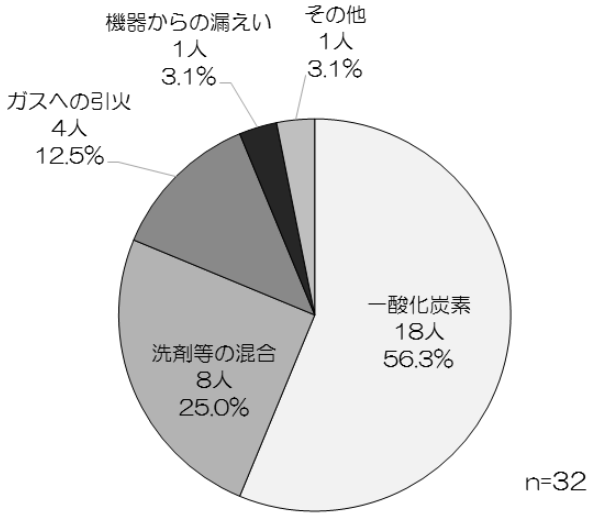


図４－２７　原因別救急搬送人員

⑹　ガス種別ごとの発生件数

ガス種別ごとにみると、一酸化炭素中毒が７件と最も多くなっています（図４－２８）。一酸化炭素による事故のうち炭（火鉢・七輪等）が３件と最も多くなっています。

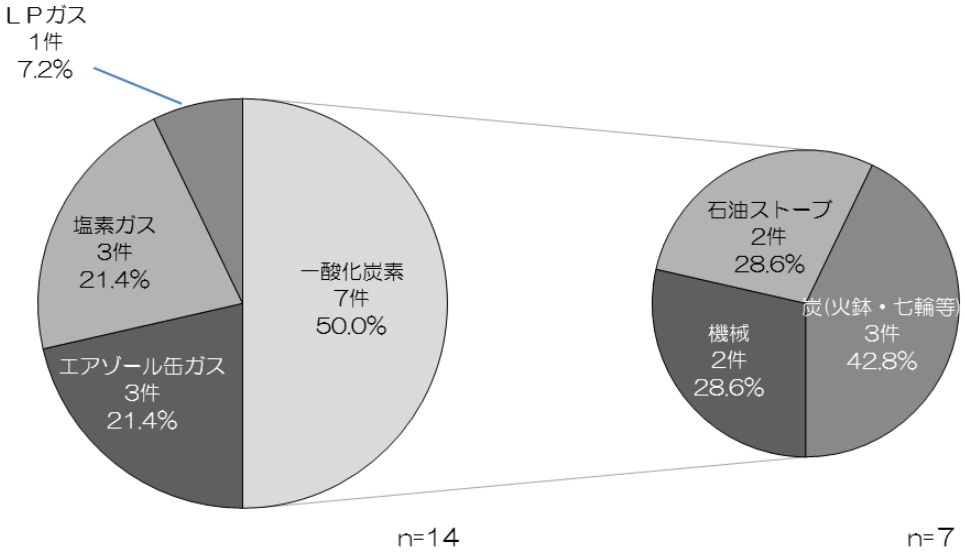


図４－２８　ガス種別ごとの発生件数

⑺　一酸化炭素中毒による初診時程度別搬送人員

一酸化炭素中毒による事故で救急搬送された人の３割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されており、生命の危険が強いとされる重症以上も、全体の約２割以上を占めています（図４－２９）。

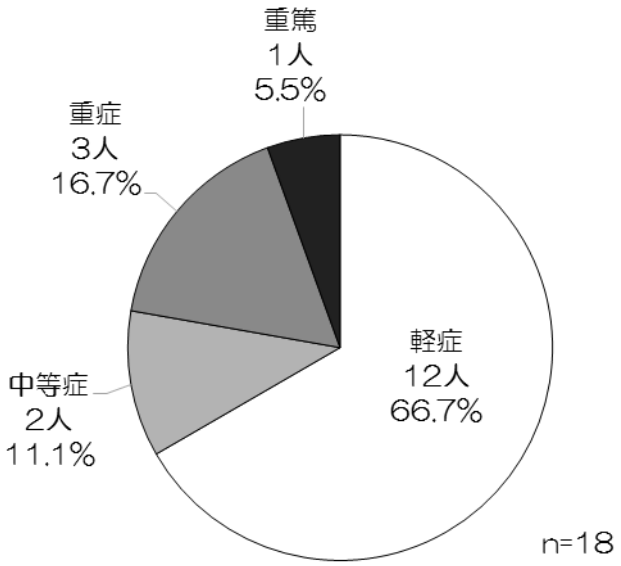


図４－２９　初診時程度別救急搬送人員（一酸化炭素）

⑻　ガスに関連する事故事例

【事例１　一酸化炭素中毒】

厨房で調理用炭が不完全燃焼を起こして一酸化炭素が発生し、従業員と客の３名が倒れた。（６０代　重症　７０代　重症　６０代　中等症）

【一酸化炭素での事故防止】

○　十分な換気により、室内の一酸化炭素濃度が下がることから、火気設備・器具を使用の際は換気扇の使用や定期的に窓等を開けるなどして換気を十分に行いましょう。また、使用中に少しでも異常を感じたら、使用を中止するとともに十分な換気を行いましょう。

○　不完全燃焼が起こると一酸化炭素が発生することから、火気設備・器具の定期的な点検と清掃を行いましょう。

○　発動発電機やバーベキュー用こんろなど屋外での使用が想定されている火気器具等は屋内では使用せず、火気設備・器具の使用方法を守りましょう。

○　一酸化炭素は、無色・無臭で気が付きにくい気体です。一酸化炭素を感知する警報器を設置することも有効です。

【事例２　スプレー缶のガス抜き】

傷病者はガスこんろで調理中に、付近でスプレー缶を廃棄処分するために穴をあけていたところ、その際に噴出したガスに引火し、顔面が炎にあおられ受傷したもの。（５０代　軽症）

【穴あけ・ガス抜きでの事故防止】

○　廃棄する場合は、必ず中身を使い切り、各区市町村が指定するごみの分別を守って捨てましょう。

○　厨房器具や暖房器具付近の高温となる場所や、直射日光と湿気を避けて保管し、厨房器具や暖房器具等の付近では使用しないようにしましょう。

　ＬＰＧなどの可燃性ガスは噴射剤として使われていることが多いので、使用前には必ず製品に記載されている注意書きを確認しましょう。

【事例３　洗剤の混合使用】

浴室を掃除中、二種類の洗剤を混ぜたところ、気分が悪くなった。（７０代　軽症）

【洗剤での事故防止】

○　種類の違う洗剤を一緒に使わないようにしましょう。

　塩素系洗剤と酸性洗剤を一緒に使うと、有毒なガスが発生することがあります。

○　洗剤を別の容器に移し替えることはやめましょう。

　アルミ缶など金属製の容器は、洗剤と容器が化学反応を起こし容器が破裂することや溶けることがあります。

○　使う前に容器に書かれている注意事項を確認しましょう。